

関東・中部地方の環状列石

—— 中期から後期への変容と地域的様相を探る ——

石 坂 茂

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1. はじめに | 4. 各地域における後期前半の列石遺構の様相 |
| 2. 列石遺構の分類 | 5. 列石遺構の地域的様相と中期から後期への変容 |
| 3. 各地域における中期の列石遺構の様相 | 6. おわりに |

—— 論文要旨 ——

関東・中部・東海地方においては、大規模な環状・弧状の形態を呈し、かつ列状構造を有する列石遺構は縄文時代中期末葉段階に出現し、そして後期前半まで継続することなく中期末葉という短期間で終焉することが確認できる。また、それら列石遺構の下部や区画内部には、埋葬施設が構築されることなく、直接的に墓とは関係しない遺構であったことも確実である。そして、こうした列石遺構には大規模環状列石を頂点にした祭祀の階層的様相が認められ、特定集落の柄鏡形敷石住居群との関係において存在していたと考えられる。

後期前半の堀之内1式期においては、「核家屋」の顕在化とその主体部外縁を囲繞する周堤礎に象徴される加飾傾向の中から、張出基部に連接する弧状列石が派生し、さらに堀之内2式期にはその下部に配石墓や石棺墓などの集団墓を組み込むという、特定住居+列石遺構+墓の関係が明瞭化するようになる。しかし、加曾利B1式期には特定住居との融合関係も崩壊の兆しを見せ始め、後期後半以降には列石遺構+墓に分離されると共にその構築が居住域から分立する傾向が認められるようになる。

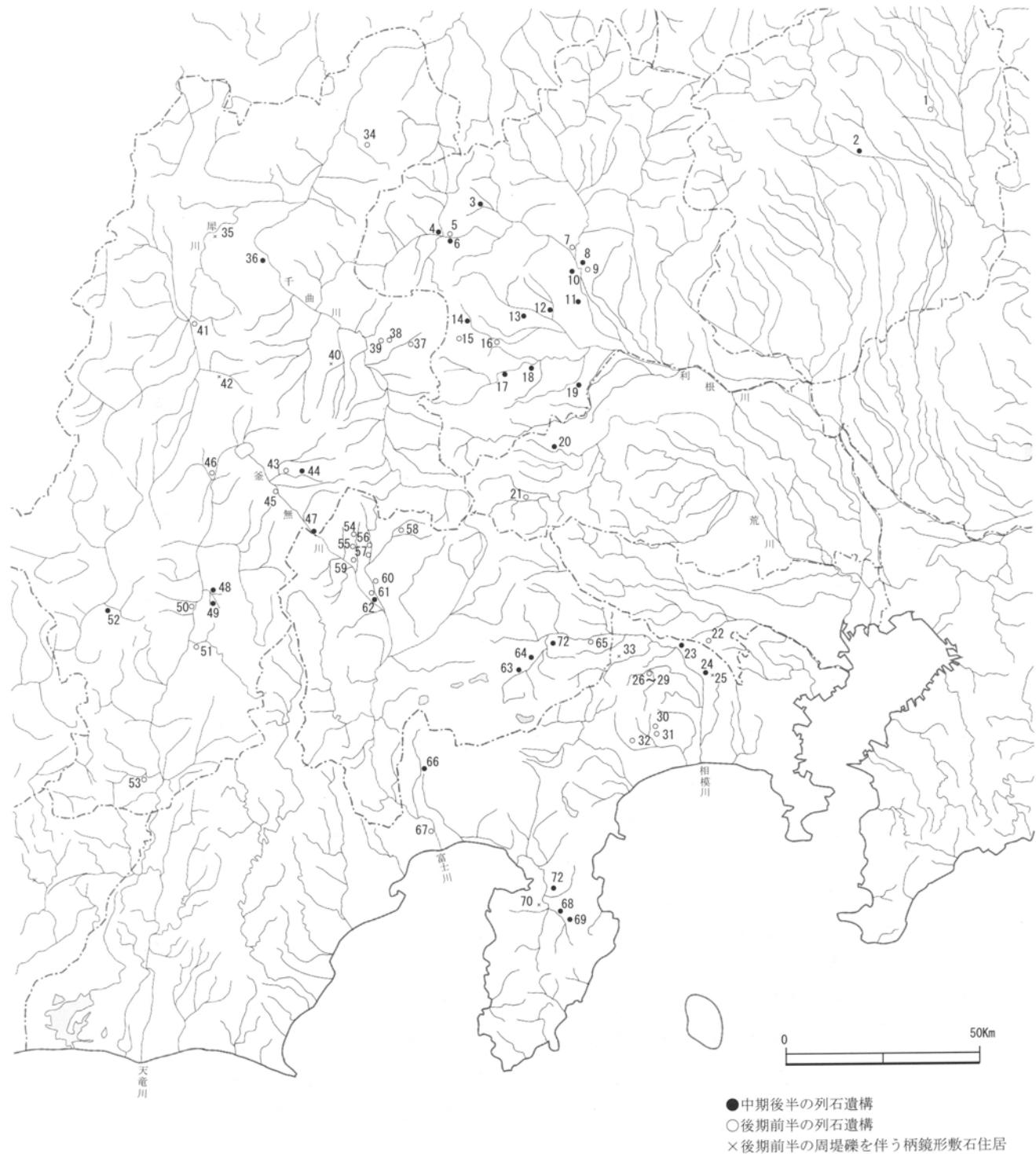
このような当該域における中期末葉から後期前半にかけた列石遺構の動向は、詳細に見れば各地域毎に若干の差異を見出すこともできるが、その差は僅少であり、ほぼ一的な文化的様相が存在していたと考えられる。また、そこには大規模環状列石による祭儀を統括・執行する特定集落の居住者群から、祖先祭祀を含む葬祭儀礼を統括・執行する特定住居=「核家屋」の居住者への移行という、階層的な社会構造の深化する過程を窺うことができる。

キーワード

対象時代 縄文時代

対象地域 関東・中部・東海地方

研究対象 環状・弧状列石



1. 真子 2. 佐貫 3. 久森 4. 坪井 5. 長野原一本松 6. 横壁中村 7. 浅田 8. 三原田 9. 前中後 10. 空沢 11. 長久保大畑 12. 白川傘松 13. 野村
 14. 坂本北裏 15. 暮井 16. 行田梅木平 17. 下鎌田 18. 田篠中原 19. 東平井寺西 20. 塚越向山 21. 入波沢西 22. 田端 23. 川尻中村 24. 当麻
 25. 稲荷林 26. 北原 No9 27. 北原 No11 28. 馬場 No6 29. 表の屋敷 30. 下北原 31. 三ノ宮・下谷戸 32. 曾谷吹上 33. 青根馬渡 34. 伊勢宮
 35. 下中牧 36. 円光房 37. 茂沢南石堂 38. 三田原 39. 岩下 40. 平石 41. 北村 42. 林山腰 43. 塩野目尻 44. 尖石 45. 勝山 46. 羽場崎
 47. 曾利 48. 小林 49. 的場・門前 50. 堂前 51. 前田 52. 大野 53. 根吹 54. 姥神 55. 金生 56. 青木 57. 川又 58. 大柴 59. 宮久保
 60. 屋敷添 61. 中田中学校 62. 後田 63. 牛石 64. 中谷 65. 塩瀬下原 66. 千居 67. 破魔射場 68. 年川前田 69. 上白岩 70. 大塚 71. 公藏免
 72. 大月

図1 関東・中部・東海地方における縄文時代中期後半～後期前半の列石遺構の分布

1. はじめに

縄文時代の環状列石は、北海道忍路遺跡や秋田県大湯遺跡などの大戦前後に発見された著名な事例だけではなく、最近の調査によっても青森県小牧野遺跡や秋田県伊勢堂岱遺跡をはじめとしたその周辺域で新たな発見がもたらされている。また、関東地方や中部地方においても、近年の発掘調査により、大規模な環状列石や弧状列石の存在が明らかとなってきており、両者の地域を中心とした分布動向が窺える。

近年、こうした事例増加に比例して、環状列石を主体とした配石遺構の祭祀構造や社会構造への論究と共に、天体運行や特定山岳との関連性追究なども行われ、活況を呈している。しかし、その一方で出現時期や系譜、機能・性格、地域的差異といった基本的課題について、解明されているとは言い難く、むしろそうした問題を深化させないまま論議が進行しているのが現状であろう。換言すれば、「まず、今までの報告例の地域的・時間的な系統化が必要である。雑多の性格を示すかに見えるこれらが、何を基本に変遷するかを見出さねばならない」(阿部 1968) という指針を踏まえるべき研究段階にある。

筆者は前稿において、群馬県域における環状列石の初現が中期末葉段階にあることや、それが柄鏡形敷石住居の出現及び拠点的な環状集落の消滅と軌を一にしていること、そして後期前半には「核家屋」に連接する弧状列石へと変化していることなどを明らかにした。また、それらの構造分析を通じて、中期末葉の環状列石が墓を伴わない祭祀的施設であり、後期前半段階の「核家屋」による葬送・祭祀儀礼の統合を契機として、列石下部に墓域が取り込まれてゆく過程を明確にするとともに、環状集落崩壊後の新たな拠点的集落の形成という観点から分析を試みた(石坂 2002)。先の指針に則れば、こうした文化的動向が、群馬県域に限定されるいわば地域的なものなのか、あるいは柄鏡形敷石住居や配石遺構が顕著に存在する関東地方西南部域や中部地方という広域を包摂する齊一的なものなのかが問題となろう。

本稿では、関東・中部地方に東海地方を加えた地域内で検出されている環状列石について、その出現期と消長、墓との関連、機能・性格、地域的差異と時期的な変容といった基本的な課題について、個別資料や各研究者の認識に検討を加えながら、その様相を探ってみたい。

尚、本文中に掲載した遺構図は、原典からの転載に当たって時期・時代の異なる遺構やグリッド線など不要なものについては削除したり、逆に無記名の遺構に名称を附加するなどの編集を行っている。また、本文中においては、研究者諸氏の敬称は省略させて頂いており、併せてご了承願う次第である。

2. 列石遺構の分類

a. 形態の分類

「環状列石」の呼称については、極めて曖昧かつ無原則に用いられており、個別資料の検討を行う前に、先ずその内容定義をする必要がある。本来ならば、明治期からの研究史を逐一踏まえて再定義すべきであろうが、それをなし得る紙幅の余裕はなく、ここでは便宜的かつ限定的に環状列石を以下の①の内容を持つ遺構として認定しておきたい。また、②の弧状列石と併せて「列石遺構」と呼称し、後段の記述の中で使用する。さらに、環状列石を分析する上で併存する他の配石遺構の分類も必要であり、これについては以下の③～⑤に分類しておく。

- ①環状列石=個々の石材が相互に連接して配列され、明確な列状構造を有する。また直径や長径が10mを超え、列石の両端が連結して明確な円環状の形態を呈する。
- ②弧状列石=環状列石と同様に明確な列状構造を有し、両端が開放して主に弧状形態を呈するもの。
- ③組石状配石=立石や丸石を中心にして径1～2mの方・円形状に石組みや配列をするもの。
- ④定形状配石=列状構造を有する点で①に類似するが、直径や長径が5m未満の方・円形状に配石するもの。
- ⑤不定形状配石=石材の配置が前記のいずれにも該当せず、散在的かつ不定形なもの。

上記の分類を若干補足すれば、①②には崩落したり、その構築が一定期間継続して最終的に積み石状を呈するものも多々存在するが、その場合でも最下部の列石をベースに積み石された状態が看取され、列状構造を持つと認定される。また、後世の攪乱等によりその一部の配列が欠落している場合でも、点在する石材の配置から認定を行っている。②の弧状列石に近似して、直線状形態のものも僅かながら認められるが、これは弧状列石に含めて把握・分類している。尚、本稿で扱っている列石遺構は、管見に触れたもののみであり、少なからず遺漏もあるが、明らかに敷石住居・集石土坑等を誤認しているケースや、組石状配石・定形状配石・不定形状配石が単独で存在する事例については扱っていない。また、当然の事ながら明瞭な列状構造を持たないにもかかわらず、「環状列石」に認定されている場合も同様に除外した。

b. 配列・構築方法の分類

列石遺構の構築方法に関しては、以下の3つに分類したが、用いる石材が亜角礫あるいは河床礫なのかによって異なる場面がある。例えば、亜角礫の場合には河床礫のように広口・横口・小口といった各部位面を呼び分けることが難しいため、その全てを乱石配列として分類している。河床礫の場合には、どの平坦面を天地置きするか、またその長・短径のどちらを連接するのかにより、幾つかのバリエーションがあるが、主体的に認められるのは下記の3つの方法である。



図2 関東地方の中晩期後半の列石遺構(1)

- ①乱石配列=石材の長・短軸を一定の方向にそろえず、ランダムに配置する。扁平・棒状化していない亜角礫を用材とする場合や、給石が継続した最終段階の列石に多見される。
- ②広口縦列=主に河床の扁平礫を用材として、その広口面を天地・長軸方向に置いて相互に連接配置する。これを複数段に積み上げた場合には、「横口積み（平積み）」となる。
- ③小牧野式=青森県小牧野遺跡や秋田県伊勢堂岱遺跡に特徴的な配列方法であり、②の「横口積み」と小口面を天地置きした立石状配置とが交互に繰り返される。

c. 規模の分類

環状列石には、直径が30mを超えるものと10m前後の2つのタイプが存在するが、前者を「大規模環状列石」、後者を「小規模環状列石」に分類する。

弧状列石については、延長が20mを超えるものを「大規模弧状列石」に、それ以下のもの（大半は10m以下）を「小規模弧状列石」に分類する。

3. 各地域における中期の列石遺構の様相

(1) 関東地方

a. 環状列石の様相

大規模環状列石 全体の規模や形態が確認されている大規模環状列石の事例は僅少であり、群馬県久森（丸山・他 1985）・野村（千田 2003）・東平井寺西（軽部・他 2001）、栃木県佐貫環状列石（辰巳 1976）、神奈川県川尻中村（天野・他 2002）を合わせた5遺跡を数えるのみである。久森・野村（図2-1・2）の状況については、前稿（石坂 2002）にて取り上げているので詳細はそちらを参照願い、その概略を記せば以下のようになる。

- ①基本的な形態は隅丸方形を呈し、長辺30～40m×短辺25～30mの規模を持つ。
- ②径30～50cm前後の礫を主要な石材として広口縦列配置による列状構造を持ち、その列石中に立石や単位的な組石状配石が挟在する。
- ③列石の下部やその区画内部には、住居・土坑等の遺構が存在せずに出土遺物も僅少だが、外縁部に焼土痕の存在や石材の一部に被熱痕を持つものが認められる。
- ④環状列石外縁の斜面上位に、1～2基の弧状列石を同心円的に配置する重層構造を持ち、同期の柄鏡形敷石住居群がともに占地する。
- ⑤上記の②④の構築方法に関連して、野村遺跡では斜面地を掘削・盛土により平易し、その盛土や掘削法面端部に少なくとも列石を3～4段に石積みしている。この石積みは強度に優れた小口積みではなく、広口縦列配置を基本に積み上げるいわば横口積みの方法をとつておらず、単に法面の崩落防止を目的としたものではなく、「小牧野式」石積みに見られるような正面觀を意識

した装飾的效果をねらっているとも考えられる。

久森・野村の両遺跡以外については、詳しく述べる必要があろう。先ず、東平井寺西遺跡（図2-4）は加曾利E3式III期～E4式を主体とした集落で、堅穴住居11棟、柄鏡形敷石住居6棟、環状列石1基、集石土坑8基、土坑65基などを検出したが、後期の遺構は皆無である。この環状列石は、古墳時代の墳墓構築による攪乱や全体の約1/2が調査対象地外のため、その形状・規模を明確には把握できない。しかし、南側へもその延長が確認されることや残存部の列石に直線的配列と90度に近い屈曲部が存在すること等を考慮すれば、長辺が約40mの隅丸方形の環状列石と認定できる。河床礫を広口縦列に配置し、部分的に複列の配置も認められる。列石の下位や区画内部には、埋設土器や土坑等を含め何ら遺構は存在しない。また時期を明示する伴出土器はないが、後期の土器をほとんど混在しない状況から、柄鏡形敷石住居に併行する加曾利E3式末～E4式段階と推定される。また、この列石の北東20mにK21号古墳との重複によりその一部を残す「1号散石遺構」が存在するが、これについては久森・野村の遺跡例のように、環状列石外縁に構築される弧状列石の可能性もある。集落内での配置関係は、環状列石の外縁上位の北側20mに柄鏡形敷石住居群が存在し、その周辺に被熱した集石土坑が散在する。

栃木県の佐貫環状列石は、長径47m×短径37mの矩形状を呈し、50～70cm大の河床礫を主要な用材として構築されている。掲載写真で見る限り、列状構造や2～3列の複列配置される箇所が認められ、その幅も0.4～2m程の広がりを持つとされているが、列石下部や区画内での他遺構の状況を含めた詳細は不明である。

川尻中村遺跡（図2-3）は、道路幅約30mの部分的調査により確認された中期中葉～末葉の拠点的な環状集落であり、堅穴住居90棟、柄鏡形敷石住居1棟、環状列石1基、集石土坑10基、埋設土器10基、土坑310基、ピット854基、焼土址3基などを検出。住居帶の内側に同時期の土坑・ピット群が配置される重層的構造を持つが、環状列石はさらにその内側に構築されるという状況にある。この環状列石はやや残存不良であるが、北・東側を中心にして30～50cm大の扁平または楕円形状の河床礫を広口縦列配置した列状構造が認められる。また、それらの延長上に点在する同様の河床礫を連結すると、図2-3に示したような長径約35m×短径28mの隅丸方形の環状列石が想定できる。この環状列石の西側外縁には、かなり多量の河床礫が散在し、特にM-4・5グリッドでは密集した状況も認められることから、何らかの配石遺構の存在が推定されるが、これが久森・野村のような、環状列石外縁部の重層的な弧状列石か否かは不明である。環状列石の石材の一部に長径1m弱の立石を思わせる棒状礫が認められ、これを中心とした組石状配石の存

在も窺える。詳述されていないが、列石下部や区画内部に他遺構は存在しないようである。環状列石の時期を明示する伴出土器はないものの、集落の継続自体が加曾利E 4式期で途絶えていることから、それを下らないことはほぼ確実である。さらに環状列石本体と住居との重複関係でみると、北辺側で勝坂式期の86号住居の上位部での構築が確認でき、当期を遡ることはない。また、前述のM-4・5グリッドに存在する配石遺構がこの環状列石と相関性を持つとすれば、同配石遺構は加曾利E 3式期後半の9号住居の上位に存在しており、これらの点を考慮すれば環状列石の構築は加曾利E 3式後半～同E 4式期ということになる。しかし、柄鏡形敷石住居の形成が加曾利E 3式期には見あたらず、加曾利E 4式期であることを重視すれば、その構築時期は同E 4式期の可能性が高い。また、当該期の柄鏡形敷石住居の検出数が1棟(91号)のみという僅少さは、未調査区域に他の同期住居が存在する可能性を否定できないものの、その住居帶構成が環状を呈する可能性は低い。環状列石と集落との関係については、「環状に配された住居跡群の内側に環状列石が位置し、その内側に土坑群が形成されている」と見ている(天野・他 2002)。前述したように、この環状列石は加曾利E 4式期に構築された可能性が高く、当該期には前段階までの環状住居帶配置は既に崩壊しており、環状列石の配置を環状集落と直接関連付けることは意味を持たない。しかし、前段階の環状集落跡地の中心部に環状列石を構築することが、環状原理や集落構成という側面で系統性を持つのか否かは重要な問題であろう。これらの点に関しては、後段にてあらためて触ることにしたい。ところで、当遺跡では加曾利E 4式期にほぼ確実に比定される遺構として、91号住居の他に環状列石の区画内側に近接する130・229号土坑の2基がある。ともに長径約1m×短径0.8m×深さ0.5m前後の楕円形状を呈し、坑底付近から鉢被り葬を思わせる逆位の深鉢土器1点が出土するなど、墓坑と推定される。他にも列石の下部や区画内部に時期の確定できない土坑が存在するが、この2例のようなものは見あたらず、少なくとも当該部位に墓坑群が集中する可能性は低い。

小規模環状列石 直径が10m前後の環状列石は、群馬県の三原田(赤山・他 1980)と坂本北裏(金子・他 1990)の2遺跡例がある。両例とも広口縦列配置を基本に配列され、列石下部や区画内部には他の遺構を伴わない。三原田遺跡1区75号配石(図3-9)は、長径約5mの楕円形状を呈し、規模的には「定形的配石」に分類すべきものであるが、他に類例がないのでここで扱っておく。部分的ながら径50cm前後の河床礫を広口縦列に配置し、長径1mの立石と思われる棒状礫が列石内に組み込まれている。時期は、加曾利E 3式後半期の1区75号住居の上位に構築されることから当該期以降の所産と言える

が、伴出土器はなく下限を決められない。仮に、中期末葉期とすれば、併行期の柄鏡形敷石住居と共に前段階の環状集落の中心部から大きく外れて北端側に偏在する状況となり、環状集落のような重層的な配置関係にはならない。

坂本北裏遺跡の環状配石遺構1(図3-8)は径10mの円形状を呈し、北側の列石内側に連接して一辺1.5mの方形組石状配石や複数の立石などが存在する。内容的には、大規模環状列石の縮小版的な様相を呈している。環状列石の用石内には、加曾利E 3式後半～堀之内1式期の土器が混在し、時期を確定できない。また、周辺には加曾利E 3式末の柄鏡形敷石住居1棟や丸石を囲繞する方形組石状配石や不定形状配石も存在するが、部分的調査のために集落内での配置関係は判然としない。

b. 弧状列石の様相

大規模弧状列石 群馬県横壁中村(藤巻 2000)・空沢(大塚 1993)・田篠中原(菊池・他 1990)、埼玉県塚越向山(小林・他 1995)など4遺跡例があり、田篠中原・塚越向山の2遺跡例は「環状列石」と報告されているが、実際の形態は環状ではなく、弧状列石に比定される¹⁾。

田篠中原遺跡(図3-5)は、加曾利E 3式後半～同E 4式期の堅穴住居2棟、柄鏡形敷石住居17棟、弧状列石1基、配石遺構30基、埋設土器12基、土坑22基などを検出した。弧状列石は径30～60cm大の河床礫を広口縦列に配置し、延長約30mを測る。列石の下部には遺構が随伴せず、区画内側の列石と近接した位置に加曾利E 3式末の埋設土器3基が存在するのみである。構築の初現・終焉期は、列石に近接する柄鏡形敷石住居や埋設土器などから、加曾利E 3式末～同E 4式期と想定される。集落内での構築位置は、その中心部に占地し、列石外縁部の上方には柄鏡形敷石住居群が配置されている。

塚越向山遺跡(図3-7)は、幅30mほどの幅狭な河岸段丘上に形成された集落で、勝坂1式～加曾利E 2式期の堅穴住居3棟、加曾利E 3式末～堀之内2式期の柄鏡形敷石住居7棟、埋設土器15基、集石土坑3基等の他に上位段丘を中心に62基の土坑が存在する。弧状列石は集落南端の最上位斜面に位置し、列石の用材内や周辺からの出土土器により加曾利E 3式末～同4式期に比定されている。規模は延長約30mで乱石配列を交えて約1mの幅員を持つが、その最下部には部分的ながらも複列の広口縦列配置が認められ、積み石の崩落や継続的な給石によりその幅員を拡大したことが窺える。この列石内には、0.6～1mの間隔で7基の立石を配置するとされているが、下部には何ら遺構は存在しない。また、この列石の南側5mに近接して小規模弧状列石の6号配石が存在し、走行方向の類似性から両者は併存すると推定される。弧状列石が囲繞する斜面下方には、僅かながら丸石を囲繞する一辺50cmの方形組石状配石の3号配石や、不定形

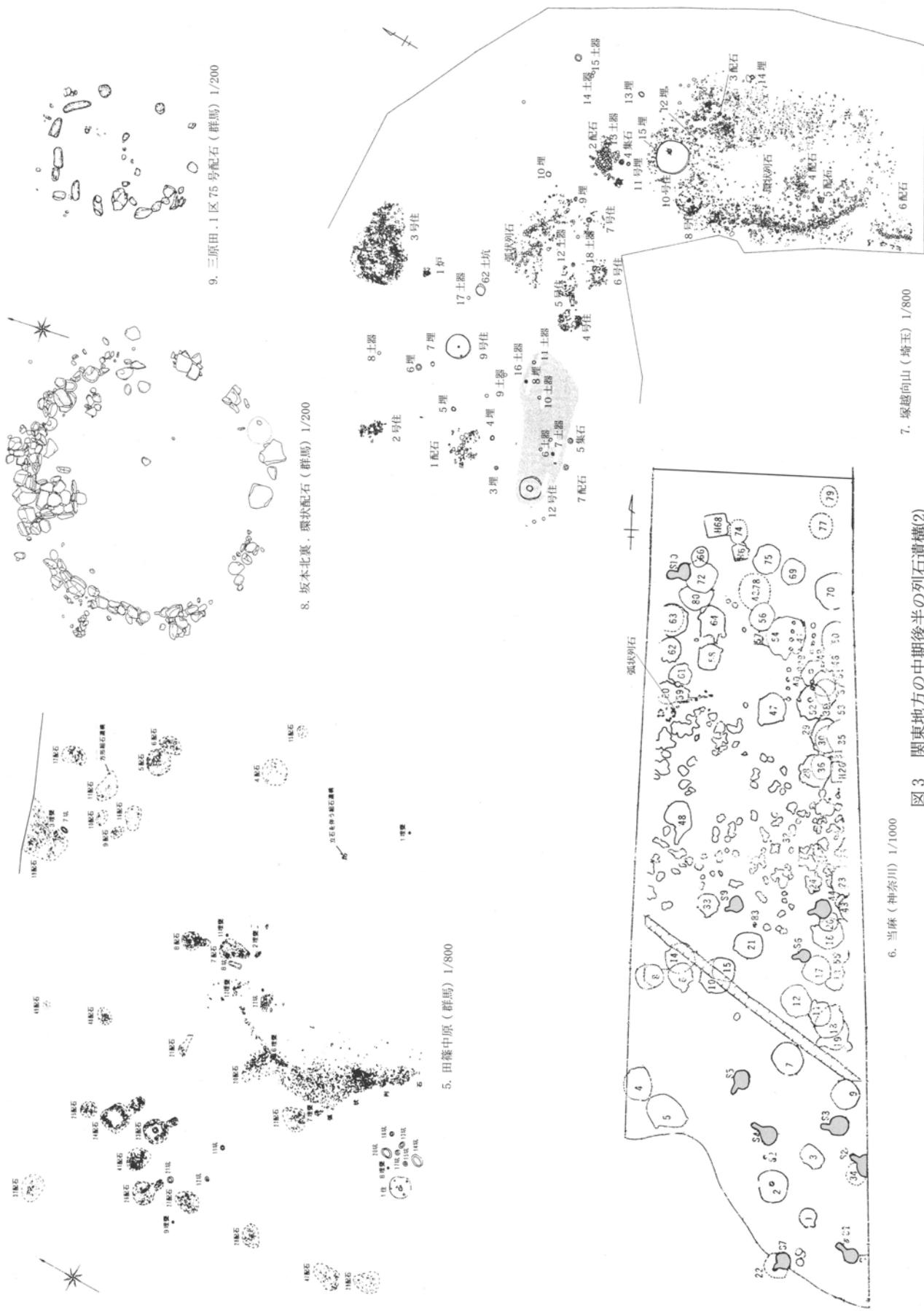


図3 関東地方の中期後半の列石遺構(2)
7. 塚越向山(埼玉) 1/800

図3 黒東地方の中期後半の列石遺構(2)

状の4・5号配石が存在する。また、弧状列石の北端には加曾利E4式期の8号敷石住居が近接し、両者の有機的関係も窺えるが、同時期の柄鏡形敷石住居3棟（2号配石、4・6号住居）はその20m北側に集中している。これに類似するのは、田篠中原遺跡の7号配石とされた柄鏡形敷石住居と弧状列石との関係である。やはり同時期の柄鏡形敷石住居はその西側20mに群在し、また弧状列石の前方部に立石を伴う組石状配石が位置するなど、両遺跡に共通した原理的な存在を窺わせる。尚、塚越向山では、加曾利E4式期の6号住居の炉内に据えられた注口土器内から、黒曜石の石核3点（110～437g）や原石5点（6～20g）と、素材剝片8点の他にチャート剝片2点、磨製石斧10点等が出土している。炉の使用されていない時点でのストックかあるいは儀礼的な埋納とも想定されるが、いずれにしても当遺跡が稀少物資の交易拠点としての機能を担っていた点は重要であろう。

横壁中村・空沢の2遺跡例は、延長30～50mほどの規模を持つ弧状列石であり、基底をなす広口縦列配置の列石上部に給石を繰り返したことにより幅1mほどの積み石塚状を呈し、しかもこうした列石2基が約10mほどの間隔を置いて集落端部の斜面下位に平行配置されている点が特徴的である。両遺跡共に未報告なこともあって詳細は不明だが、中期末葉段階の時期が想定されており、集落の中心部に構築される先の田篠中原の事例とは、機能・性格的にも異なることが推察される。

小規模弧状列石 かなり多数の遺跡でその存在を確認することができるが、代表的なものとして群馬県坪井（富田 2000）・長久保大畑（田村・他 2000）・白川傘松（関根・他 1997）・下鎌田（大賀・他 1997）、神奈川県当麻（鈴木・他 1977）などの6遺跡例がある。これらの弧状列石には、大規模弧状列石に見られるような立石や組石状配石を挟在させる事例はなく、また広口縦列を基本とする列石下部からは、土坑や埋設土器などの遺構は検出されていない。白川傘松・下鎌田・当麻の4遺跡例は、中期後半の拠点的な環状集落地内に形成されるものであるが、ここでは当麻遺跡と白川傘松遺跡を分析する。

当麻遺跡（図3-6）は五領ヶ台式～称名寺I式期の集落で、竪穴住居79棟、柄鏡形敷石住居10棟、弧状列石1基、配石遺構9基、埋設土器17基、土坑多数、墓坑5基、集石土坑5基等を検出。道路幅40mでの集落中央部を縦貫する部分的調査であり、その全体規模や構成内容は不明。弧状列石のD・E-6・7区配石遺構は、残存不良であるが、延長約10mにわたって径40～50cm大の河床礫を広口縦列に配置し、下部に遺構を伴わない。時期は遺構構築面から中期後半と推定されているが、それを明示する伴出遺物はない。集落内での構築位置は、住居帶と中央部の土坑群帶との接点付近に挟在し、弧の内側を集落中心部へ向けている。一見すると環状集落の重層構

造に規制されるかのようあり方を呈するが、列石の併行期と思われる加曾利E3式末～同E4式期にかけての柄鏡形敷石住居は南端側に集中・偏在し、当段階の集落形態は非環状である。また、弧状列石を挟んでこれらの住居群と対向する位置に加曾利E4式期の10号敷石住居が孤立的に存在し、未調査区域にも当該住居の存在する可能性はあるが、極めて散漫な分布状況から前段階のような環状形態をとる可能性は低い。9基の配石遺構は、組石状配石2基の他は全て散在的かつ不定形なものである。時期については、弧状列石と同段階とされているが確証はなく、集石土坑と共に弧状列石の北側や柄鏡形敷石住居の近縁に散在している。

傘松遺跡は、勝坂2式～加曾利E4式期にかけての竪穴住居51棟、柄鏡形敷石住居14棟、弧状列石2基等を検出したが、当麻遺跡と同様に道路幅40mでの集落中央部を縦貫する部分的調査であり、集落全体の規模や構成内容は不明である。弧状列石は、延長20m弱の1・2号配石と約4mの7号配石であり、前者は環状集落の中央部付近に、後者は東側の住居帶中に構築されている。時期的には住居帶の環状配置が崩れた加曾利E4式期と想定され、中央部に位置する1・2号配石の北側に近接して同期の柄鏡形敷石住居（II地区1号）も存在することから、前段階の集落規制とは無関係であることがわかる。ただし、弧状列石と柄鏡形敷石住居の構築が、2地点に分散している点は注目される。

（2）中部地方

a. 環状列石の様相

「環状列石」あるいは「環状配石」と呼称される配石遺構の検出された遺跡には、長野県茂沢南石堂（三上・他 1968、上野・他 1983）・円光房（原田・林 1990）・的場門前（木下・他 1995）・大野（百瀬・佐々木 2001）、山梨県牛石（奈良 1986）などの例がある。しかし、これらの中で明確な列状構造を持ち、かつ環状形態を確認できるのは牛石遺跡のみであり、他は弧状列石や環状的に配置された小配石群である²⁾。

大規模環状列石 牛石遺跡の「大環状配石遺構」とされた環状列石（図4-1）は、北辺の配列が散在的であるが、構築当初の列石は長径約50mの隅丸方形状に全周していたと想定される³⁾。隅丸方形の各コーナー付近には径2～4mの3基の円形状配石（第1～3号配石）が、また各辺内には単位的な径1m前後の組石状小配石が挟在し、これらを連結して列石が構築されている。組石状や定形状の小配石は30数基が検出され、列石の区画内側にも存在するが、いずれも列石に近接して構築されて中央奥部にまで入り込むものはない。またこの下位に曾利V式期の埋設土器を伴うものがあり、環状列石の構築時期を示すと推定される。列石の構築状況は、径20～30

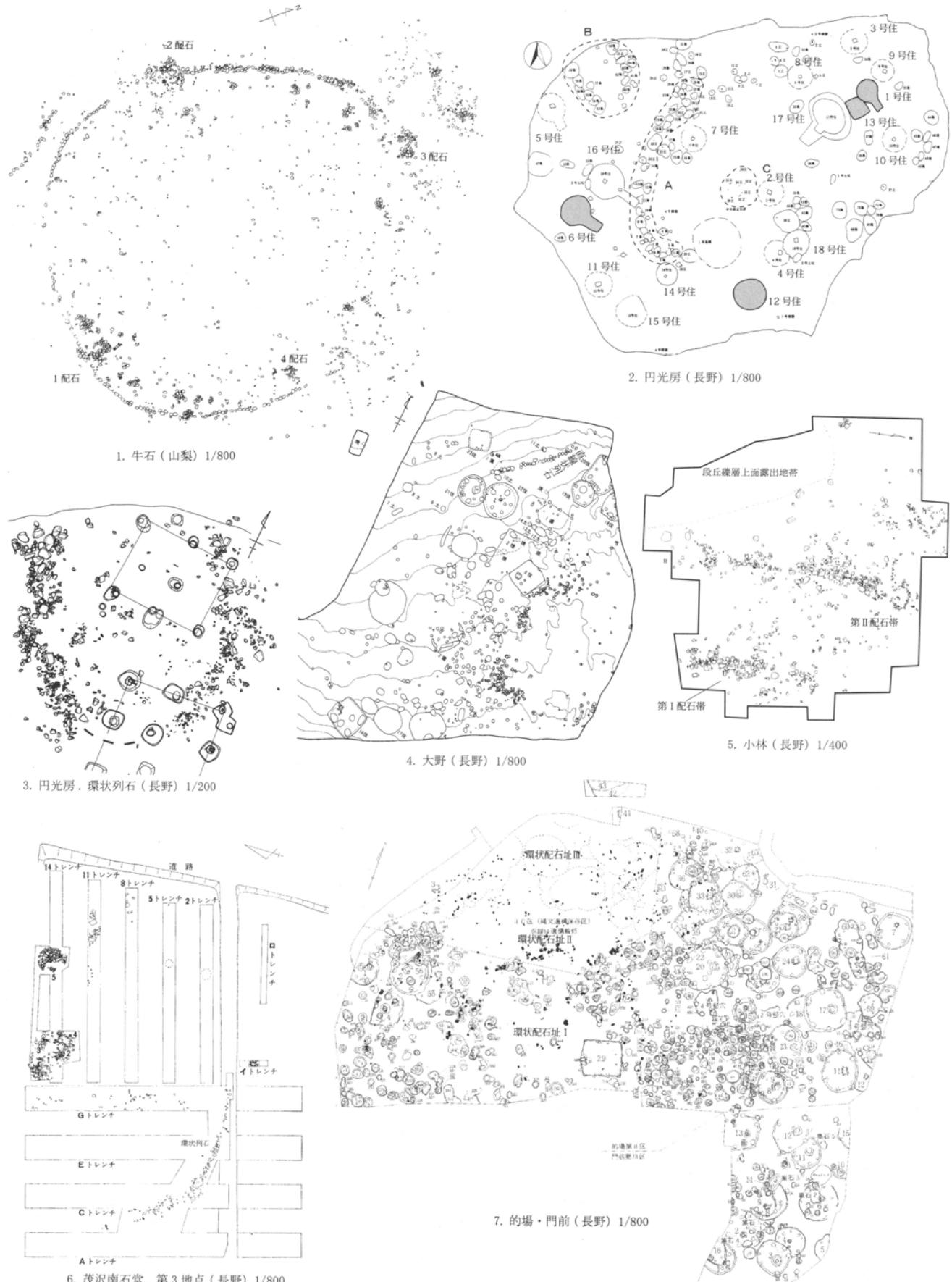


図4 中部地方の中期後半の列石遺構(1)

cm大の河床礫を広口縦列配置するが、部分的に西辺で数段に横口積みした状態や複列配置も観察できる。また、南西隅約4mに近接して延長10m強の弧状列石が存在し、同心円状の重層的配置が意識されている。これらの列石下部は未調査であるが、その区画内側エリアを含めて土坑などの遺構は存在しないとされている。環状列石からやや離れたその外側周辺部（第1・2・5配石区）には、同時期の配石遺構が検出され、特に第1・2配石区では加曾利E4式の埋設土器が伴出するなど柄鏡形敷石住居の可能性も窺える。また、列石に組み込まれた先の円形状配石については、敷石住居の可能性も指摘されているが（石井 1998、櫛原 2001）、炉の痕跡は認められないようであり⁴⁾、住居とは機能・性格の異なる遺構と思われる。いずれにしても、1985・1986年の農道改良工事に伴う調査で、環状列石の外縁部に曾利IV・V式期の竪穴住居が検出されており、環状列石の外縁に併行期の集落が存在すると考えられる。

小規模環状列石 長野県円光房遺跡の1例のみであるが、山梨県後田遺跡例（山下 1989）を当地域における列石遺構の溯源的なものとする見解もあり（佐野 1999）、一緒に扱っておきたい。また、円光房遺跡の環状列石（図4-3）は、大規模な弧状列石と併存しているので後段にて一括し、先ず後田遺跡の事例を見ることにする。同遺跡（図5-8・9）は北後田遺跡（山下 1990）の南側に近接して存在し、本来両遺跡は一体のものである。北後田遺跡では、部分的調査ながら曾利II式～称名寺I式期にかけての竪穴住居15棟を検出し、後田遺跡の3棟を含めその分布状況から環状集落と推定される。後田遺跡の2基の配石遺構は、この集落の東南側外縁部10～30mに近接し、C区1号配石遺構が2号配石遺構の東側15mに位置する。1号配石遺構は、径40～70cm大の扁平な河床礫を主体にその平坦面を天地置きして長・短径5.5mの楕円形状に敷設するが、その中央部の直径1.5mの範囲は石敷きが存在せず空間部となっている。各石材相互に明確な列状配置が認められない点で、列石遺構に分類することはできない。配石の下部から勝坂2式・曾利I式・曾利III式の3点の土器（片）が存在するが、土器の直上に配置された用石との関係から、南東外縁に存在する曾利III式土器が伴うとされている。2号配石は、1号と同様の石材を一辺8mの方形状に敷設し、さらにその左右に長さ10mのヒゲ状の配石が付設される。方形状配石の用材には長径80cm前後の棒状礫が存在し、立石の可能性も窺える。その中央部には、1号と同様に4m四方の空間部が存在する。配石の構築は、ヒゲ状の配石部では部分的ながら広口縦列配置による列状構成が認められるが、方形状の石敷き部では不明瞭である。また、この列石的な配石は、径1m前後の不定形な小配石10基ほどの集合体として構成される状況も看取され、その下部から

出土した曾利IV～V式の12点の埋設土器により、その構築が数期にわたる継続的なものとする分析もある（佐野 1999）。この埋設土器については、小児の埋葬施設との見解も示されているが（新津 1999、佐野 1999）、人骨等は検出されず断定できない。また、周辺部を含めて土坑などの遺構も存在しない。1・2号とともに、内容的には環状列石や弧状列石との類似点は少なく、方・円形状配石部の敷き石面の状況はむしろ敷石住居に近似すると言えるが、炉や柱穴は存在せず住居としての可能性は低い。いずれにしても、中部地方だけでなく関東地方でも類例が無く、極めて特異な配石遺構と言えよう。

b. 弧状列石の様相

大規模弧状列石 長野県円光房（原田・林 1990）・小林（林 1990）・茂沢南石堂（三上・他 1968、上野・他 1983）・的場門前（木下・他 1995）・前田（酒井・他 1984）の5遺跡例があるが、茂沢南石堂遺跡と前田遺跡は中期末葉の可能性があるものの確定的ではない。ここでは残存不良な前田遺跡を除く4例について記述する。

円光房遺跡（図4-2）では、A地区から加曾利E3式末・同E4式・堀之内1式・同2式期などの竪穴住居・柄鏡形敷石住居が18棟と、「立石址・集石址」とされた約100基の配石遺構が検出されている。報文中では、これらの配石遺構は第1～4グループに分割される直径30mの「弧状列石址」と、その中心部の「中央部立石址群」として認識されている。しかし、掲載写真や平面図を見る限り、列状構造をもつ配石遺構は図4-2に示したようにA・Bの2カ所のエリアに限定されており、この2カ所を列石遺構と認定しておきたい。Aグループでは、後世の掘立柱建物との重複もあり断続的な状況だが、南側から北側へと延びる1～28号集石址にかけて広口縦列配置を主体とした列石が認められ、全体的には延長約28mの大規模弧状列石と考えられる。ただし、その東側延長上にも1～13号立石址が点在し、これらをも含めた場合には延長40m近い規模となる。この列石中には立石や組石状配石が存在し、単位的な立石や小配石を連接して弧状列石が構成されている。この北西側約8mに近接する53～66号集石址のBグループは、1号掘立柱建物との重複や未調査部分もあってやや不明瞭だが、径7mの小規模環状列石と推定される。列石内には立石（25号立石址）を含んでおり、先のAグループの弧状列石と同様に単位的な小配石を連接していると考えられる。Cグループは30～35・38号立石址により構成され、位置的には弧状列石Aグループの区画内側約13mの中心部に密集している。これら立石址の巡りには石敷き状の配石が認められ、立石を中心とする組石状配石群が存在していたと推定される。A～Cグループや各配石遺構は、保存措置によりその下部の遺構状況は不明だが、環状列石Bグループの区画内側や弧状列石Aグループに近接したその区画内・

外に、土坑などの集中する状況は認められない。このA地区では後期前葉の住居が混在しており、各配石遺構の時期は確定的ではないが、Cグループの立石群を始め多くの多くから加曾利E 4式期の土器片を出土しており、当該期に比定される可能性が高い。これらの配石遺構が中期末葉段階に同時併存すると仮定すれば、大規模弧状列石Aが囲繞する中央空間部に立石を伴う組石状配石Cが存在し、弧状列石を挟んでそれと対向する位置に小規模環状列石Bが構築されるという構造を想定できよう。これに併行する柄鏡形敷石住居は、弧状列石外縁の東・西・南の3方に散在し、列石区画内部に存在しない点が注意される。一方、加曾利E 3式末葉期や堀之内1～2式期の住居は、弧状列石Aとの重複や区画内側および中央部にまで侵出し、先の配置構造を無視したあり方を示している。このような遺構配置や称名寺式期が欠落する状況を考慮すれば、A～Cグループの配石遺構の構築は、加曾利E 4式期を中心とした時期と推定され、堀之内1式期まで継続的に行われた可能性は低い。ただし、中期末葉段階の大規模弧状列石において、その区画内側中心部に立石群を伴う例は他になく、これらの遺構組成が妥当なものか否か今後の事例を待っての検証が必要である。

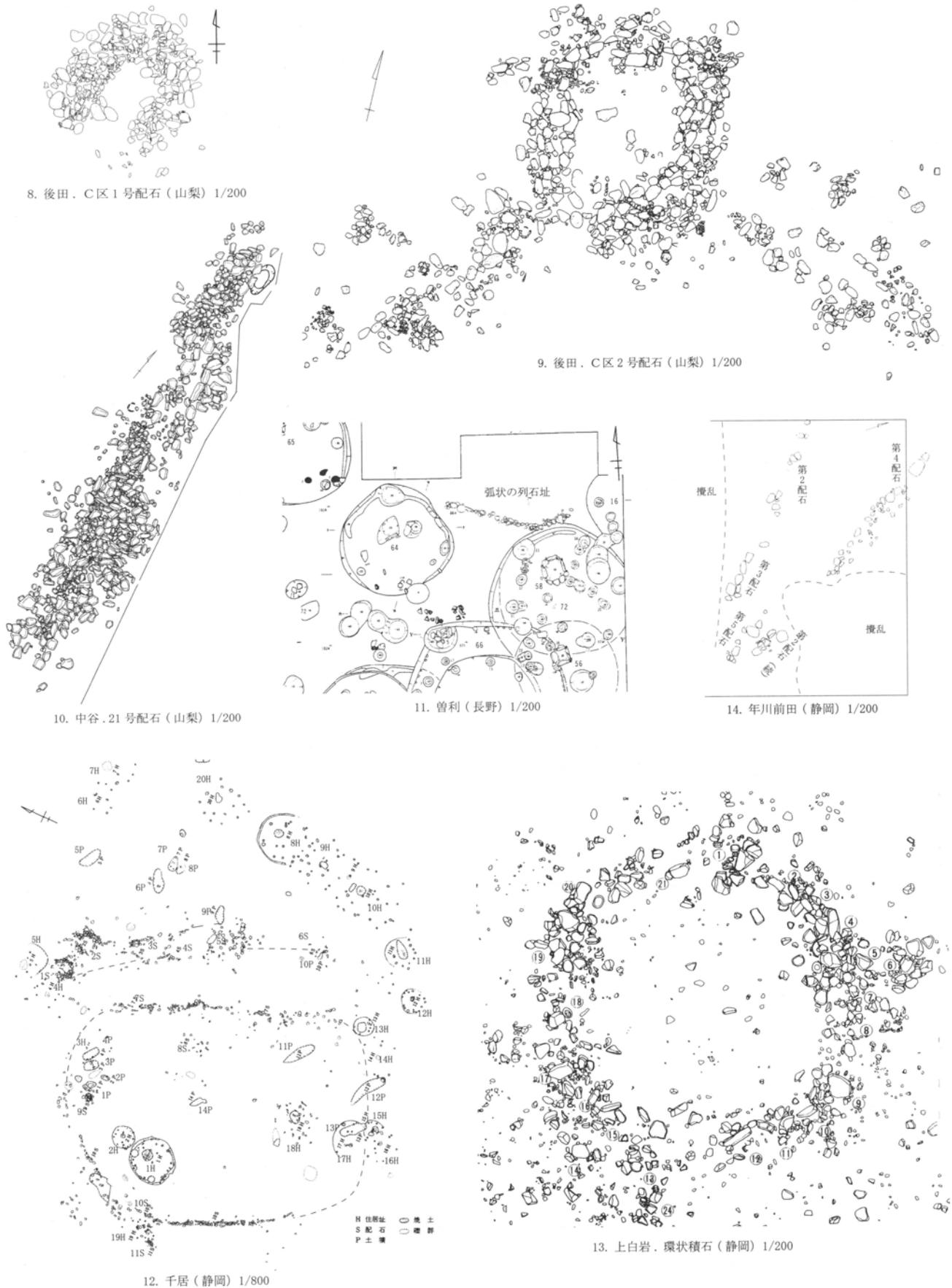
茂沢南石堂遺跡（図4-6）は、加曾利E 3式～加曾利B 1式期の集落で、竪穴住居4棟、敷石住居11棟、環状列石2基、小配石4基、石棺墓6墓、集石土坑2基、土坑3基などを検出。弧状列石は、第3地点で「環状列石」と呼称された遺構であるが、図4-6のように形態的には明らかに弧状であり、掲載写真から不定形な亜角礫を乱石配列した列状構造を持つと判断される。延長約25mの規模で、列石下部や住居以外の遺構状況は不明である。周辺からは、加曾利E 4式～加曾利B 1式の土器片が混在出土し、時期を特定できる状況にはないが、中期末葉以降の所産であろう。この弧状列石の区画内側へ約30m離れて、後期とされる柄鏡形敷石住居が集中するが、この時期も確定的ではない。両者が同時期とすれば、内容的には集落外縁の斜面下位に構築される事例であろう。

小林遺跡（図4-5）では、約400m²の狭小な調査範囲から、「第I配石帯」と「第II配石帯」と呼称された列石遺構2基を検出。「第I配石帯」は長さ約20m、「第II配石帯」は長さ10mで共に幅1mの規模を持ち、径30～50cmの河床礫を広口縦列配置した列状構造を有する。これらの列石は、弧状に湾曲しつつ相互に7mの間隔を置いて平走し、重層的配置と推定される。調査範囲外にも広がると考えられるが、周辺部は破壊により詳細不明である。内容的には特に取り上げる必要はないが、注目されるのはその帰属時期が中期初頭とされている点にある。その根拠となっているのが、「第II配石帯」の列石下に検出された、中期初頭の梨久保式土器を伴出する1号土壙

の存在である。しかし、この土坑1基をもって列石の時期比定をすることは、少なからず問題がある。なぜなら、この土坑の形成が列石とは無関係になされ、偶然に重複関係が生じた可能性を否定できないからである。列石周辺の出土土器の中には、梨久保式だけでなく中期後葉第III・IV期が320点も存在し、これらとの関係も当然考慮する必要がある。また、1号土壙と認定されたものも、2.8×2.2mの隅丸方形を呈し、深さ20cmで底面がフラットな状態を示すなど、内容的には土坑というよりも竪穴住居に近似した遺構である。いずれにしても、これらの列石遺構が確実に梨久保式期に構築されたと断定するには無理があると言えよう。

的場・門前遺跡（図4-7）は、中期中葉～末葉を主体とする拠点的な環状集落で、その東半部を調査して竪穴住居75棟、「環状配石址」3基、集石土坑4基、土坑577基などを検出。住居帯の内側に土坑群帯、配石遺構群などが存在する。「環状配石址I・II・III」の3基の配石遺構は、重層的な3帯構成とその外帯が直径75mの規模とされているが、内容的には「環状配石址II」を除いて極めて散在的である。また、それらの中間に位置する「環状配石址II」も、立石を付随する径1m前後の組石状小配石15基が、相互に3～4mの間隔をあけて直径30mの弧状に配置されたもので、意図的な配置状況ではあるものの、少なくとも列状構造や環状形態を呈していない。この「環状配石址II」の配石下部には基本的に土坑などが伴わず、区画内部にも数基の組石状配石が存在する以外は、他の遺構は認められない。これら配石遺構の時期は、周辺遺構との関係から中期後葉末とされているが、明確な伴出遺物が無く確定的ではない。仮にその時期が中期後葉IV期とすれば、当該期の竪穴住居5棟（14・21・22・39・55号）は、「環状配石址II」の北側5～10mに散在し、その近縁には上部配石を伴う墓坑（191・358号）などが認められる。集落範囲の約1/2が未調査ではあるが、確認された住居棟数から見て当段階の集落形態が環状を呈する可能性は低い。しかし、住居と配石遺構の配置関係には重層的な状況も看取され、前段階の環状集落の構成原理を踏襲している可能性もある。また、称名寺I式期が柄鏡形敷石住居ではなく、加曾利E 4式期の住居も欠落している点は留意を要する。

小規模弧状列石 長野県大野（百瀬・佐々木 2001）・尖石（宮坂 1957）、山梨県屋敷添（佐野 1993）・中谷（長沢・他 1996）・中田小学校（山下・他 1985）・大月（笠原・他 2000）・宮久保（村松・他 1999）などの7遺跡に認められる。ここでは比較的内容を把握できる大野・中谷の遺跡例を検討してみよう。大野遺跡は中期中葉～後半（井戸尻III式～唐草文III期）にかけての集落で、竪穴住居6棟、掘立柱建物2棟、直線状列石1基、「環状列石」1基、集石（小配石）1基、屋外埋甕1基（晩期1基を



除く)、土坑多数基を検出したが、保存措置により「環状列石」下部やその周辺に存在する土坑については未調査である。また、部分的調査のために集落の全容は判然としないが、墓域を中心部に置いて掘立柱建物域・住居帶などを同心円状に配置する重環状構造を持つとされている。ただし、一時期の集落規模は1~2棟前後であり、10数棟で構成される中期後半段階の環状集落とは異なる。「直線状列石」については、径30~60cm大の河床礫40個を用いて主に広口縦列配置された明瞭な列状構造を有し、延長13.5mが確認されている。列石内には立石や単位的配石などは存在せず、位置的には住居帶外縁の下位斜面部に、ほぼ等高線に平行する状態で配置されている。このような住居帶の外縁部に構築される状況を、中央部墓域・住居帶・掘立柱建物などの配置と関連させて、集落の重層的構造の中で把握されている。一方、「環状列石」と認定されている遺構は、この列石遺構と同様の河床礫を用いて内径17m、外径22mの隅丸方形状に構築されないと推定されている。しかし、詳細に観察すれば複数の単位的な小配石が住居帶の内側に環状的に配置されるものであり、明瞭な隅丸方形の形態や個々の小配石を相互に連接するような列状構造は認められない。つまり、本稿で設定した環状列石の規定からは逸脱するものであり、むしろ列状構造を持たない小配石群が重層構造の空間規制により環状配置された状態と考えられる。また報文では、この小配石群の下部や周辺に存在する土坑を墓坑群と認定し、住居数に対して多すぎることから、これを「伊奈川水系の同時期の複数の集団・集落群の共同作業によってはじめて建設が可能となった共同墓地であり、共同的な祭祀の場であった」(佐々木 2001)としている。列石下の土坑が同時期かつ墓坑であるとの確証はなく推論の域を出ないが、この見解を踏まえた場合でも、標石的な小配石を伴う墓坑群が環状配置された様態として理解することができよう。これらの直線状列石と「環状列石」は、共に同一時期として「中期中葉の新しい段階~後葉」とされている。未調査に起因して、その時期を明示するような出土土器はなく、周辺の住居や土坑等の時期から見ての状況証拠による推定であるが、中期末葉から後期前半にかけての出土土器は皆無である。現段階では、この直線状列石が明確な列石遺構として関東・中部・東海地方を含めた地域の最古例の可能性があるが、19号住居の綾杉沈線文を地文とする埋設土器は、唐草文系IV期にまで下る可能性があり、帰属時期については検討すべき余地を残している。

中谷遺跡は、1979年の中央自動車道建設に伴う調査と1993年のリニア建設に伴う調査が行われ、中期後半~晩期初頭にかけての集落が検出されている。列石遺構も複数基存在するが、ここでは1993年の調査内容について検討する。当調査では、曾利II・IV~V式期、堀之内1~2

式期の竪穴住居と柄鏡形敷石住居が16棟、配石遺構23基、土坑40基、集石土坑15基、埋設土器5基、屋外炉5基などを検出している。23基の配石遺構の中で曾利IV~V式や加曾利E4式、堀之内1式等の土器を伴出するのは、5・6・12・16・17・20・21・23・24号などであり、12・16・17・20号は組石状配石、21号は直線状列石、他は不定形かつ散在的な配石である。21号配石(図5-10)は長さ19m、幅4mの直線状を呈する。部分的ながら基底の配列に列状構造が認められ、継続的な給石・積み石により幅員の拡散した列石遺構と考えられる。列石中央の下部には埋設土器1基が存在し、また北端に底部穿孔土器1点を伴う墓と想定される橢円形の土坑が近接している。これらの土器から、列石の構築時期は曾利IV式期に比定されるが、同V式期まで継続した可能性が高い。集落との位置関係は、21号配石が住居帶の外縁部に構築され、先の組石状配石や上部に標石状の小配石を施す墓と思われる土坑(6・15・18・37・39・40・42号)が住居周辺に散在している。

(3) 東海地方(静岡)

a. 環状列石の様相

大規模環状列石 現在のところ、大規模環状列石と認定し得る事例は、静岡県千居遺跡(小野・他 1975)のみである。千居遺跡(図5-12)では、中期後半~末葉の竪穴住居20棟、配石遺構11基、土坑14基などを検出している。竪穴住居は直径40~50mの環状に配置され、小規模ながら環状集落と考えられる。この住居帶の配置から南西方向に約30mずれて、広口縦列配置による列状構造をもつ第3・4・7・10配石が存在する。各配石遺構の残存状態はあまり良くないが、点線で加筆したように第7・第10配石は長辺42m×短辺32mの大規模な環状列石を構成し、長円形の環状配石とされた第3・4配石は環状列石の外縁部に重層的に配置される2単位の弧状列石と想定される。この環状列石の全体形状は、直線状の配列を含む第7・10配石の走向から隅丸方形を呈すると考えられ、残存良好な南西側部分では2~3列の複列配置や立石も認められる。南西隅には立石を伴う組石状の第11配石が近接するが、元来この環状列石と一体の単位的な配石であった可能性もある。この外縁部にある2単位の弧状列石は、環状列石の北東辺から斜面上位方向へ約8mの距離を置いて第4配石が、さらにその北東約3mに第3配石が存在する。その規模は、第4配石では検出延長が約9mであるが、点在する南北の石材を連結した場合には第1配石から第5配石を結んだ約30mを想定できる。また、第3配石は検出延長約12mであるが、同様に第2配石までを連結した約20mが想定される。これらの弧状列石の端部に位置する第1・2配石は、比較的扁平な礫を径3~4mの円形状に敷き詰めており、炉や

柱穴の痕跡は確認されていないが、敷石住居の可能性も指摘されている（石井 1998）。内容的には、山梨県牛石遺跡の環状列石コーナー付近に組み込まれた円形状配石遺構に類似しており、相互に共通した機能・性格を有する可能性もある。仮にこれらが敷石住居とすれば、第1配石（住居）は弧状列石の第4配石と、第2配石（住居）は弧状列石の第3配石と、それぞれ融合的関係にあると理解することができる。また、やや散在的で残存不良の第5配石については、第4配石の弧状列石を構成する単位的な小配石と考えることもできるが、第1・第2配石と同様に敷石住居の可能性も想定される。これらの環状列石や各遺構の時期は、いずれも曾利IV～V式期の土器が混在し確定できる状況にはないが、環状列石と位置的に重複して曾利IV～V式古段階の土器を伴出する1～3・13～19号住居の様態から見て、当該期には未だ環状列石が構築されていない可能性が高い。また、弧状列石と連接する第1・2配石や周辺での出土土器が曾利V式新段階を主体として後期に下るものが無いことを重視すれば、環状・弧状列石を含めた配石遺構の構築は曾利V式の新段階という比較的短い時間内で行われたことが推定される。当該期の住居には、第1配石の北側に近接する5号住居を想定できるが、これも確定的ではなく、先の第1・2・5配石を住居に認定したとしても集落規模は2～3棟の小さなものと言えよう。ただし、これらの住居配置が環状列石の上位にある弧状列石の近縁に集中する点は、群馬県久森・野村などの集落とほぼ同一の様相を呈している。環状列石の下位に土坑等の遺構は存在しないが、東側と北側の列石内側に近接して不定形かつ散在的な第8配石と丸石を囲繞する径1.5mの円形状組石の第9配石が存在する。第9配石のような組石状配石が区画内側に位置する例は、山梨県牛石遺跡にも認めることができ、環状列石に随伴する遺構と判断される。また、第9配石に近接する墓坑的な第1～4土壤については、時期的に前出するとしており、環状列石に随伴する可能性は低い。前述のように、これらの環状列石や弧状列石が構築される前段階には、曾利IV式古段階～同V古段階にかけての20棟の竪穴住居による環状集落が存在している。位置的には、環状集落の中心部が環状列石の中心部より20mほど北東方向にずれて、少なくとも両者は同心円的な重層関係にはない。

小規模環状列石 上白岩遺跡（斎藤・他 1979、小野・他 1992）での2例とその一部を検出した修善寺大塚遺跡（小野・他 1982）の例も含めれば3例が存在するが、確実なのは上白岩遺跡だけである。上白岩遺跡は、史跡指定により遺跡全体の詳細な内容は不明であるが、当域の中では拠点的集落に位置付けられている。中期後半から後期中葉にわたる集落で、住居10棟、配石遺構25基、環状列石2基、土坑250基、埋設土器5基などを検出。竪穴

住居や敷石住居は、そのほとんどが加曾利E3～E4式期および称名寺1式期とされており、配石遺構の時期も当該期に比定されている。第1・9次の調査で加曾利E4式期とされる小規模な環状列石を各1基検出したが、9次は約1/3程度の部分的検出にとどまる。第1次での環状列石は、直径12.4mの円形状を呈し、単位的な20基の組石状小配石を広口縦列や乱石積みによる列石で連結する。列石の北西側では径50cm大の礫が集中し、扁平状礫を立石状や積み石状に配置している。列石下部や区画内部には、何ら遺構は存在しない。

b. 弧状列石の様相

小規模弧状列石 延長が20mを超える大規模な弧状列石の検出例はなく、小規模なもののみが認められる。年川前田（小野・他 1979）・上白岩（前掲）・公蔵面（漆畠・他 1990）の遺跡例があるが、ともに狭小な部分的調査によりその一部を確認したのみである。年川前田遺跡（図5-14）では、B・D地区に集中して配石遺構9基、土坑20基、埋設土器10数基などを検出したが、住居は確認されていない。配石遺構の中で、第2～5配石遺構は列状構造を有する弧状列石と推定されるが、第6～第10配石遺構は下部に橢円形状の墓坑を伴う配石墓の可能性が高い。第2と第3、第4と第5の配石遺構はそれぞれ一体のものと考えられ、相互に2～2.5mの間隔を置いて並走している。部分的調査や攪乱により全体形状等は不明だが、重層構造を持つ列石遺構と言えよう。列石下部には何ら遺構は存在しないが、第4・5弧状列石の区画内側（東側）に、第6～9の配石墓が密集して存在するようであり、時期はその近縁から出土した埋設土器などから、曾利IV～V式に比定されている。

4. 各地域における後期前半の列石遺構の様相

(1) 関東地方

a. 列石遺構の様態

中期末葉段階に認められた直径が30mを超える大規模な環状列石は、後期初頭まで継続的に構築されるケースを含めて、現在までのところ全く検出されていない。確認されている列石遺構は、大・小規模の弧状列石を主体に直径10m以下の小規模環状列石が僅かに存在するという状況である。また弧状列石には、規模の違いと共に柄鏡形敷石住居や墓坑・配石墓との融合・一体化という新たな動向が存在し、中期末葉とは異なった展開を見せており。ここでは、柄鏡形敷石住居や墓域との関係性の有無を主体に、列石遺構の様態を探ってみよう。

b. 弧状列石の様相

柄鏡形敷石住居と連接する弧状列石 代表的な事例は群馬県横壁中村（前掲）・浅田（石井 2000）・前中後（長谷川 1993）・行田梅木平（間宮 1997）・暮井（大江 1990）、神奈川県下北原（鈴木・他 1997）・三ノ宮下谷戸（小出

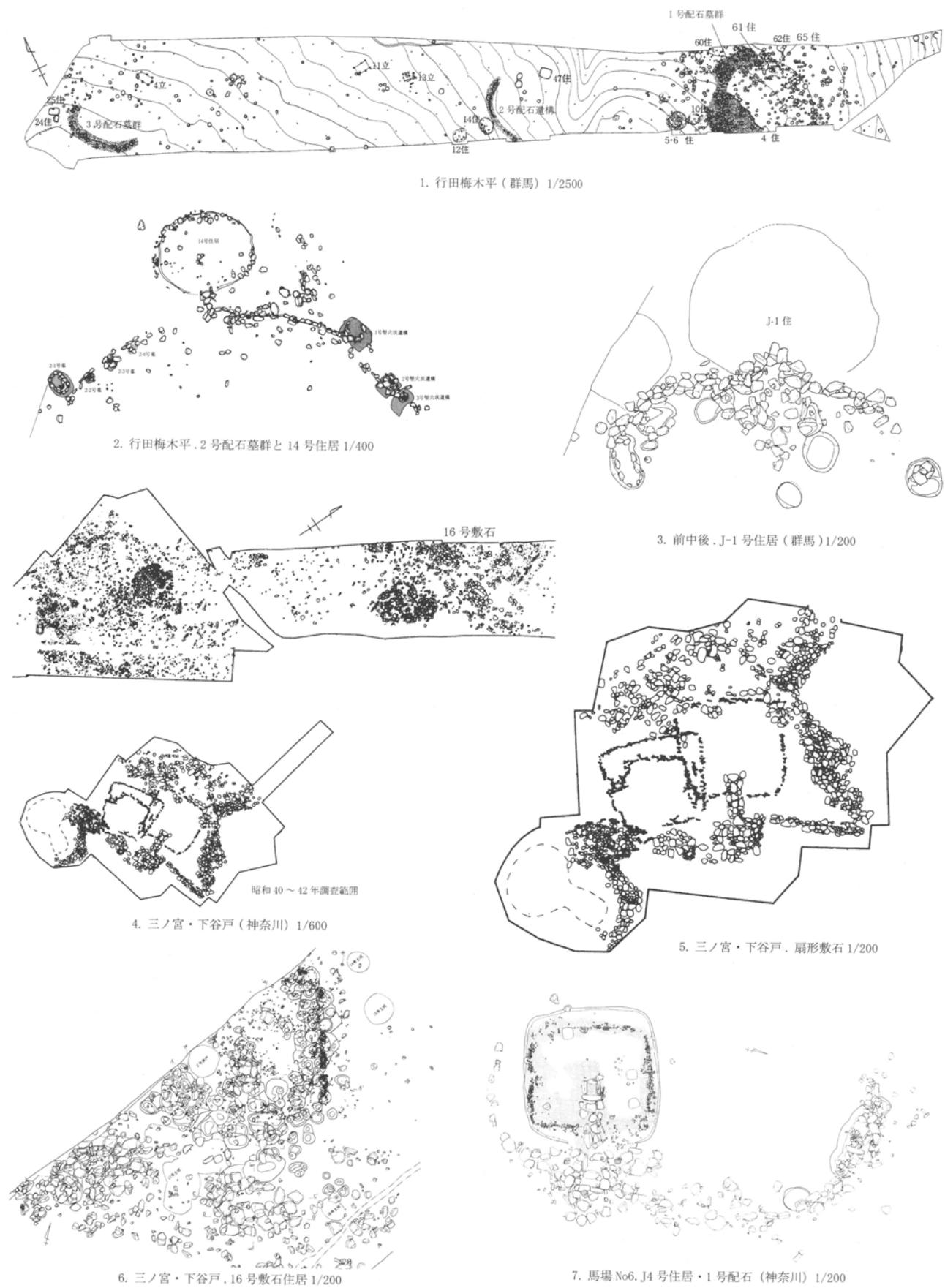


図6 関東地方の後期前半の列石遺構(1)

1971、宍戸 2000)・曾谷吹上 (高山・他 1975)・馬場No.6 (鈴木・他 1995) 等の遺跡がある。この中で、列石下部に土坑墓や配石墓群を伴う例には、前中後・行田梅木平・三ノ宮下谷戸・馬場No.6 がある。ここでは、行田梅木平・三ノ宮下谷戸と下北原・曾谷吹上について詳述する。

行田梅木平遺跡 (図 6-1) は、同一丘陵上の約300mの範囲内に、加曾利E 3式末～加曾利B 1式期の竪穴住居や柄鏡形敷石住居14棟、掘立柱建物3棟、弧状列石を伴う配石墓群3基、集石土坑8基、土坑約300基、埋設土器25基などを検出。配石墓群は相互に100～150mの間隔を置いて3地点に分散立地するが、その中間部に位置する2号配石墓群 (図 6-2) の上部に延長約14mの弧状列石が存在し、その配列が堀之内2式期の14号柄鏡形敷石住居の張出基部両側に連接している。この2号配石墓群は、墓坑6基と石棺墓1基の7基で構成され、各土坑墓の上位に配置された立石を囲繞する組石状小配石を弧状列石が連接して構築されている。列石には部分的ながら横口積みによる複数段構築が認められ、その西側背面に盛土が存在したことを窺わせる。また、列石の内側前面部は、住居・土坑などの遺構が全く存在しない空間部となっている。これら遺構の構築時期は、14号住居との関係から堀之内2式期の可能性が高いが、弧状列石の南端に近接する石棺墓2-1号の存在を考慮すれば、加曾利B 1式まで継続した可能性もある。

三ノ宮下谷戸遺跡 (図 6-4) は、1965年と1994年に調査が行われ、中期後半～後期前半を主体とした集落を検出した。竪穴住居14棟、柄鏡形敷石住居16棟、配石遺構5基、集石4基、土坑墓35基、土坑37基、埋設土器3基などがあり、柄鏡形敷石住居は加曾利E 3式末～加曾利B 1式期まで認められる。1965年の調査で検出した堀之内～加曾利B式期の柄鏡形敷石住居 (同一5) は、複数回の建て替えやその張出基部両側へ連接する弧状列石、主体部外縁を囲繞する周堤礫などが存在する。墓域との関係を含めて詳細は不明だが、その時期は方形の主体部や周堤礫が加曾利B 1式期の16号敷石住居と類似する点を考慮すれば、当該期と近接した時期に比定される。また、16号敷石住居も張出基部付近の左右両側に残存不良ながら弧状列石が存在し、柱穴の状況から複数回の建て替えが窺える。さらに弧状列石の前面部に近接して、上部配石を施した土坑墓 (配石墓) 群が存在し、列石と墓域との一体的関係が注目される。1965年調査の柄鏡形敷石住居と16号敷石住居との時間的先後関係や当該期集落の様相が問題となるが、部分的調査のために判然しない。

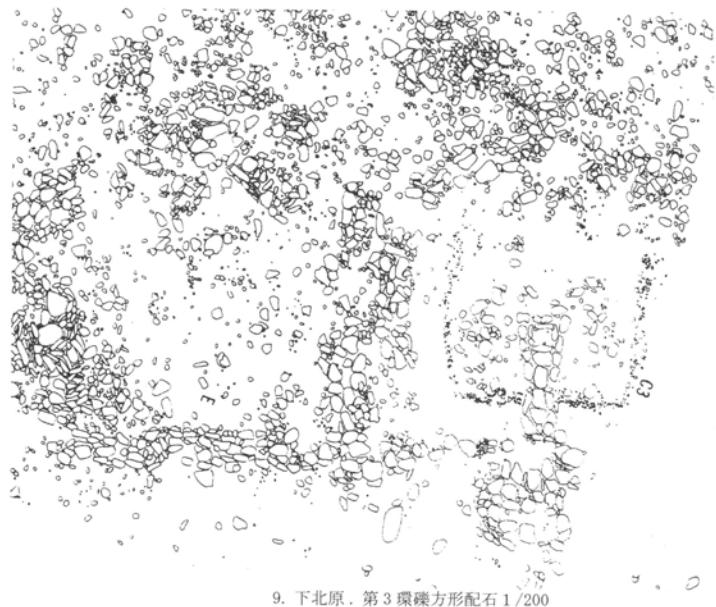
下北原遺跡 (図 7-8) は、勝坂3式～加曾利B 1式期の竪穴住居や柄鏡形敷石住居26棟、石棺墓を含む配石墓約30基、「環状組石遺構」「組石遺構」「方形配石」と呼称された数十基の配石遺構、埋設土器28基などを検出した。

た。配石遺構の中で、「第3環礫方形配石遺構」⁵⁾と呼称された加曾利B 1式期の柄鏡形敷石住居の張出基部南側に連接して、延長約8mの直線状の列石遺構が南走し、さらにこの列石に連接して住居主体部を囲繞する周堤礫も存在する。報文中では、個々に別種の遺構として扱っているが、その配置状況から見て直線状列石や周堤礫を随伴する柄鏡形敷石住居に比定できる。また、当住居北側部分の未調査区域でも、南半部と同様に周堤礫や直線状列石の配置が推定される。この列石下部に土坑等は無いが、前面の東側15mに組石状小配石の10・11・13号が、また南側に30～45m離れた2地点に分かれて20数基の配石墓・石棺墓群が存在する。加曾利B 1式期の柄鏡形敷石住居は、他に「第1・2環礫方形配石遺構」の2棟が15～30mの範囲に近接するが、これらに周堤礫と弧状列石が随伴しない点は注目される。他の配石遺構は不定形かつ小規模なものが主体を占めるが、立石を伴うもの (6・11・13・17・19号組石) や径10mに環状配置されるものもあり、組石状配石遺構も混在している。これらの配石遺構は、遺跡の北側と南側の2地点に分かれて分布するが、北側は柄鏡形敷石住居の「第3環礫方形配石遺構」を囲繞するように存在し、直線状列石や組石状小配石とともに特定住居との密接な関係に留意を要する。

曾谷吹上遺跡 (図 7-11) は、堀之内1～加曾利B 1式期の柄鏡形敷石住居12棟とそれらの張出基部に連接する東西方向の弧状列石、配石墓群、不定形な集礫群などがある。図録篇だけの報告のためにその詳細は不明点が多い。各時期の柄鏡形敷石住居は、地形変換点に集中して構築され、相互に重複しつつ東西方向に配置されているが、弧状列石の断続状態を基準にすると、1・2・11・12号敷石住居の西グループと4～10号敷石住居の東グループに2分割される。弧状列石の規模は、西側が約25m、東側が約20mの延長を確認できる⁶⁾。西側の弧状列石の場合、「石組」遺構の近縁では、部分的ながらも長径が40cm前後の河床礫を少なくとも4段以上に横口積みした状況が認められる。斜面を掘削・盛土造成した法面に石垣状に敷設されていたと推定されるが、同様の石積みは東側の弧状列石にも認められ、かなり大規模な土木作業を窺わせる。弧状列石と各柄鏡形敷石住居との関係は、西側では堀之内1式期の11号住居の主体部上位を通過して西走し、堀之内2式期の2号住居の張出基部に連接する。一方、東側では堀之内2式期の6号住居の張出基部東側を起点として、堀之内1式期の4・5・8号住居の張出部や主体部の上位を通過し、加曾利B 1式期の10号住居の主体部を囲繞した周堤礫に連接する。こうした状況から見て、西側グループでは堀之内2式期の2号住居と、東側グループでは堀之内2～加曾利B 1式期の6号住居および10号住居との密接な関係が想定できる。この東・西両グループが、堀之内2式期において同



8. 下北原、北側配石群（神奈川）1/600

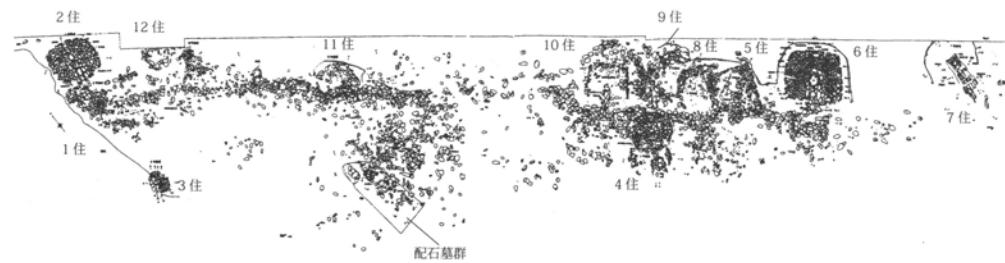


9. 下北原、第3環礁方形配石 1/200

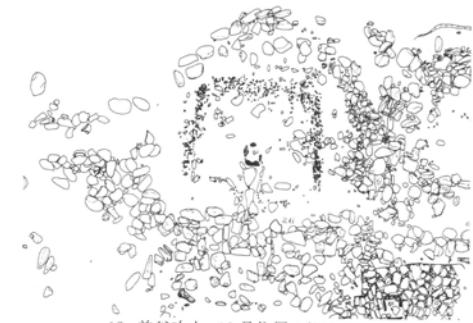


10. 浅田、14号住居（群馬）1/400

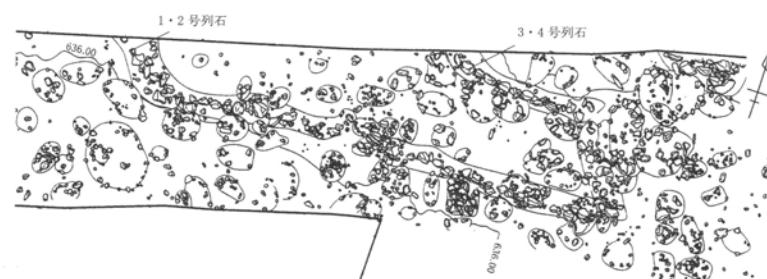
8. 下北原、北側配石群（神奈川）1/600



11. 曽谷吹上（神奈川）1/600



12. 曽谷吹上、10号住居 1/200



13. 長野原一本松（群馬）1/400

図7 関東地方の後期前半の列石遺構(2)

時併存したのか、あるいは西グループから東グループへと時間差をもって段階的に構築されたのかが問題であろう。報告書の本文編が未刊行の現状では、明確な両グループの弧状列石の構築時期を知ることは困難だが、東側の弧状列石では堀之内1式期の5・8号住居などの張出基部を連結するように横断しており、当該期に構築され始めた可能性も窺える。この場合には、8号→5号→6号→10号住居という連続的な建て替えと、それに付合した各住居の張出基部の両側に連結された弧状列石の経年・累積的な構築が想定でき、最終的に周堤礫を伴う10号住居に連接されて長大化したと理解される⁷⁾。この過程で当初の整然とした弧状列石の石垣状配列が崩落したり、その上部に給石行為が継続したために、最終的に乱石積み状に変化した様子も窺える。また、西側の弧状列石でも当初は堀之内1式期の11号住居に付設されていたものが、堀之内2式期にはより西側に移動した1・2号住居の弧状列石と連結・一体化したと考えられる。尚、東・西両グループの中間地点の南側に近接して、堀之内1～加曾利B1式期の土器を伴う配石墓群が存在している。詳細不明だが、墓坑上位に立石を囲繞する組石状配石を伴うものが多見され、このような配石墓が東・西両グループの弧状列石下部に存在しない点に留意を要する。また、両グループの関係については、①西側グループ→東側グループという時間的変遷を有する、②両グループが同時併存する、という二つのケースが想定できる。②の場合には、一集落内に弧状列石を随伴する柄鏡形敷石住居が2棟併存することになり、その性格が問題となろう。

土坑墓・配石墓を伴う弧状列石 柄鏡形敷石住居とは連接せずに、単独で配石墓群の上部に構築される弧状列石の事例も少数ながら存在する。群馬県長野原一本松

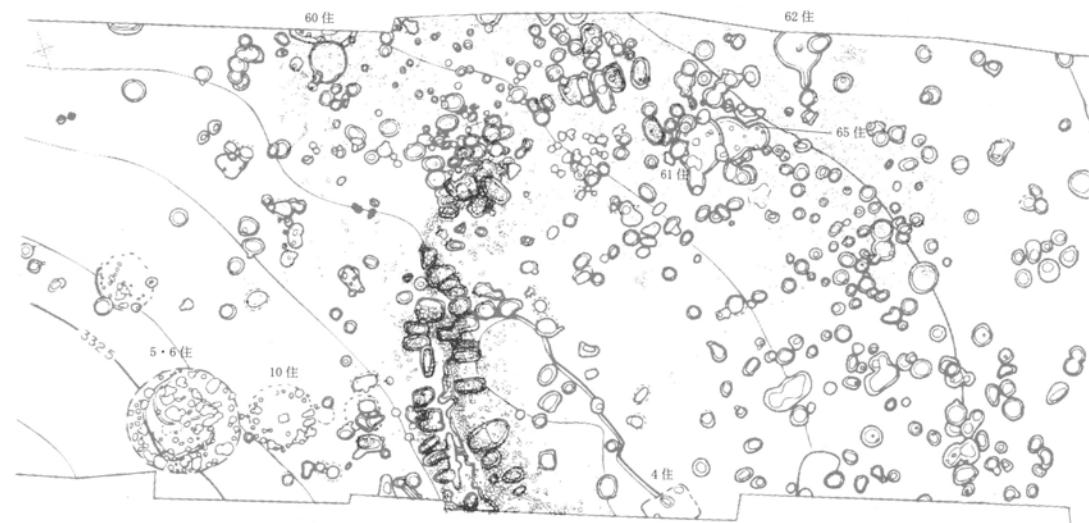
(諸田・他 2002)・行田梅木平(前掲)、埼玉県入波沢西(渡辺 2000)の遺跡例があり、ここでは行田梅木平遺跡について詳述する。同遺跡では、前述したように柄鏡形敷石住居に随伴する2号配石墓群の南側と北側に100～150m離れて1号・3号の配石墓群が立地し、各々その上部に弧状列石が存在する。1号配石墓群は残存良好で、石棺墓18基と土坑墓31基が検出され、これらの上面に延長約40mの弧状列石が構築されている。この列石の西側には、約3mの間隔を置いて平行する延長約15mの列石も存在し、2列で構成された重層構造を有する。これらの列石は、広口縦列配置を基本に土坑墓や石棺墓上面の組石状小配石や立石と連接し、石垣状の4～5段の石積み(横口積み)を確認できる。列石の周辺には掘削・盛土整地の痕跡が認められ、列石の西側背面に盛土してその斜面を被覆するように石積みされたと推定される。これらの遺構には良好な伴出遺物が無く、その構築・継続時期を確定することは難しいが、全体的には堀之内

2式～加曾利B1式期のものが主体を占め、当該期に比定される可能性が高い。これと併行期の住居は、列石の外縁部西側に約15m離れて堀之内2式期の多重複の6号住居1棟が存在するのみで、加曾利B式期のものはない。部分的調査のために集落の全容は不明だが、加曾利B式期の土坑も少なからず存在することから、これらの配石墓群は集落内に構築されている可能性が高い。尚、1号配石墓群とほぼ同時期の3号配石墓群は、約300mの間隔を置いて立地するが、このような至近距離に2つの配石墓群が共存するとすれば、当遺跡の集団構造を考える上で重要である。またこれらの配石墓や石棺墓には、その頭位方向に双極性が認められる点でも留意を要する。

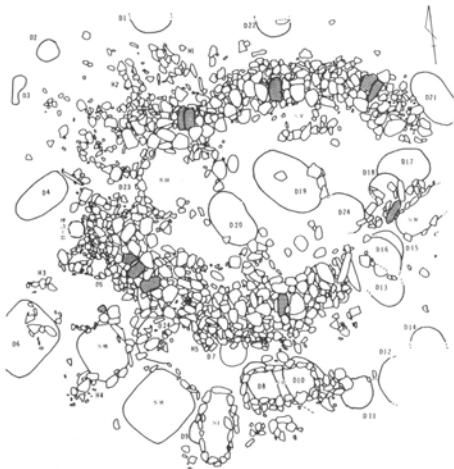
その他の弧状列石 中期末葉段階と同様に、列石下部に何ら遺構を伴わない延長10m以内の小規模な弧状列石が栃木県真子(渡辺 1976)、埼玉県塚越向山(前掲)、神奈川県三ノ宮下谷戸(前掲)などで検出されている。いずれも時期を特定できる伴出遺物がないために推定の域を出ないが、塚越向山遺跡の事例を検討する。同遺跡では、前述の中期末葉の大規模弧状列石の北側へ20m離れて、残存不良ながら「弧状列石」が検出されている。相互に約1.5mの間隔をあけた2単位の列石が確認できることから、重層構造を持つと判断される。ともに40～50cm大の礫を広口縦列配置し、斜面上位の列石が延長7m、下位のものが延長8mを測るが、その走向はほぼ等高線に沿って湾曲している。周辺の出土土器から称名寺II式～堀之内1式期に比定されており、南東に近接する同期の7号住居との関連が注意されるが、その時期に関しては斜面上位に位置する加曾利E3～同E4式期の4～6号住居と関係する可能性もあり、確定できない。いずれにしても、集落外縁部に配置される群馬県横壁中村・空沢などとの類似性が指摘できよう。

c. 他の列石遺構の様相

僅かに1例のみであるが、直径が10m以内の小規模環状列石が東京都田端遺跡(浅川・他 1969)で検出されている。同遺跡では「環状積石」と呼称された環状列石1基、組石状配石1基、石棺墓7基、土坑墓9基、土坑15基、埋設土器1基などを検出している。環状列石は径20～50cm大の河床礫を用いて、長径9m×短径7m、幅1～1.5mの楕円形状に構築されている。全体的には積み石状を呈するが、最下部では広口縦列配置による列状構造が認められ、これをベースに石材配置が継続した結果、最終的に前記のような様態に至ったと推定される。この列石中には、長径70cmほどの立石が少なくとも10ヵ所に点在し、長さ1m大のものを含む石棒22点の出土と共にその数量的な多さが注目される。保存措置により環状列石下部の遺構は未調査であるが、加曾利B1～B3式期の石棺墓や土坑墓の上面にこの列石が構築されており、最終的には墓地から「宗教的祭祀の場」へと推移したと



14. 行田梅木平, 1号配石墓群 1/600



15. 田端. 環状積石 (東京) 1/200

図8 関東地方の後期前半の列石遺構(3)

想定されている。近年の周辺域調査(戸田 1990、山本・他 1998、貴志・他 2003)により、同期の土坑墓・配石墓は若干の広がりを持つものの集落は認められないようであり、墓域が単独立地する事例と推定される。

(2) 中部地方

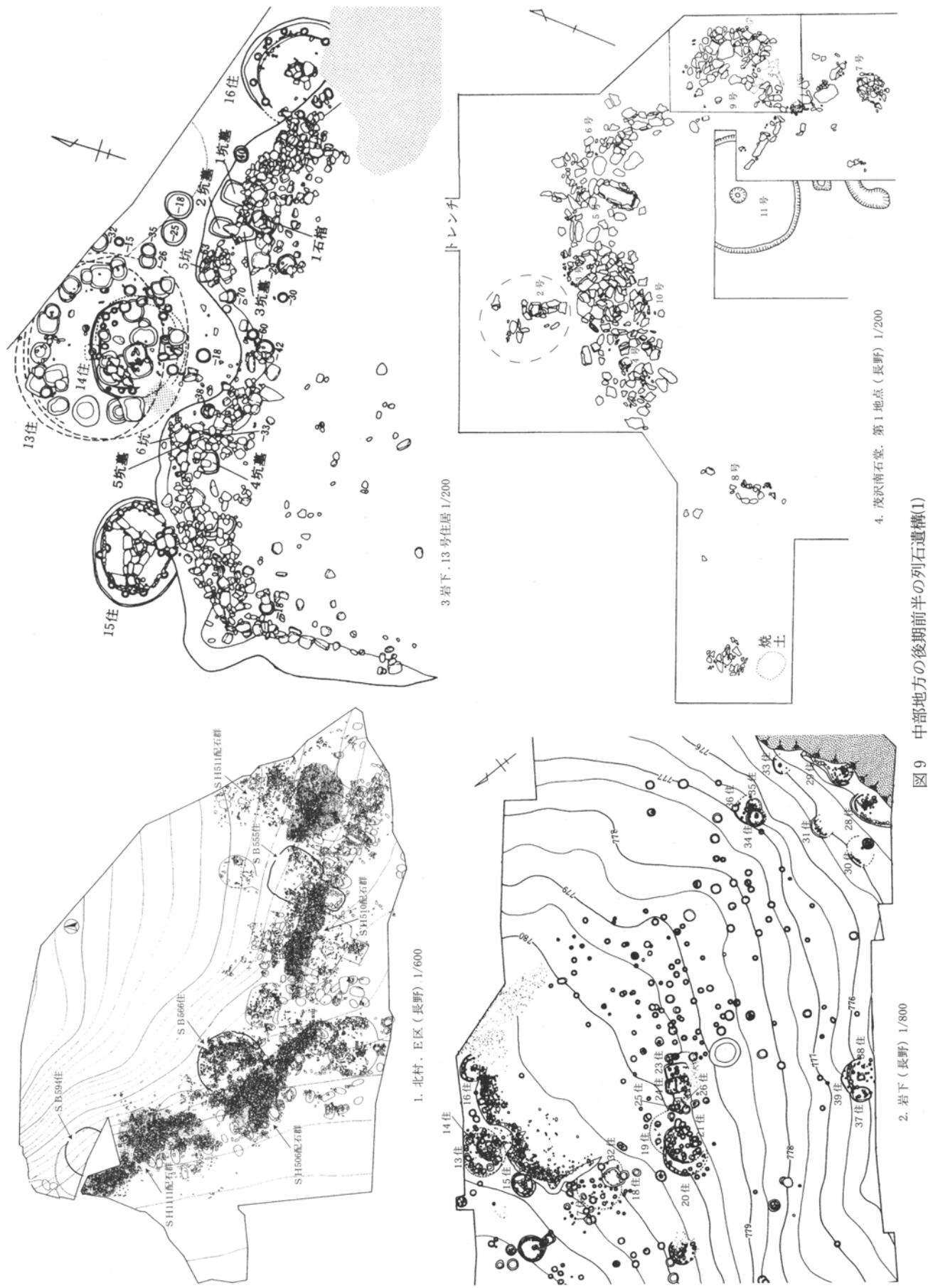
a. 列石遺構の様態

関東地方と同様に、大規模な環状列石は存在せず、また中期末葉までは確認された小規模な環状列石についても、その事例を見出すことができない。その一方で、柄鏡形敷石住居と融合・一体化した弧状列石の存在が顕著であり、さらに配石墓や石棺墓などの集団墓と複合する状況も認められ、後期前半段階の様相を特徴づけている。また、少例ながらそうした遺構との直接的な関係を持たない弧状列石も存在し、多様な状況を窺わせる。

b. 弧状列石の様相

敷石住居・墓域と結合した弧状列石 柄鏡形敷石住居や方形状敷石住居⁸⁾と融合・一体化した弧状列石の下部に、配石墓や石棺墓を伴う事例としては、長野県岩下（宇賀神・他 2000）・北村（平林 1993）・茂沢南石堂（前掲）、山梨県大柴（十菱・他 1998）・金生（新津・他 1989）などの遺跡例がある。ここでは北村・岩下・大柴・金生を中心に、その詳細を述べる。

北村遺跡（図9-1）では、B～E区に分かれた調査区から加曾利E3式～加曾利B1式期の竪穴住居や柄鏡形敷石住居58棟、上部に配石を伴う墓坑（配石墓）469基と人骨約300体、配石遺構26基、土坑352基、屋外埋設土器13基、掘立柱建物のピット群などを検出。柄鏡形敷石住居は加曾利E4式期に出現して、加曾利B1式期までの存続が確認できる。墓坑は、時期の判別できるものが全体の21%の100基にすぎないため、各時期における墓域や柄鏡形敷石住居との関連も明確ではないが、住居と墓坑の構築が時期を隔てながら同一地点を交互に利用している状況が認められる。また、部分的調査のために集落の全容は不明だが、段丘上位面と背後の長峰山地の丘陵斜面とが接する地形変換点に沿って、住居帯が構築されている。最も遺構が密集するE区では、人頭大の河床礫を母材とする4つの弧状の配石群SH506・510・511・1111が最上層にて確認され、墓坑の上部に立石や丸石を囲繞した方・円形状の組石状配石を伴う配石墓群や堀之内2式～加曾利B1式期の柄鏡形敷石住居張出部（SB566・594・555）などの上位面を被覆するように構築されている。西側の加曾利B1式期の柄鏡形敷石住居SB594の上位に位置する配石群SH1111は、延長16m×幅4mほどの規模を持つが、その南側にも短列の配石が認められ重層構造を有する。また、掲載写真から、広口縦列配置による列状構造を持つことが窺える。東側の同期の柄鏡形



敷石住居 SB555の上位に位置する配石群 SH510は、延長13m×幅3mほどの規模とされているが、その東側へと列状に延びる配石墓群までを含めれば延長28mとなる。両者の間に挟在する配石群 SH506は、延長16m×幅2mほどの規模で堀之内2式期の柄鏡形敷石住居 SB566の上位に構築されており、SH1111と同様に部分的ながら二重の配列が認められる。また、配石群 SH506と SH510の周辺では、シカ・イノシシなどの焼獸骨片が散在している。これらの各配石遺構と各柄鏡形敷石住居・配石墓とが、どのような関係性を有していたのかが問題となる。先の柄鏡形敷石住居や配石墓との重複関係から、各配石遺構の構築が加曾利B1式期を最終期とすることは確實だろうが、その開始時期がどの段階なのか、また構築当初の姿がどのようなものであったのかは判然としない。こうした点に関して小杉康は、配石遺構 SH1111と SH506が墓坑群→柄鏡形敷石住居→廐屋儀礼配石、配石遺構 SH510が柄鏡形敷石住居→廐屋儀礼配石→墓坑群という順序を経て構築されたと想定している（小杉1995）。小杉の想定は、「二列配置の墓坑群」を分析視点としたものだが、墓坑とされた469基の内で時期のほぼ特定できるのは100基に過ぎないことを考えれば、その想定も確定的なものではない。なぜなら、柄鏡形敷石住居との重複・先後係が明確な墓坑は除外するとしても、その左右に配列された配石墓群については、それら柄鏡形敷石住居と時期的に併行しながら構築された可能性を否定できないからである。また、同時にこの配石墓上位の列石状の積み石についても、群馬県行田梅木平遺跡例のように、当初は個々の配石墓を連結する列石をベースにして、その上位に石積みされてゆく過程も想定できる。ところで、柄鏡形敷石住居 SB555には、張出基部に連接して左右に延びる長さ3mの弧状列石や主体部東側に周堤礫状の配列が存在するが、これは後述するC・D区の柄鏡形敷石住居 SB101に認められる周堤礫と類似し、同様の機能・性格を想定できる。当住居と関係する配石遺構 SH510が、この弧状列石と重複する位置に構築されている点や、当住居を含め配石遺構 SH1111・566と関係する柄鏡形敷石住居 SB594・566が、少なくとも1～2回の建て替えや多重複の状況を呈する点などは、特定の柄鏡形敷石住居に配石墓や弧状列石が付随する意味を考える上で、重視すべき要素である。こうした諸点は、柄鏡形敷石住居 SB556・594・555が他住居とは異なる性格を保持していたことを示すと考えられるが、問題はこれらがどのような時間的先後・併行関係を持って存在したかであろう。これについても小杉は、4単位の配石遺構を SH1111・506と SH510・511の「2群からなる一つの大規模な直列帶状の配石遺構」として、そこに集団内部の分節構造を想定している。基本的に、2群が同時併存するを見ているわけだが、この点については後段にて触れた

いと思う。

岩下遺跡は（図9-2）、加曾利E3式～加曾利B1式期を中心とした集落であり、竪穴住居や柄鏡形敷石住居24棟、「石列」とされた弧状列石1基、土坑約200基などを検出している。弧状列石は、大形の柄鏡形敷石住居である13号住居の張出基部の左右に連接して、径20～60cm大の礫を広口縦列に配置するが、この構築に際して地山斜面を最大70～80cmカットして平坦面を確保し、その裾部に列石を施している。列石の規模は、西側で延長約13m、東側で9mを測り、幅がともに2m前後と広い。ただし、この幅に関しては、斜面の下方へと散在する状況が看取され、廐絶後の崩落や攪乱により幅員を広げた可能性が高い。実際に、上部の石材を除去した最下部には、広口縦列に単列配置した状況が観察でき、おそらく掘削法面に石垣状に石積みされた様態が構築初期の基本構造と考えられる。この東側の列石下からは、墓坑5基や石棺墓1基が検出され、その東端部に1号石棺墓が位置する。張出部近縁がいずれも土坑墓である点を踏まえれば、土坑墓→石棺墓という時間的変遷と共にその構築が徐々に東側へと及んだことを窺わせる。これと類似したあたりは、群馬県行田梅木平遺跡の2号配石墓群にも認められ、墓域の拡大に伴って弧状列石が順次に附加・延長されていったことも想定される。これら遺構の時期は、13号住居の出土土器や最低1回の建て替え状況、それに1号石棺墓の出土土器などから、堀之内2式後葉～加曾利B1式期にかけた継続的変遷が推定される。また、13号住居は堀之内1式中段階の14号住居と入れ子状態で重複しており、14号→13号へと建て替え・拡張されたことが窺えるが、この14号住居の段階に列石が付設されていたか否かが問題である。さらに、その東・西の両側にあたかも脇土的に存在する15号・16号住居との関係も問題となる。15・16号住居ともに柄鏡形敷石住居であり、出土土器から16号住居は堀之内2式期に比定されるが、15号住居については堀之内1・2式期いずれなのか判然としない。ただし、弧状列石との関係は、両住居の「出入口部では、最低でも7・8段程度の横積みが行われていた」という状況を重視すれば、列石の構築最終段階には両住居ともに廐絶していたことが窺える。しかし、その一方で弧状列石の走行が、両住居の張出基部付近をトレースしている点は、15・16号住居と弧状列石との有機的な関係を示唆しており、可能性としては14→15→16→13号住居という変遷も想定し得る。集落の構造面から13号住居と弧状列石の様態を見ると、それら前面の南側には、遺物出土が希薄で他の遺構も存在しない直径20mほどの広場状の空間が存在し、対面南側へ約25m離れて土坑群が、またその西縁に堀之内1～2式期の多重複住居が複数棟存在する⁹⁾。このような遺構配置は、13号住居に連接する弧状列石が囲繞した空間構造に規制されていることを示

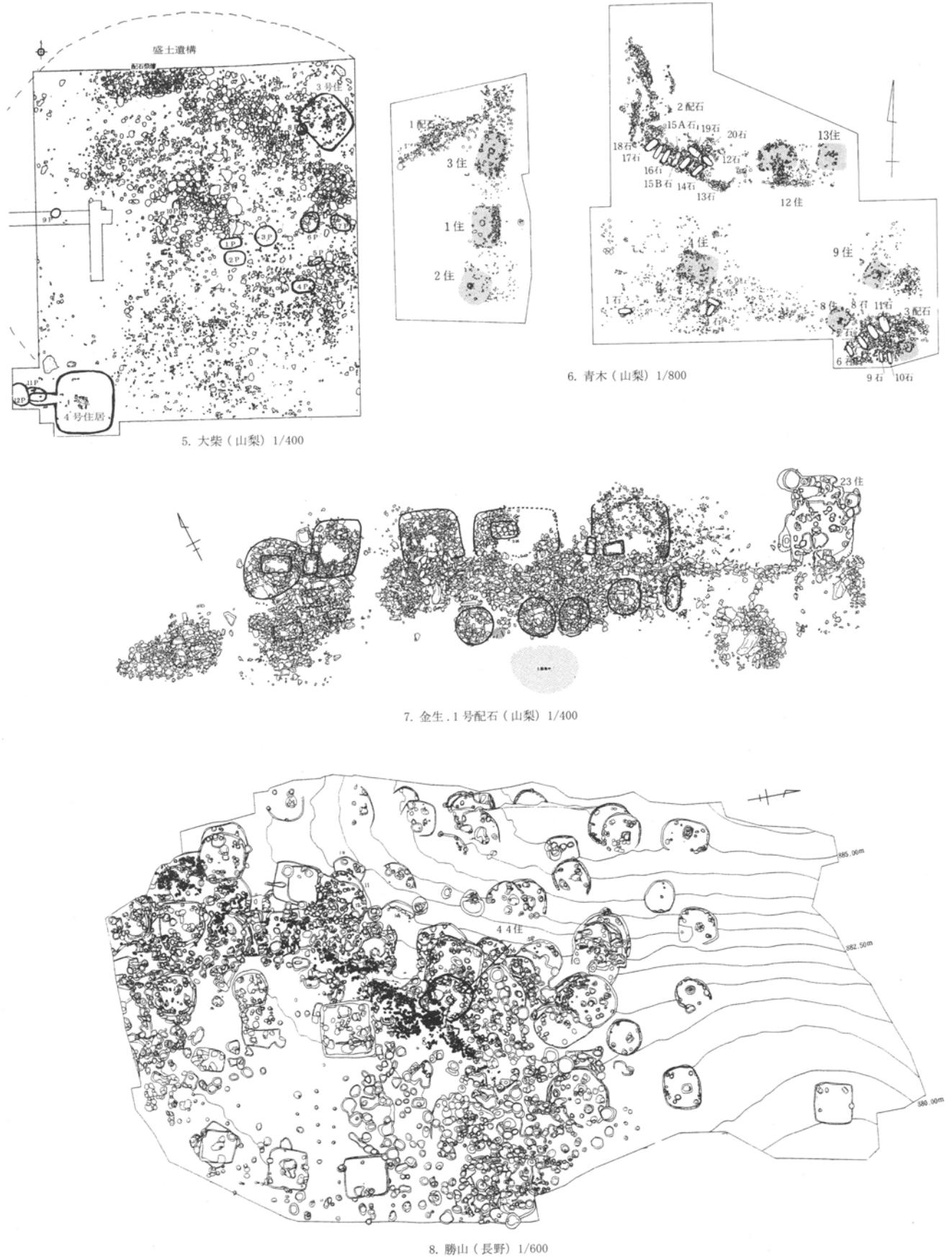


図10 中部地方の後期前半の列石遺構(2)

している。他に注意されるのは、沖積地に望む斜面末端部に構築された延長約5mの小規模な弧状列石である。この列石は、堀之内1式期の28号・29号柄鏡形敷石住居の奥壁上部に位置し、当該期以降に比定されるが、先の13号住居に付随する弧状列石とは大きく異なる。列石の下部には何ら遺構が存在せず、集落外縁部の囲繞を意識した群馬県横壁中村・空沢の事例に類似している。

大柴遺跡（図10-5）は、報告書が未刊行であることや保存措置により詳細内容は不明だが、須玉町史によれば中・後期の住居5棟、「環状配石遺構」2基、土坑12基が存在する。「環状配石遺構」と呼称された配石遺構は、①外帶と内帶の2帯構成で、幅2~4mの範囲に配置された幾つかの単位配石遺構で構成される、②外帶の外側に接して幅5~8m、高さ0.5mの環状盛土遺構が存在する、③時期は「曾利V期を中心に構築され、加曾利B期まで存続した」、④配石下に土坑（墓）が伴う可能性がある、⑤外帶に「配石祭壇」状の小配石が存在する、⑥「環状配石遺構」を中心にその周囲を住居群が取り巻く環状集落である、等が記されている。しかし、掲載の平面図からは外帶が環状ではなく、屈曲部を持つ延長約30mの弧状形態を呈することが判る。そして、その北東外縁には加曾利B式期の3号住居が近接して存在するが、当住居は敷き石の希薄な柄鏡形敷石住居の可能性が高い。また、3号住居が標的に遺跡の最上位に位置していることなどを考慮すると、外帶とされる配石遺構は張出基部の左右に展開する弧状列石であり、しかもその下位には④の墓坑が伴うという状況が看取される。内帶は立石・石棒を中心に平石・丸石・自然石が組成した2基の配石から構成されるようであり、図や写真によれば直径6mほどの範囲に円環状に配置されている。この内帶と外帶の帰属時期が同一か否か不明だが、仮に同時期とすれば、柄鏡形敷石住居と融合・一体化した弧状列石の前面部に配石遺構を配置する、いわば内・外帶の重層的構造を有する唯一の事例となるが、果たしてどうだろうか。また、当該遺構の構築・存続時期が、③のように曾利V式～加曾利B式期までの長期にわたるのか否かも問題である。現段階ではいずれとも判断できないが、加曾利B式期の3号住居との融合関係や他の事例を考慮すれば、堀之内式期を遡ることはないだろう。また、⑥のように当遺跡を環状集落とする見解については、周辺域が未調査でもありいささか早計である。外帶の西端に「配石祭壇」とされる遺構が存在するが、これに類似するものは群馬県浅田遺跡にも認められ、こうした弧状列石が単純に石材を並べたものではなく、様々な機能を持つ組石状遺構や小配石が配置されていると判断される。

金生遺跡は、後期後半から晩期後半を主体とした集落で、後期中葉11棟、後期後半～晩期前半7棟、晩期前半～後半1棟、不明3棟の計22棟の住居や、配石遺構5基、

石棺墓26基、土坑8基などを検出している。ここで取り上げる1号配石（図10-7）は、保存措置により下部の遺構状況は詳細不明だが、延長約60m、幅約6mの弧状列石で、下部には少なくとも11基の石棺墓が確認されている。また、この弧状列石の北側には、「方形石組」と呼称された4基の遺構が連接的に存在する。その大きさは長辺4~6m×短辺3~4mであり、規模・形態的に「方形周石住居」とされた後期後半の4・5・7・23・37号住居や晩期前半～後半の10・11・13・17・18・21・22号住居などに類似する点は重要である。この列石下部は未調査でもあり推測の域を出ないが、その東端には加曾利B2式期の23号住居が連接しており、この4基の「方形石組」も住居の可能性がある。この想定が正しければ、前述の北村遺跡のSB566号住居やSB555号住居のように、特定の住居の出入口部前面やその左右に弧状列石と墓域が随伴する状況を看取することができる。おそらく、1棟の特定住居が列石や石棺墓を随伴しつつ数段階にわたって建て替えを繰り返し、それらが廃絶された段階で住居や石棺墓群を被覆するように、その上面に配石行為が行われたのであろう。構築時期については、先の23号住居をその初現期と見なせば、加曾利B2式期に比定することができよう。また1号配石からは、後期後半と共に晩期前半の土器が出土しており、墓域から祭祀域への転換と晩期前半までの継続が指摘されているが（新津1992）、少なくともこの段階まで祭祀域としての機能・性格が継続していたと考えられる。当事例は、柄鏡形敷石住居が消失した後も、弧状列石と住居との融合・一体化が継続・残存していることを示すものであろう。

尚、上記の4例以外に茂沢南石堂遺跡（図9-4）の事例がある。「第1地点配石遺構域」の「2号遺構」とされたものは、加曾利B1式期の柄鏡形敷石住居の炉とそれに接する床面の部分敷石と考えられ、それらの南側延長線上に位置する「10号遺構」はその張出部に相当する可能性が高い。また、張出部の「10号遺構」の左右両側には配石墓あるいは石棺墓の「1・3~6号遺構」と共に弧状の配石が存在し、状況的には柄鏡形敷石住居の張出部に連接した弧状列石とそれに付随する配石墓群という関係が想定される¹⁰⁾。また、その東側に近接して、堀之内2式期の柄鏡形敷石住居の「9号遺構」が存在し、この張出部の左右両側にも延長2~3mの配石が連接している。掲載写真や図から、張出部に付設された列状構造を有する弧状列石と判断される。列石下部の遺構の有無は不明だが、こうした堀之内2式期～加曾利B1式期の弧状列石を随伴する特定住居が、その構築位置を若干ずらしつつ同一地点に形成されている点は注目される。

敷石住居と融合した弧状列石　弧状列石と敷石住居との融合関係に墓域が介在しない事例は、長野県三田原（宇賀神・他 2000）・茂沢南石堂（前掲）・伊勢宮（畔上・



図11 中部地方の後期前半の列石遺構(3)

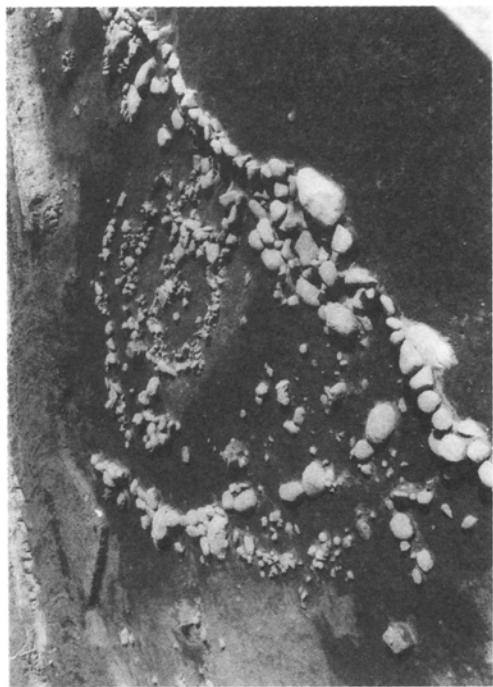
他 1981)・勝山(小林・他 1994)、山梨県川又(山路 1998)・青木(雨宮・他 1988)などの遺跡例と、その可能性を持つ山梨県姥神遺跡(櫛原 1987)の例がある。ここでは三田原遺跡と勝山遺跡の事例を中心に述べる。

三田原遺跡では、中期後半～後期前半の堅穴住居や柄鏡形敷石住居29棟、弧状列石1基、土坑39基等を検出した。住居の構築は、称名寺II式期を欠くものの加曾利E1式期から堀之内1式新期にかけて認められ、柄鏡形敷石住居の形成は称名寺1式期以降であり、加曾利E4式期には見あたらない。土坑には墓坑が含まれると想定されるが、詳述無く集落内での位置関係等も不明である。報告では環状集落と認定されているが、1時期の形態として見れば環状を呈する可能性は低く、集落規模も一時期2～3棟と小さい。弧状列石(図11-9)は、径30～50cm大の河床礫を広口縦列を基本に配置した延長11mを検出している。この列石は、堀之内1式末期の4号住居張出基部の東側に連接し、西側にも存在した可能性がある。列石の構築は、斜面部を掘削・平易して配列され、構築当初には岩下遺跡例と同様に複数段の積み石が存在した可能性が高い。また、列石内には立石が組み込まれているが、その下部や前面部南側には土坑等の遺構は何ら存在しない。構築時期は、4号住居との関係から堀之内1式期末葉をその最終段階と見なせるが、その初現期はどうだろうか。4号住居は堀之内1式期中葉の5号住と重複するが、5→4号の順の建て替えが想定できる。また、その東側に隣接する堀之内1式末期の1号住居(柄鏡形)は、主体部・柱穴とともに規模の大きな住居であるが、同期の2・3号とも相互に重複関係にあり、3→2→1号の順での建て替えが考えられる。その構築当初には、4号と同様に張出基部に連接する列石を有していたことが、東側に2mほど残る石材配置から窺える。報告では、1号と4号との関係を6号も含めて3棟が同時存在と認定し、「径40m内外の円形サークル」上にこれらが配列されたと想定している。しかし、それら住居の出土土器から見ると、1号住居と4号住居とは次のような関係を想定できる。1号住居を最終期とする3→2→1号の建て替えは、次に地点をやや東側に移して5→4号住居という建て替えに継続したという見方である。1～3号住居が、柄鏡形敷石住居と推定されるにもかかわらず敷石の残存状況が悪いのは、後世の抜石によるだけでなくこうした構築過程の中で再利用されたことも考慮される。この比定が正しければ、当列石は特定の柄鏡形敷石住居と連接関係を持つつ、堀之内1式期の前葉～末葉にかけて構築され終焉を迎えたことになる。これら住居や列石の遺跡内の立地は、標高的に最高位ではないが、同一地点での多重複や継続的な構築を行う住居は他になく、その特異性が注目される。

勝山遺跡(図10-8)は、中期後半の堅穴住居70棟、

後期前半の住居13棟、土坑1400基、「配石」1基などを検出している。称名寺式期を除いて新道式～堀之内2式期まで各期の住居が存在し、後期の5棟は柄鏡形敷石住居であるが、それらの大半が地形変換点に集中立地して激しく重複するため残存状態は悪い。「配石」は立石や単位的な小配石を組み込んで延長約40m、最大幅4～5mの規模で北東～南西の方向に直線的に走行し、全体形状は「環状ないし馬蹄形を呈する」ことや、堀之内2式期の44号柄鏡形敷石住居の張出部と一体化している可能性が指摘されている。この「配石」の形態については、44号住居の張出部と近接する15～20m部分では弧状形態が看取されるものの、少なくとも環状や馬蹄形の形態を見出すことはできない。ただし、両者の融合関係は、石材の敷設や位置的な状況から見て確実だろう。この列石の構築方法等は不明だが、基本的に列状構造を有すると想定され、その幅員が4～5mと広がっている点は、最下部の列石上位に積み上げられたものが崩落したことを窺わせる。この列石の前面部に当たる南東から東側にかけて土坑群が存在するが、後期前半の土坑は全て墓坑であり東側に群在するとされている。全体図中に明記されていないため、その位置を確認することはできないが、列石下部やその前面部に墓坑は存在しないようである。列石の時期は、44号住居の堀之内2式期を当てることができるが、他住居との連接関係が不明なためにその消長は判然としない。44号住居については、壁際を巡る複数列の柱穴の状況から、少なくとも1～2回程度の建て替えが窺える点に注目しておきたい。

上記2遺跡の他に、伊勢宮・川又・姥神の3遺跡例について、簡単に触れておきたい。伊勢宮遺跡(図11-10)は、A区で堀之内1式期の柄鏡形敷石住居2棟、弧状列石2基、集石遺構4基、配石土坑28基などを検出している。弧状列石の内、明確な列状構造を有するのは弧状列石2号のみであり、径30～70cm大の河床礫を広口縦列に整然と配置し、延長約8mを測る¹¹⁾。この列石は部分的に複列配置や立石が認められ、確認段階では「自然の大礫で全部覆われる状態」とされており、複数段の石積みの崩落あるいは継続的給石により、最終的には乱石積み状を呈していたことが窺える。その走向は、1号柄鏡形敷石住居の張出部の1.5m手前で途絶するが、同張出部の反対側へも延長している可能性もある。仮に、両者が融合関係にあるとすれば、列石の走向が張出部前面を囲い込むような他遺跡でのあり方とは逆方向をとる点で、やや異質である。しかし、神奈川県馬場No.6遺跡の1号配石とJ4号敷石住居との関係でも同様の状況が認められ(図6-7)、弧状列石の囲繞する空間が張出部の前面ではなく後方の可能性もある。尚、配石墓と想定される土坑上部に標石状の配石を施した「配石土坑」が、弧状列石2号を挟んでその南・北の2地点に群在するが、弧状



16. 川又・A区配石（山梨）



15. 塩瀬下原（山梨）1/400



17. 破魔射場・C地区（静岡）1/800



18. 破魔射場・B-2地区（静岡）1/800

図12 中部・東海地方の後期前半の列石遺構(4)

列石下部には存在しないようである。

川又遺跡は、報告書が未刊行のために詳細不明であるが、須玉町史第1巻に掲載された写真（図12-16）により弧状列石を随伴する柄鏡形敷石住居と判断される¹²⁾。この住居は主体部が方形状を呈して壁際を周石が巡り、張出基部の左右に連接して扁平な径20~50cm大の河床礫を広口縦列配置した弧状列石が存在する。列石の長さは、少なくとも10m以上に及ぶことが看取でき、径1~2mの小配石や径1m前後の巨礫を多数の小礫で囲繞する組石遺構などが付設される。さらに、この列石に連接して、住居の主体部外縁を二重に囲繞する周堤礫も存在する。弧状列石や小配石・組石の下部、またそれらの前面部などに墓坑などの遺構は存在しないようである。

姥神遺跡（図11-11）は、中期後半～後期中葉にかけての集落で、堀之内2式～加曾利B2式期の6棟の方形住居の前面部には、不定形かつ散在的な配石群が存在する。後世の攪乱なども加わって残存状態は悪く、明確な列状構造は認められないが、やや集中した分布状況であることから構築当初は弧状列石的な配石遺構が、それら住居の出入口部に連接していた可能性もある。また各住居は相互に重複関係を有し、いわば同一地点での建て替えによる多重複関係ととらえることもできる。この配石遺構については、「半径20mの環、或いは高根町石堂遺跡例のように方形をなす可能性がある」（櫛原 1987）と想定されているが、形態的にはむしろ前述した金生遺跡の「1号配石」のあり方に類似している。方形住居群の前面部に展開する配石遺構や集石遺構の下部には、土坑や配石墓等は存在しないが、周辺には立石や丸石を中心部に配置した組石状配石的な「集石遺構」2基や、石棒・多孔石・土偶等の多くの遺物が散在し、祭儀的行為の存在が窺える。また、出土土器から見てこれらの住居と配石遺構との融合関係は、堀之内2式～加曾利B2式期にかけて存続していたと想定される。

土坑墓・配石墓を伴う弧状列石 柄鏡形敷石住居や竪穴住居とは連接しないが、弧状列石の下部に土坑墓や配石墓を伴う事例としては、山梨県青木遺跡（図10-6）がある。加曾利B1～B3式期を中心とした集落であり、住居15棟、配石遺構3基、石棺墓20基、土坑1基等を検出している。各遺構の時期・構造、住居と配石遺構との関係等に関しては、詳細不明である。3基の配石遺構は未調査部分を残すが、1号が延長約20m・幅員2~4m、2号が延長約25mで部分的ながら相互に2~4mの間隔を置いて3列の併行配置が認められる。3号は延長8mで幅員が6mを測るが、2号と同様に複数列の配置によりその幅を広げていると推定される。1号の下部遺構は未調査のために不明だが、2号・3号は石棺墓群の上位に構築されている。2号では北側の配列に列状構造が認められることから、1・3号も基本的に同様の構造をベ

スにして、最終的に幅広の積み石状となったことが窺える。また、2号が複列の列石となるのは、13~18号石棺墓とは頭位方向を90度違える19・20号石棺墓の配列を意識したものと考えられ、3号も頭位方向は同一ながら石棺墓が複列配置となることから、2号と同様に複列の列石が想定できる。このようなあり方は、群馬県行田梅木平遺跡の1・3号配石墓群や長野県北村遺跡のSH506・SH1111配石群にも認められ、集団構造を反映している可能性が高い。これら配石遺構の構築時期は、加曾利B1～B3式期に比定され、2号配石遺構の東側に近接して堀之内2式期の12号住居が、また3号配石遺構の北側に近接して加曾利B式期の8号住居が存在する¹³⁾。12号住居は、張出部の両側に弧状列石が連接する柄鏡形敷石住居であり、こうした点を含めて住居と配石遺構とが有機的関係を持つことも想定される。尚、周辺部から安行2式土器も出土しており、加曾利B式期以降の最終段階では墓域→祭祀域へと変遷していることも窺える。

この他に、延長8mの弧状列石下部に墓坑と認定された径1m、深さ20~40cmほどの小土坑10数基が伴う山梨県宮久保遺跡（村松・他 1999）の事例がある。しかし、これらの墓坑は深度も浅く出土遺物も存在しないことや、その周辺にも多数の同様の土坑が存在するなど、墓坑と断定できる状況にはない。また、その時期も加曾利E4式期～堀之内2式期までの時間幅が想定され、特定することができない。参考事例にとどめておくが、小規模な弧状列石であることは確実である。

その他の弧状列石 住居や配石墓などとの遺構を伴わない弧状列石単独の事例が、長野県北村（前掲）・堂前（友野・他 1979）・岩下（前掲）と山梨県塩瀬下原（笠原・他 2001）に存在するが、岩下遺跡例は前記を参照されたい。北村遺跡（図11-13）では、前述した配石墓群の検出地点E区から西方へ100m離れたC・D区にSH1配石遺構が存在する。この配石は、径30~60cm大の河床礫を広口縦列配置した明瞭な列状構造を持つ弧状列石で、延長約14mで立石を組み込んだり部分的に複列配置も認められる¹⁴⁾。列石の下部には墓坑などの遺構を伴わず、その一部が堀之内2式期のSB104号住居の上部に配置されることなどから、堀之内2～加曾利B1式期に比定されている。ただし、この方形のSB104住居との関係については、弧状列石がその出入口部を指向しており、融合的な状況も考慮される。弧状列石の前面部には、不定形な配石遺構が5基ほど存在するが、拳大の河床礫を用材とすることや露出した段丘礫層との区別が困難なことから、遺構ではない可能性もある。当調査区には、E区のような墓坑・配石墓は一切存在せず、この弧状列石が墓域と関係する可能性は低いが、E区の配石群とも同時期に共存しているとすれば、地点を違えて機能・性格の異なる配石遺構が構築される事例と言えよう。

塩瀬下原遺跡（図12-15）は、堀之内1式～2式期の柄鏡形敷石住居1棟、配石遺構8基、土坑8基、焼土遺構3基などを検出している。12・13号配石は相互に近接して連続的な弧状の配列を持ち、構築当初は一体のものであったと考えられる。両者を併せた規模は延長25m、幅1～3mを測り、乱石配列状を呈する。しかし、部分的に20～40cm大の河床礫を広口縦列に配置した列状構造が看取され、弧状列石と認定できる。この列石の北側延長上には15・16号配石が存在するが、一連の列石の可能性が高く、これらも含めれば延長35mの規模となる。列石下部に遺構は存在しないが、その区画内側に近接して1号敷石住居が存在しており、この住居を囲繞するかのような様態を見せる点で注目される。1号敷石住居は、主体部での十字状の部分敷石や外縁部に周堤礫を持つ特徴的な柄鏡形敷石住居であり、堀之内1式～2式期の複数期にわたる居住が想定されている。また、列石の西側には上部配石を伴う土坑墓群が存在し、堀之内1式期の注口土器を副葬したものもあるが、基本的に弧状列石とは連接していない。列石の周辺からは堀之内1～2式期の土器片が出土しており、1号敷石住居との関連からも当該期に比定されよう。

堂前遺跡（図11-12）は、中期後半（中期後葉II～IV期）を主体とする集落で、竪穴住居9棟、土坑約170基の他に、堀之内1式期の柄鏡形敷石住居1棟と時期不明の「列石」1基を検出している。「列石」遺構は、残存不良ながら延長約30mが確認され、明確に広口縦列配置の列状構造を有すると共に、部分的に複列配置も認められる。この区画内側の20m南方には、堀之内1式期の柄鏡形敷石住居と推定される「配石」が存在するが、この方向には延長されないことから、弧状列石と考えられる。明確な伴出遺物はないが、周辺から称名寺I式～加曾利B1式期の土器片が出土しており、後期前半に比定される。部分的な調査でもあり、列石下部や区画内部の状況をはじめ集落内の遺構配置も判然としない。

（3）東海地方（静岡県）

a. 列石遺構の様態

大・小規模を問わず、環状列石と認定できるものは皆無であり、また柄鏡形敷石住居の張出基部に連接して融合・一体化するものや、墓域と複合する事例も見出しきれない。中期後葉段階の状況から見て、関東・中部地方とも連動した様相を想定できるが、現状では単独的な弧状列石が確認されるのみである。

b. 弧状列石の様相

前述したように、他の遺構と直接的関係を持たない単独的な弧状列石が、破魔射場遺跡（井鍋・他 2001）で認められる。B・C区（図12-17・18）より、中期後半～後期前半の住居29棟、配石遺構47基、配石土坑3基、集礫

群、埋設土器10基、土坑などを検出。配石遺構とされたものの中には、柄鏡形敷石住居の残骸と思われる21号配石（称名寺I式期）や、加曾利E4式や称名寺I・II式の屋外埋設土器も存在することから、全体的には曾利I式期から堀之内2式期までの継続的集落と想定できる。ただし、中期の住居はC-1区に、後期はB-2区に集中して互いに立地を違えており、ともに環状の集落形態は持たない。各配石遺構の時期は、1～12・14～16号が中期後半、他は後期前半に比定されているが、中期後半の4～10・12・14・15号には明確な伴出土器がなく、また2・11・16号には堀之内1～2式土器が伴出すること、さらにC-1区の場合には中期後半と後期前半の配石遺構がほぼ完全に重複関係にある状況などを考慮すれば、その大半が後期前半に帰属する可能性もある。いずれにしても確定できない状況であり、ここでは堀之内1～2式土器を伴出している後期前半の配石遺構について、前述のような柄鏡形敷石住居や集石土坑に認定されるものを除き、以下の4つに分類してその様相を述べる。

①明確な列状構造を持つ弧状あるいは直線状の配石遺構
—18・23・33・37・38・40号

②列状構造を持たない不定形かつ散在的な配石遺構
—17・19・24～29・36・39号

③下部に土坑を伴う不定形な小配石遺構—20・22・42号

④立石や平石を中心部に置いた組石状の配石遺構—30号

列石遺構と認定されるのは①のみであるが、23号を除いていずれも弧状形態を呈し、径30～50cm大の河床礫や亜角礫の他に石皿・多孔石などを用いて延長4～10mに配置した小規模な弧状列石と言えよう。C-1区18号は、地形変換点の等高線に沿って構築され、集落の外縁部を囲繞する事例と考えられる。同区の33号は、直径7m前後の環状列石と認定されているが、実際には南側部分に断続的ながら延長約10mの弧状列石が存在するのみであり、環状列石と見なすことはできない。当配石からは縁石的な配列や多量の土器・石器類が出土しており、21号配石のように柄鏡形敷石住居の残骸の可能性も考慮される。また、同区の23号は1.5m×4.5mの長方形状の配石とされているが、延長4.5mと2.5mの2基の列石が約1.5mの間隔を置いて平行する状況であり、長方形状に囲繞されるか否か確定的ではない。B-2区の37～40号は共に同一方向に走行しており、重層的な配置も想定されるが、それらは堀之内1～2式期のSB26・27号住居に近接して存在し、両者が有機的関係を持つことが窺える。特に、SB26号住居の前面部に近接する40号は、全体図や写真から延長約6mの積み石された列石遺構であることが看取できるが、その東端の列石下部には径3.5×1.5mの長楕円形状の土坑が存在し、墓坑を伴う可能性もある。③については、標石状の配石を伴う土坑墓の可能性が高く、B-2区42号は弧状列石の39号の下位に存在する点で、先

の40号に伴う墓坑状の土坑とも類似する。当遺跡の列石遺構は残存状況が悪く、全体的なあり方を分析することは難しいが、39・40号のように住居に近接して下部に墓坑を伴う列石と、18号のように集落外縁に構築される列石の2タイプが併存すると思われる。ただし、直径が20mを超えるような大規模な環状列石や、柄鏡形敷石住居に連接するような弧状列石のあり方は認められない。中期末葉の柄鏡形敷石住居が検出されていない点は、当遺跡の列石遺構の形成時期を考える上で、踏まえておく必要があろう。

5. 列石遺構の地域的様相と中期から後期への変容

(1) 中期末葉の列石遺構の地域性と普遍性

a. 列石遺構の構造

環状列石 先述したように、現在明確な列状構造を持つ大規模環状列石の事例は、群馬県久森遺跡・野村遺跡・東平井寺西遺跡、神奈川県川尻中村遺跡、山梨県牛石遺跡、静岡県千居遺跡の6例にとどまるが、これら相互間にはいくつかの共通要素と共に地域差あるいは個別的差異とが存在している。まず共通要素としては、以下の5点を挙げることができる。

- ①形態は隅丸方形を基調としている。
- ②構築方法は広口縦列による単列配置を基本として、特定の箇所には複列配置や石垣状の数段の積み石が認められる。
- ③列石の配列内に、複数の単位的な小配石や男・女性原理を象徴する立石・多孔石などを連結あるいは組み込み、単純な石の配列とはならない。
- ④列石の下部やその区画内部には、住居・貯蔵穴・墓・埋設土器などの遺構形成が皆無であり、土器・石器などの出土遺物も極めて僅少である。
- ⑤環状列石は、集落内に構築されている。

上記事項を若干補足すれば、②の石垣状の積み石は、野村遺跡に顕著に認められ、整然とした数段の横口積みが斜面上位側の配列で良好に残存している。また、牛石遺跡や千居遺跡でも外縁部の弧状列石が近接する側の石積みが顕著である。このように、列石の構築において内容的な偏りが斜面上位側や重層配列される側に集中する現象は、環状列石に外見的な正面観が存在したことを見唆している。また、その石積みが強度的に優れた小口積みではなく、「小牧野式」に近似した横口積み（平積み）である点は、装飾的効果を意図したこととも想定される。これらの点に関しては、環状列石の機能・性格に関わる問題でもあり、後段にて詳述したい。④に関して墓などの遺構が存在しない点は、環状列石が直接的に死者の埋葬に関わる施設ではなかったことを示している。また、遺物の僅少さは、列石の区画内が生活残滓が入り込むような日常的な空間ではなく、清掃等の片付け行為による聖

的空間が維持されていたことを物語っており、中央空間部に貯蔵穴や墓坑などが形成される環状集落の様態とは大きく異なる。⑤については、環状列石の外縁部に位置する柄鏡形敷石住居などの存在により明白であるが、同時にそこが祭儀を専らとする場所ではなく、日常的な生産活動が行われていたことも打製石斧や凹み石・磨り石類を主体とした出土石器のあり方から看取される。

一方、相違点には、以下の2点を上げることができる。

イ. 規模の面で地域差があり、関東地方の環状列石に比べて、中部・東海地方の方が大きい。

ロ. 環状列石の外縁部に1～2単位の弧状列石が同心円状に重層配置されるケースと、配置されない単層構造のケースが存在する。前者の場合には、柄鏡形敷石住居が外縁部弧状列石と同位置に形成される点でも異なる。

イについては、関東地方の久森・野村・東平井寺西・川尻中村の4遺跡例共に長径30～36m×短径26～30mとかなり近似した規模であるのに対して、中部地方の牛石遺跡では長・短径50mを測り、また東海地方の千居遺跡でも長径42m×短径32mとなって後者の地域の方が大規模化している状況にある。ロについては、久森・野村・千居の各遺跡が前者の例であり、後者には川尻中村遺跡を上げることができる。牛石遺跡では、径2～4mの4基の小配石が環状列石の東西南北の四辺に存在し、また千居遺跡でも同様の配石遺構が外縁部の弧状列石と連接して存在しており、久森・野村のような外縁部の弧状列石と連接する柄鏡形敷石住居に比定する見解もある（石井 1998）。牛石遺跡は外縁部が未調査のために確定できないが、この想定が正しければ環状列石には牛石遺跡の例を加えた3タイプが存在することになる。

一方、小規模な環状列石の事例は、群馬県坂本北裏遺跡と長野県円光房遺跡、静岡県上白岩遺跡の4例が存在する。時期的に中期末葉以降であることは確実だが、後期前半にまで下る可能性もあり、これも確定的ではない。各例ともに正円に近い環状形態を呈し、規模も直径8～12mとかなり斎一的な様態を示している。また、その構築が広口縦列配置を基本として列石中に単位的な立石・小配石を組み込んだり、列石下部や区画内部に何ら遺構を伴わないことや、集落内に構築されることなども共通する要素と言える。規模や形態の側面を除けば、内容的には先の大規模環状列石の縮小版とも言える様相を呈するが、坂本北裏や円光房のように同一遺跡内では大規模な列石遺構の外縁部に付属的に構築されており、基本的に単独では存在しない状況も窺える。

弧状列石 延長が20mを超える大規模弧状列石については、群馬県横壁中村・空沢・田篠中原、埼玉県塚越向山、長野県大野・円光房など6遺跡例を数えるが、形態的な差異を除けば基本的な構造は、先の大規模環状列

石における②～⑤の特徴とほとんど同様である。また、2基の弧状列石が平行配置されるケースが、塚越向山・横壁中村・空沢の3遺跡に認められ、こうした重層的構造を持つ点も環状列石に近似している。他の事例としては、部分的調査のために全容不明であるが長野県小林遺跡、静岡県年川前田遺跡なども同様の重層構造をもつ弧状列石の可能性が高い。

ところで、円光房遺跡では、弧状列石の区画内側中心部に立石を主体とする組石状配石群が存在しており、重層的配置の一種と考えられるが、他には認められない極めて特殊な構造を持っている。こうした点は、弧状列石の構造にも少なからず個別的あるいは地域的差異が存在することを示すものであろう。

小規模な弧状列石の場合は、群馬県坪井・長久保大畑・白川傘松・下鎌田、神奈川県当麻など関東地方で5遺跡、長野県曾利・尖石、山梨県屋敷添・大月など中部地方で4遺跡の合計9例が確認でき、列石遺構の中では最多数を占めている。構造的には、列石下部やその周辺に何ら遺構が存在しないなどの点で大規模な環状・弧状列石と大差ないが、列石中に立石や組石状配石が挟在したり石垣状に積み石されたりすることは希薄であり、より簡素な様態を呈している。また、基本的に他の列石遺構と組成する事例がなく、単独で形成される事例が大半を占めることも特徴の一つである。

b. 集落内の空間配置

環状列石 中期の列石遺構が、集落内に形成されていることについては前述したが、その機能・性格を想定する上で集落内での占地場所を確認することは必要不可欠である。先ず、関東地方の大規模環状列石のケースを、久森・野村・東平井寺西・川尻中村の4遺跡を見てみよう。川尻中村遺跡を除く3遺跡では、併行期の柄鏡形敷石住居が斜面上位の外縁部に存在し、環状列石は地形的に平坦な中心的エリアに位置する。詳細に見ると、野村の場合は環状列石が1～2段階古い住居群の上部に構築され、併行期の柄鏡形敷石住居群は前段階とは重複せずに斜面上方に占地替えをしている。久森では、環状列石や柄鏡形敷石住居群は前々段階の住居群とは全く重複関係を持たない。尚、両遺跡ともに柄鏡形敷石住居は、時期が下るに連れてより斜面上方に占地するようになり、特定の柄鏡形敷石住居（野村：J14号住居、久森：1号住居）が弧状列石と連接する状況も認められる。また、環状列石の構築に先行する時期の集落が、環状集落のような大規模なものではなく、両遺跡ともに小規模であることも見逃せない。川尻中村遺跡の場合は、前3例とは異なり大規模な拠点的環状集落の住居帶の内縁側に構築されて、いわば前段階の空間規制を踏襲するかのようあり方を示す点が特徴的である。しかし、併行期の集落規模は小さく、その住居帶が環状配置される状況は認め

られない。また、その柄鏡形敷石住居が環状列石よりも斜面上方に構築されている点は、前3例と同様である。

一方、中部・東海地方の牛石遺跡や千居遺跡ではどうだろうか。環状列石外縁部が未調査の牛石遺跡は、集落の形態・規模等が不明であるが、地形的にはその中心部に環状列石が構築されていると考えられる。千居遺跡では、前段階の環状集落の中心部を横断して環状列石や弧状列石が構築されており、野村遺跡のあり方に類似している。併行期の集落構造は不明瞭だが、「第1・2配石」が敷石住居とすれば、関東地方の事例と同様に環状列石よりも斜面上位に住居群が配置される構造となろう。

弧状列石 環状列石に付随しない大規模な弧状列石については、集落内での構築位置により大きくA・Bの2つに分類することができる。A類には、群馬県田篠中原遺跡、長野県円光房遺跡などがあり、集落の中心部に構築されてその斜面下方を囲繞するかのように弧が湾曲・開放し、斜面上位側には柄鏡形敷石住居が配置される傾向を有する。これに対してB類は、群馬県横壁中村・空沢、長野県大野の4遺跡例があるが、住居帶や集落末端の外縁部に構築されるのが特徴的であり、あたかも集落全体と外部とを区画・遮断するかのような全く異なった様相を呈する。また、A類には立石・小配石などが組み込まれる頻度も高く、内容的により複合的様相をもつ環状列石のあり方に近似する点でも、B類との違いは大きい。埼玉県塚越向山遺跡では、斜面の最上位に弧状列石が構築されて併行期の柄鏡形敷石住居は同標高ながらその北側に近接する。先のA・B両類とも様相を異にするが、遺構の構築可能な段丘幅が約30mと狭小なこともあります。基本的にA類に近似した様態と理解される。集落内におけるA・B類の弧状列石は、関東・中部地方とともに大きな差異は存在しないと言えるが、これまでのところ一遺跡内で両類同士あるいは大規模環状列石と併存する事例は認められず、個々の列石遺構の機能・性格を考える上で注意される。

小規模な環状・弧状列石については、前述したように多数の遺跡で確認されているが、前段階の拠点的な環状集落地内に列石遺構が形成される場合には、こうした小規模なものがほとんどと言って良い。関東地方でのケースを白川傘松・当麻の2遺跡で見ると、これらの遺跡では中期中葉～後葉段階にかけて十数棟の住居から構成された環状の集落形態が維持されているが、柄鏡形敷石住居や弧状列石が出現する加曾利E3式末～同E4式段階では、その環状形態や重層構造は崩壊している。傘松遺跡と当麻遺跡の小規模弧状列石は相似し、環状集落跡地の中央空間部や住居帶内縁部の付近に構築されて、前段階の環状原理や重層構造に規制されたかのような様相を呈する。しかし、傘松遺跡の場合には併行期の柄鏡形敷石住居がその中央空間部へと侵出し、また当麻遺跡の場

合は南側に集中配置されており、総体的に見れば両例共にそうした規制から逸脱していることがわかる。

中部地方では大規模な環状集落内に列石遺構が構築される例として、曾利遺跡と尖石遺跡の2例がある。部分的な調査のために詳細は不明だが、いずれも小規模な弧状列石と考えられる。また、列石遺構の事例ではないが、的場・門前遺跡でも大規模環状集落の住居帶内縁部に立石群が弧状に展開し、前段階の空間規制を踏襲するかの様態を示している。しかし、併行期と想定される中期末葉の住居数棟は斜面上位に存在しており、環状配置されない可能性が高い。墓坑上面の小配石が、小規模環状集落の住居帶内縁部に弧状に展開する立石遺跡の事例も、的場・門前遺跡に近似した様相を呈している。

以上のように、環状集落跡地に立地する大半の列石遺構には、前段階の住居帶や土坑・墓坑群などの遺構配置を規制していた環状原理との直接的関係は希薄と言えよう。しかし、小規模な弧状列石が前段階の環状集落の中心部近くに形成されるケースも少なからず認められる点は、広場的な中央空間部の意識が継承されている可能性も窺える。また、例外的ではあるが大規模環状列石の川尻中村遺跡例の場合も同様であり、必ずしも斉一的ではなく地域的差異があることも考慮する必要があろう。

c. 列石遺構周辺の諸遺構

環状・弧状列石の周辺には、必ずといって良いほど柄鏡形敷石住居が併存し、両者の密接不可分な関係が明瞭であるが、それ以外の遺構で目に付くのは、径50~100cm前後的小規模な方・円形の組石状配石と集石土坑や埋設土器などである。立石や丸石などを中心部に置いてその巡りを礫で囲繞する組石状配石は、主に大規模な環状・弧状列石の外縁部に散在しており、関東地方北部の久森・横壁中村・坂本北裏・田篠中原・塚越向山などの遺跡で検出されている。列石遺構を伴わない他の集落遺跡では、検出事例がほとんど見出せないことから、列石遺構と強い相関性を有していることが窺える。

一方、中部地方では立石単独かあるいはそれを囲繞する組石状配石が、大野・小林・円光房などの遺跡で列石遺構の外縁部に併存するが、丸石を囲繞する組石状配石は存在せず、関東域とは異なった様相を呈する。状況的には丸石を伴う組石状配石は、関東地方北部域に限定された地域的な配石遺構の可能性が高い。

集石土坑や埋設土器は、列石遺構の規模や形態の差を問わず各地域の当該期遺跡で検出例があり、かなり普遍的な遺構と考えられるが、通常の集落遺跡に比較すれば列石遺構を伴う集落での数量が多いと言える。集石土坑は「儀礼的炊爨」行為に伴う遺構とも想定されているが（谷口 1986）、少例ながら群馬県坪井・田篠中原、長野県大野、山梨県大月などの遺跡で検出されている焼土痕や被熱痕などとも合わせて、火を用いた儀礼的行為の存

在が推定されよう。ただし、焼獸骨片の検出事例がほとんど認められない点は、そうした儀礼が後期段階でのあり方とは異質であったことを示唆している。

この他に、掘立柱建物が列石遺構と共に検出されている事例は、長野県大野遺跡を除いて見当たらず、少なくとも大規模な環状・弧状列石に随伴する可能性は極めて低いと言えよう。

d. 列石遺構の構築時期とその消長

列石遺構は、その石材中や下部に土器を伴うことが極めて稀であり、時期を確定することはなかなか困難なことである。多くの場合、住居などの遺構との重複・配置関係や周辺からの出土土器を参考に想定しているのが実状であるが、中期末葉段階で終焉する遺跡も多々認められ、その想定も確度の高いものと言える。

先ず、関東地方での状況を見ると、栃木県佐貫環状列石を除き、他の全ての遺跡から併行期の住居が検出されている。集落の内容を充分に想定できる程度に調査しているのは、群馬県久森・野村・東平井寺西・三原田・田篠中原、埼玉県塚越向山、神奈川県川尻中村・当麻の8遺跡にとどまる。

大規模環状列石の久森・野村の両遺跡例は、斜面上位に構築された弧状列石に近接あるいは連接して加曾利E3式末～同E4式期の柄鏡形敷石住居が存在し、環状列石はそれよりも斜面下位に構築されている。このような柄鏡形敷石住居との配置関係や両遺跡ともに後期の遺構が存在しないこと等から、加曾利E3式末～同E4式期にかけて構築され、そして同期内で終焉を迎えたことが想定できる。部分的調査ながら東平井寺西・川尻中村の各事例もこれらと同様の遺構状況が認められ、ほぼ同期に比定し得る。このように、大規模環状列石の場合には、その構築・終焉期は加曾利E3式末～同E4式期であり、後期にまで継続する例は皆無である。つまり、中期末葉に出現した大規模環状列石は、後期初頭まで構築され続けることはなく、関東各域においてほぼ斉一的に中期の枠内という短期間に消滅したことが看取できる。

一方、小規模環状列石や大・小規模弧状列石の場合はどうだろうか。やはり明確な伴出土器を持つものではなく、群馬県坂本北裏遺跡の小規模環状列石の場合、加曾利E3式後半以降であることは確実だが堀之内1式期まで下る可能性もある。大規模弧状列石の田篠中原遺跡や塚越向山遺跡などは、集落の存続時期や住居などの遺構との配置関係から加曾利E3式末～同E4式期に比定することができ、他に群馬県横壁中村・空沢などの両遺跡も先と同様のあり方から当該期と考えられる。小規模弧状列石では、群馬県坪井・白川傘松、神奈川県当麻などが同時期に想定できる。

このように、明確に列状構造を有する環状・弧状列石の出現期は、遡ったとしても加曾利E3式期末段階であ

り、そしてその構築は同E 4式期末までの中終焉して、確実に後期まで継続する事例は見あたらない。こうした動向は、基本的に先の大規模環状列石と軌を一にするものであり、各列石遺構が中期末葉における祭祀構造の中で相互に連関して存在していたことを示している。また、後期へと継続する事例が存在しないことは、直接的には後期の列石遺構の立地が別地點を選択したことを表示するものであるが、そこには両時期の祭儀を巡る観念の相違が反映されていることを窺わせる。いずれにしても、列石遺構を介在した中期末葉と後期前半との間には、大きな文化的画期が存在したことを示唆するものだろう。

次に、中部地方における列石遺構の出現状況を見てみよう。従来から配石遺構の機能・性格や出現過程を巡って注目されてきたのは、長野県の上原遺跡や阿久遺跡の前期の事例である。上原遺跡例は10数本の立石を直径2~4mの円形状に巡らせたもので、阿久遺跡例は単位的な直径1mの集石遺構群が環状集落の重層構造に規制されて住居帶の内側に環状配置されたものであり、いずれも列状構造を持たない点で中期後半の列石遺構とは異質なものと言える。また、後述するように、前期後半から中期前半にかけての列石遺構の事例が皆無な状況を重視すれば、阿久遺跡のような事例を中期後半の列石遺構の祖型としてその系統上に置くことはできない。

ところで、当地方の明瞭な列状構造をもつ環状列石や弧状列石の出現時期については、長野県の小林遺跡の事例から中期前葉とする見解（林 1990、阿部 1998）や、大野遺跡の事例から「中期中葉の最新段階～中期後半」とする見解（佐々木 2002）が示されている。これについては、前章の資料分析の中でも触れておいたが、小林遺跡の場合、列石下部から検出された梨久保式土器を伴出する「第1号土壙」が、列石の構築以前のものである可能性を排除できることや、その周辺部から多量に出土している中期後葉III・IV期の土器片を考慮すれば、時期的には中期後半～末葉段階まで下ると見るのが妥当であろう。また、大野遺跡については、小規模環状集落の住居帶内側に配置された墓坑群上面の小配石群を「環状列石」と認定したものであるが、これらの小配石が相互に連結するような列状構造を持たない点から見ても、「環状列石」ではないことが明白である。基本的には、環状集落の同心円状の重層構造により、墓坑帶・掘立柱建物帶・住居帶などが配置された結果と判断され、このような墓坑上面の小配石群を環状列石の祖型と見なすことはできない。ただし、住居帶外縁部に構築されている「直線状列石」は明確な列状構造を有しており、中期後葉IV期以降の曾利V式や加曾利E 4式併行の出土土器が見あたらないことから、初現期の列石遺構の可能性はある。

また、これらの事例とは異なるが、環状列石の祖型とされているものに山梨県後田遺跡の例がある。佐野隆は、

配石下位に曾利III～IV式期の埋設土器を伴う同遺跡C区1・2号配石を例に引き、「中期末の配石遺構が、埋葬、葬送儀礼に関連して出現した」ことや、関東・中部地方の環状列石が東北地方に先駆けて出現した可能性などを指摘している（佐野 2001b）。列石遺構の機能・性格に関わる点に関しては後段で扱うとして、これらの配石遺構が中期末葉の列石遺構の祖型として認定できるか否かが問題であろう。結論的に言えば、形態や石材配置と列状構造の点で列石遺構の様態とは大きく異なっており、少なくとも環状列石の祖型と見ることはできない。こうした配石遺構が曾利III式段階に出現していることは、当該期の堅穴住居内での石柱・石壇の存在とも併せて、列石遺構の出現・構築に何らかの関係性を有するとも考えられるが、基本的には中部地方の地域性の範疇で捉えるべき内容であろう。

大規模な環状列石の出現期については、牛石遺跡の1例から窺い知るのみであるが、それも列石外縁部の調査が行われていないために確定することは難しい。ただし、列石周辺から出土している土器には、曾利IV～V式と加曾利E 4式が主体的に認められるようであり、当該期を中心とした構築である可能性が極めて高いと言えよう。

同様に、小規模環状列石や弧状列石の出現期も確定的ではないが、長野県円光房遺跡や山梨県中谷遺跡の事例から見て加曾利E 4式期や曾利IV・V式期が想定され、後期まで継続する可能性は低い。

東海地方の列石遺構の出現期も、千居・年川前田・上白岩などの3遺跡例から、曾利IV・V式期を中心することが窺える。特に、千居遺跡の大規模環状列石については、後期前半の土器がほとんど存在しない状況から見て、中期終末段階で廃絶していることが想定できる。

以上のように、関東・中部・東海の各地方を通じて、明確な列状構造をもつ環状列石や弧状列石の出現は、加曾利E 3式後半段階であり、曾利式で言えば同IV式期を遡ることはない。また、環状列石の形成は関東地方で若干先行する可能性も想定されるが、大きく前後することなくほぼパラレルな状態で各地域に構築されたと考えられる。さらに、弧状列石などを含めた中期末葉の列石遺構は、後期前半まで継続して構築・利用されることなく、同終末期までの短い期間内で終焉を迎えるという、地域を超えた共通の文化事象を確認することができる。

これに関連して、同一遺跡内に中期末葉から後期前半の列石遺構が共存する例が、関東地方の横壁中村・塚越向山・三ノ宮下谷戸、中部地方の円光房などの遺跡で確認されている¹⁵⁾。しかし、これらの事例でも、中期末葉の列石遺構の上部に後期の列石遺構が連続・累積的に構築されることなく相互に地点を変えていることは、基本的に先の断絶状況と同次元の現象として理解できよう。

(2) 後期前半の列石遺構の地域性と普遍性

a. 列石遺構の構造

前章で各地域の事例を検討する中で明確になったように、後期においては大規模な環状列石の構築は認められず、規模の差は存在するものの弧状列石を主体とした列石遺構へと変容している。その様態を基に分類すると、柄鏡形敷石住居の張出基部に連接するIタイプと、そのように住居とは融合・一体化することなく単独形成されるIIタイプとの2つに分類することができ、さらにそれら列石の下部に墓坑や配石墓を随伴するa類と、随伴しないb類との2つに細分される。こうした列石遺構について、各タイプ・地域別にその詳細な構造を見てゆこう。

Iタイプの弧状列石 関東地方では、弧状列石が柄鏡形敷石住居の張出基部に連接し、かつ下部に墓坑・配石墓を伴うIaタイプは、群馬県前中後・行田梅木平(2号配石墓群)、神奈川県馬場No6・三ノ宮下谷戸(16号敷石住居)などの遺跡に、また墓坑・配石墓を伴わないIbタイプは、群馬県浅田・暮井、神奈川県下北原・三ノ宮下谷戸・曾谷吹上の各遺跡に存在する。Iaタイプの弧状列石は、土坑墓・配石墓の上部に広口縦列に配置されるが、構築当初は土坑墓や配石墓の上部配石と連接している状況が観察でき、両者の構築がほぼ併行して行われたことが想定される。行田梅木平遺跡(図6-2)や前中後遺跡(同一3)では、土坑墓の上部配石に立石や丸石を囲繞した組石状配石が配置され、その標石的な用法に中期末葉との質的違いを窺うことができる。また、三ノ宮下谷戸遺跡(同一6)の事例は、厳密には列石下よりも若干ずれて配石墓・石棺墓が配置されているが、意識としては先例に類似するものであろう。前中後遺跡や行田梅木平遺跡の場合、柄鏡形敷石住居張出部に近接する位置では土坑墓や配石墓が主体的だが、列石の端部では石棺墓が存在されており、列石と墓の構築が張出部に近接した場所から開始されて、徐々に外側へと拡大・延長されたことが窺える。Ibタイプも広口縦列配置を基本的に構築され、列石内に立石を組み込む事例が浅田・下北原・三ノ宮下谷戸・曾谷吹上の各遺跡に認められるが、浅田遺跡(図7-10)では丸石を囲繞した組石状配石や「小牧野式」構築法の採用による数段の石垣状積み石が存在し、他例との違いが際立っている。また、曾谷吹上遺跡(同一11)でも横に長く伸びた列石の一部に横口積みを数段に施した箇所が認められ、浅田遺跡と共に盛土の法面を被覆するような様態を推定し得るが、中期末葉の野村遺跡のように正面観や外観を意識した構築でもあることが窺える。尚、この曾谷吹上遺跡の弧状列石の場合、複数棟の柄鏡形敷石住居と連接関係にあるが、これは1棟の住居が列石との関係を維持しつつ一定の期間内において同一地点での建て替えを繰り返した結果であり、同時に前段階の列石配置を壊すことなく連接

を繰り返したことでも長く連続的な配列の形成を促した要因であろう。弧状列石と共に当該住居の機能・性格を考慮する上で踏まえなければならない要点であろう。

ところで、このIbタイプの弧状列石と連接関係にある柄鏡形敷石住居には、下北原遺跡第3環礫方形配石遺構(図6-9)、曾谷吹上遺跡10号住居(同一12)、三ノ宮・下谷戸遺跡扇形敷石(同一5)などのように、主体部外縁に周堤礫を持つものがある。これについてはいくつかの解釈が提示されているが、僅少ながら弧状列石を随伴しない柄鏡形敷石住居にも確認されており、先と同様の外観を意識した装飾的要素を窺うこともできる。この点に関しては、後段にて詳述したい。

中部地方におけるIaタイプは、長野県の岩下・北村・茂沢南石堂の3遺跡の他に、その可能性のあるものとして山梨県の大柴・青木・金生・殿原の4遺跡がある。後者の4遺跡例は柄鏡形敷石住居とではなく、それに系譜をもつ「方形周石住居」との連接関係であるが、後述するようにこのIaタイプの終末的かつ地域的な様態をとどめていると考えられる。各事例の弧状列石は、関東地方の事例と同様に柄鏡形敷石住居の張出基部を中心とした部位に付設され、土坑墓・配石墓上部の立石や組石状配石を連接しながら、やはり張出部前面の斜面下位方向を囲繞するように弧が湾曲している。また、大半の遺跡においてこの前面部には、無遺構・無遺物の空間部が形成されているが、大柴遺跡(図10-5)では3号住居に連接する弧状列石の前面部に、立石・石棒・丸石などを組成した配石遺構が重層的に配置される点で異なった様相を見せている。岩下遺跡(図9-3)では、列石の構築に際してかなり大規模な掘削・盛土造成を行い、その法面に列石を複数段に横口積み(平積み)した状況が認められる。様相的には、Ibタイプの神奈川県曾谷吹上遺跡や群馬県浅田遺跡などの事例と類似しており、重複した装飾的効果が看取される。北村遺跡(図9-1)の3基の弧状列石SH1111・SH506・SH510は、SB594・SB566・SB555の3棟の柄鏡形敷石住居と各々連接関係を有する点で特徴的である。時間的な先後関係から見て、SH506→SH1111・SH510という構築順序が想定され、先の曾谷吹上遺跡例と同様にその全てが同時併存するわけではないが、配石墓を含めて柄鏡形敷石住居が同一地点に累積的に構築されるあり方は、Iaタイプの中でも際立っている。これらの中で、弧状列石SH510と連接するSB555号住居は、図13-7のように主体部外縁に周堤礫を配置しており、SB594・SB566号住居と異なる点に注意する必要がある。北村遺跡のような遺構の累積状況をもう少しシンプルにしたのが茂沢南石堂遺跡(図9-4)である。「第2址」とされた柄鏡形敷石住居は、その張出部前面に弧状列石や石棺墓群を随伴するが、この前身は南東側に近接した弧状列石を伴う「第9址」の柄鏡形敷

石住居であり、若干位置をずらしながらも同一地点での構築が継続される良好な事例と言えよう。一見すると脇土的な住居（15・16号）をその両側に持つ岩下遺跡の13号住居の場合も、茂沢南石堂遺跡と類似した時間的先後関係の中で、最終的に14号住居→13号住居へと収斂されたことが想定される。金生遺跡の列石（図10-7）の場合には、東端の23号住居への連接を初現としてその西側の「方形石組」とされた4棟の住居への建て替えに連動しつつ、その長大化が図られたと推定される。これらの住居がいすれも「方形周石住居」である点は、柄鏡形敷石住居が消滅した後においても列石遺構と住居との融合関係がしばらくは継続したことを物語る事例と言えよう。位置的に金生遺跡と近接する青木遺跡でも、弧状列石と「方形周石住居」との融合関係が想定され、こうした構造が八ヶ岳西南麓に一定の広がりを持つことが窺える。

墓坑上部に標石状に配置される組石状配石には、規模1m前後の方・円形状のものやそれに立石を伴うものなどいくつかのバリエーションが認められるが、丸石を中心配置してそれを囲繞するタイプは極めて僅少であり、明確な事例は北村遺跡（例えばSH525配石）のみにとどまる。中部地方の丸石については、中期後半の豊穴住居内で確認されるが、後期段階では住居外の配石・集石遺構に組み込まれてゆくことや、石棒・埋甕と共に生産活動全体に関わる祭祀遺物であることが指摘されており、多数の検出例がある（田代 1989）。しかし、群馬県域で検出されているような丸石を方形石組み炉状に囲繞する例はなく、正確には北村遺跡の事例も同一ではない。両地域では中期末葉段階から丸石祭祀を巡る原理や観念に差異があり、おそらくその違いが後期前半にまで継承されたことを示すものであろう。茂沢南石堂・青木・金生などの各遺跡の列石下部には石棺墓群が存在しており、墓坑や配石墓を主体とする岩下・北村の事例に比べて新しい要素を有している。

また、I bタイプには長野県伊勢宮・勝山、山梨県川又・姥神などの4遺跡例の他に、近年調査された長野県塩野目尻（小池 2003）・羽場崎（福島 2003）などの2遺跡例を上げることができる。長野県勝山遺跡（図10-8）の延長約40mの列石遺構は、柄鏡形敷石住居の44号との連接関係は明確であるものの他住居との関係は判然としない。しかし、44号住居の存続期内でこの列石が構築されたとは考え難く、おそらく神奈川県曾谷吹上遺跡のようにその構築が特定住居の建て替えに連動することにより、長大化したと推定される。ただし、I aタイプの北村遺跡や金生遺跡のように列石と墓とが複合する場合には、そうした特定住居が廃絶された後もその場が祖先祭祀的施設に置換されて、配石行為が継続・拡大しているケースもあり、決して一様ではない。

IIタイプの弧状列石 柄鏡形敷石住居と連接しないIIタイプの中で、下部に集団墓を伴うII aタイプの関東地方の事例は、群馬県長野原一本松・行田梅木平（1・3号配石墓群）、東京都田端などの遺跡例がある。行田梅木平遺跡の1号配石墓群（図8-14）では、立石・丸石を囲繞する組石状配石と共に有頭石棒が、頭位方向を双極に違えて整然と並ぶ配石墓・石棺墓の上部に配置され、これらを相互に平行する2基の弧状列石が連接しながら数段に横口積みされている。この列石の構築に際しては、掘削・盛土の整地行為が存在し、先の浅田遺跡や曾谷吹上遺跡での想定と同様の構築状況が看取できる。長野原一本松遺跡（図7-13）の例も平行する2基の弧状列石が配石墓群の上位を連結・走行しており、行田梅木平遺跡と同様の構造を呈する。この重層的な列石配置は、下部の配石墓・石棺墓の配列と対応したものであり、中期末葉段階の野村遺跡に代表される大規模環状列石の外縁部弧状列石の重層配置とは異質である。田端遺跡は円環状の列石が積み石状に墓坑・石棺墓群の上部に構築されているが、当初段階ではやはりそれらの墓を広口縦列を基本とした用石配置で連結しており、その後墓域から祭儀的施設へと変容する中で立石や有頭石棒などを組み込みながら、積み石状の様態となったことが推察される。これらの3遺跡では石棺墓の存在が主体的であり、IIタイプの系譜や後期の列石遺構の変遷を考える上で注意を要する。尚、関東地方では、弧状列石が単独で形成されるII bタイプの良好な事例が無く、その様態についても判然としない。

中部地方では、II aタイプには山梨県青木遺跡2号配石（図10-6）が認められるのみで事例自体が少ない。複列配置される石棺墓群に対応して平行する列石2基がその上部に構築され、先の行田梅木平遺跡1号配石墓群と類似した様態を示すが、列石内部の構造は詳細不明である。II bタイプは、長野県堂前遺跡や北村遺跡SH1号配石、山梨県塩瀬下原遺跡12号配石、宮久保遺跡、前田遺跡などの事例がある。塩瀬下原遺跡（図12-15）や堂前遺跡（図11-12）では弧状列石の内側に同期と推定される柄鏡形敷石住居が存在し、Iタイプの弧状列石とは異なった空間構造を有している。北村遺跡では列石内に立石を組み込み、また堂前遺跡では石材を部分的に複列配置しているが、組石状小配石などの存在に乏しく、構造的には簡素と言える。

東海地方では、後期前半の列石遺構は破魔射場遺跡（図12-17・18）の事例のみであり、40号配石がII aタイプに、18号配石がII bタイプに比定される可能性があるが、残存不良で判然としない。また、柄鏡形敷石住居と連接するIタイプも見当たらず、関東・中部地方に比べて列石遺構の存在が希薄な状況にある。

上記のように、関東・中部地方における後期前半の列

石遺構は、柄鏡形敷石住居の張出基部に連接する I タイプの弧状列石を主体とするが、それは集団墓を伴う I a タイプと伴わない I b タイプの両タイプによって構成されるなど、ともに共通した様相を呈する。また、柄鏡形敷石住居との連接関係を持たない II タイプは、下部に集団墓を伴う II a タイプが両地域に共通した様相で存在するが、他遺構と直接的関係を持たない II b タイプには地域的様相も認められる。内容的には、I a タイプと II a タイプとが、また I b タイプと II b タイプとが相互に類似し、後者の方がより簡素となる傾向を持つが、配石墓や石棺墓の上部配石との区別が困難なこともあります。基本的に両者間にはそう大きな差異がないと言える。構造的な側面で注目されるのは、弧状列石がその前面部の斜面下位を囲繞することや、かなり大規模な掘削・盛土による地表面の整地行為と石垣状の積み石であり、特に I タイプや II a タイプに多見されることとは、それが当該タイプの基本的構成要素の一つであったことを示している。また、これらタイプの弧状列石において乱石積み状の様態を呈するものは、継続的な給石による場合も想定されるが、廃絶後にこのような石垣状の積み石の崩落によって形成されたことも考慮される。こうした石垣状積み石の構築方法には、広口縦列配置を基本にした横口積み(平積み)工法が採用されており、群馬県浅田遺跡に見られる「小牧野式」構築法は皆無と言える状況にある。このことは、関東・中部地方では中期末葉の列石遺構の構築法が後期前半へと継承されたことを示唆すると共に、「小牧野式」を採用する東北地方北部域の列石遺構との明瞭な差異とも言える。ただし、前者の弧状列石下部に埋葬施設が組み込まれている点は、中期末葉の列石遺構とは大きく異なっており、その機能・性格の変質が窺える。

b. 集落内の空間配置

柄鏡形敷石住居と連接する I タイプの弧状列石は、関東・中部地方の群馬県行田梅木平、神奈川県下北原・曾谷吹上、長野県北村・岩下・勝山、山梨県金生などの各遺跡例から見ると、ともに一集落内では同時期に 1 基のみが存在する事例が大半を占めており、基本的に 1 棟の特定住居との融合関係が認定できる。また、これらは集落内の斜面上位や中心部に位置し、しかも弧状列石により囲繞・区画されたその前面の斜面下位は、何らの遺構も存在しない空間部となる場合が多い。このような空間配置について、長野県三田原遺跡・岩下遺跡などでは、弧状列石を延長したエリアを環状と想定し、「環状集落」と呼称・認定している(宇賀神・他 2000)。しかし、実際には両遺跡ともに他の住居や土坑などが、この空閑地の外周に環状配置されている訳ではなく、基本的に住居帯が環状構成される中期後半段階の環状集落とは異っている。換言すれば、先の特定住居を中心とする後期前半の集落構造は、中期後半の環状集落に存在した「環原理」

とは、異質の原理・観念で構成されていると想定される。

また、埋葬施設を随伴しない I b タイプにおける墓域のあり方を見ると、加曽利 B 1 式期の神奈川県北原遺跡(図 7-8)では当該期住居の東側下位方向へ 15~30m 離れた 2 地点に分かれ、また同期の曾谷吹上遺跡(同-11)でも同様に西側下位方向に 15m 離れて存在するなど、ともに墓域とは直接的に関わらない様相が認められる。こうしたあり方は、埋葬施設を随伴する I a タイプとは対照的であり、集団内の葬祭儀礼における関与の度合いの差異を反映していることを示唆するものだろう。

曾谷吹上遺跡や北村遺跡(図 9-1)、勝山遺跡(図 10-8)などの例は、丘陵斜面の地形変換点に沿って構築された住居帯中に構築され、他の事例とはやや異質な感じを受けるが、詳細に見れば 1~2 棟の建て替えに伴う新旧の多重複関係により形成されている可能性が高く、基本的に他事例と同様のあり方を有すると考えられる。ただし、曾谷吹上遺跡や北村遺跡では、弧状列石と融合関係を持つ 2 棟の柄鏡形敷石住居が集落の中心地に同時併存する可能性も窺え、その場合には先の事例とは異なる理解を必要とする。この点に関しては、特定住居の機能・性格を含めて後段にて扱うことにしたい。

また、II タイプについては明瞭な事例に乏しいが、II a タイプの行田梅木平遺跡や山梨県青木遺跡(図 10-6)では、集落の斜面上位や中心部に占地する顕著な傾向は認められず、I タイプとは異なった様相を呈する可能性が高い。II b タイプに関しては、岩下遺跡において沖積地に望む集落の斜面末端部で検出された弧状列石が注目される。この列石は延長約 5 m の部分的な検出にとどまっているが、集落外縁部の囲繞を意識した中期末葉段階の群馬県横壁中村・空沢の事例に類似し、後期前半段階でも同様の列石遺構が確認できる点は重要であろう。

尚、I・II タイプの各列石遺構と他の定形・不定形状配石遺構との組成については、良好な事例が乏しく判然としないが、三ノ宮・下谷戸遺跡(図 6-4)や下北原遺跡などを参照すれば、I タイプの列石遺構の近縁には少なくとも複数種の配石遺構の存在が確認でき、複合的な状況が窺える。また、先の岩下遺跡の事例も柄鏡形敷石住居と連接する I a・II b タイプとが併存すると推定され、当該期の列石遺構の多様さを示している。

c. 列石遺構周辺の諸遺構

列石遺構の周辺部に存在する住居以外の遺構で比較的多見されるのは、埋設土器、集石土坑、焼土・焚火痕等である。埋設土器や集石土坑は中期末葉の列石遺構の周辺部にも存在し、系統的な変遷を窺わせるが、焼土・焚火痕は柄鏡形敷石住居内での検出例が大半を占めている。これらの遺構は II b タイプの列石遺構では希薄な状況にあるが、I a・b タイプや II a タイプではかなり普遍的な存在である。また、焚火行為に関連して焼獸骨片

の住居内からの検出例も多見され、当該期の特徴的な事象の一つとなっているが、長野県北村・伊勢宮、山梨県大柴・姥神などの遺跡では、列石遺構内からも出土しており、中期末葉の列石遺構とはその周縁部で執行された儀礼内容の差異が顕著である。

これらの遺構以外では掘立柱建物の存在が注視されるが、検出例は群馬県行田梅木平・横壁中村、神奈川県北原No11・馬場No.6などの4遺跡にとどまり、かつ多数棟の検出は馬場No.6遺跡のみで他は1~2棟程度に過ぎない。この掘立柱建物については、棟持柱を有する馬場No.6遺跡の事例を特定住居の「核家屋」と併存する一般的な住居に比定する見解もある（石井 1996）。当該遺構の検出は意識的な調査を必要とするものもあり、断定できる状況にはないが、列石遺構の周辺部ではその存在が希薄であることが窺える。尚、群馬県横壁中村遺跡では、I bタイプの弧状列石と連接した柄鏡形敷石住居に近接して大規模な1棟が検出されており、倉庫的な性格が想定される（藤巻 2002）。

d. 列石遺構の構築時期とその消長

前項で分類したI・IIタイプの列石遺構が、時間的にどのような先後・平行関係を持つのかを確認する必要がある。先ず、関東地方での様相を見ると、I aタイプの初現は、前中後遺跡・行田梅木平遺跡2号配石墓群・馬場No.6遺跡の事例から堀之内2式期であり、下限は三ノ宮下谷戸遺跡16号敷石住居の例から加曾利B1式期までが確認できる。また、I bタイプの初現は暮井遺跡の例から堀之内1式期、下限は下北原遺跡・曾谷吹上遺跡の例から加曾利B1式期である。一方、II aタイプの初現は長野原本松遺跡・行田梅木平遺跡3号配石墓群の例から堀之内2式期であり、下限は行田梅木平遺跡1号配石墓群・田端遺跡の例から加曾利B2式期に比定される。II bタイプは良好な事例が存在しないが、塙越向山遺跡弧状列石の例から堀之内1式期での存在が確認される。

中部地方での状況は、I aタイプの初現が北村遺跡SB566住居の例から堀之内2式期、下限が金生遺跡23号住居の例から少なくとも加曾利B2式期にまで下ることが想定される。I bタイプの初現は三田原遺跡の例から堀之内1式期に、下限は岩下遺跡・北村遺跡SB555住居から加曾利B1式期となる。II aタイプの初現や下限については、時期の確定できない青木遺跡2号配石の例を参照するしかないが、およそ加曾利B1~B3式期に比定される。II bタイプもII aタイプと同様に、時期を確定できる例がないが、岩下遺跡・宮久保遺跡・北村遺跡SH1配石・塙瀬下原遺跡12号配石などの事例から、その消長は堀之内1~2式期の中で収束する可能性が高い。

東海地方では、事例そのものが極めて乏しい状況にあるが、破魔射場遺跡でII a・bタイプが認められ、確定的ではないものの堀之内式期にほぼ限定されている。

以上のように、I aタイプの初現は関東・中部地方共に堀之内2式期であり、I bタイプが同1式期であるのと比べてやや後出することが窺える。しかし、その下限は関東地方では両タイプともに加曾利B1式期であるのに対して、中部地方ではI aタイプが同B2式期まで下る可能性が高く、特定住居と墓域との関係は中部地方の方がその命脈を長く保持したと言える。

II aタイプについては、関東地方では堀之内2式期に出現して加曾利B2式期までの消長が確認でき、若干確實性に欠けるものの中部地方でもほぼ同じ様相と考えられる。構造的に中期後半の弧状列石と大差が認められないII bタイプは、関東・中部・東海地方ともに称名寺式期の事例を見出すことができず、堀之内1式期を初現として同2式期の範疇で消滅する可能性も窺える。

後期前半の列石遺構を総体的に見れば、関東地方と中部地方との差異は極めて僅少であり、両地域ともにほぼ軌を一にした変遷を遂げていると言えよう。内容的には、堀之内1式期にI bタイプやII bタイプが先行して出現し、そして若干遅れて堀之内2式期にI aタイプ・II aタイプが出現するという状況を看取できる。このことは、列石遺構と柄鏡形敷石住居との融合的関係が先行し、次の段階でそこに墓域が取り込まれてゆくという変遷を指示するものであろう。また、II bタイプもこのII aタイプに連動した出現が認められるが、その終焉はII aタイプよりも若干遅れると想定され、最終的に特定住居との関係を持たないこのII bタイプに収斂されてゆく状況が看取される。後期後半以降には、群馬県域でも居住域と墓域・祭儀域との分離傾向が認められるが、II bタイプの残存はこうした動向の底流をなすものであろう。

また、後期前半の列石遺構については、中期末葉から継続的に構築される事例が存在しないことも重要であろう¹⁶⁾。称名寺式期の明瞭な事例が存在しないことを考えれば、両時期の不連続性や断絶状況は歴然としているのであるが、同一遺跡内で両時期の列石・配石遺構が検出されている群馬県横壁中村遺跡や長野県円光房遺跡の場合でも、それらの構築地点は明確に異なっており、こうした理解を裏付けている。

(3) 中期から後期への変容

a. 中期末葉の列石遺構の系譜

列石下部に墓坑などの遺構を伴わない中期の大規模な環状列石や弧状列石の出現が、関東地方では加曾利E3式末葉段階を遡ることはなく、中部・東海地方でもそれに近似した時期であることは、先に見てきたとおりである。また、その出現が柄鏡形敷石住居の形成と軌を一にしていることや、両者が敷石・配石行為という類似した観念・原理を基に同一の文化的動向の中で構築されていることも従来から指摘されてきたところであるが（山本

1981、石井 1998)、同時に柄鏡形敷石住居の形成が加曾利E 4式土器の伝播・浸透と密接に関連する状況(櫛原 1995、本橋 1995・2003、水沢 2002)を考慮すれば、大規模環状列石の出現・構築も同式土器文化との関連で把握されることになるだろう。実際に、加曾利E 4式系土器の伝播・浸透が希薄な天竜川上流域の的場・門前遺跡では、立石を伴う組石状配石群が前段階の環状集落の中広場外縁に弧状配置されるなどの独自性を見せており、こうした理解の妥当性を傍証している。換言するならば、中期の大規模な列石遺構は、前期の長野県阿久遺跡に見られる「環状集石群」や上原遺跡の「環状石籬」などとは、系統的な脈絡を持たないことを意味するものであり、新たな契機の基に出現したと見なければならぬ。しかし、その一方でこの系譜がどこに求められるのかは不明であり、現段階で加曾利E 3式末期および曾利V式初段階に突如出現するという状況を説明することは難しい。

ところでこうした列石遺構の出現の背景には、自然環境の悪化と前段階の拠点的な環状集落の崩壊や小規模かつ散在的な居住形態への移行などの自然的・文化的な諸事象が存在するとされ、社会総体が衰退化へと向う中で呪術的な文化要素を深めた結果が、このような列石遺構や柄鏡形敷石住居の出現・構築に連繋しているという見方が主流をなしている。これに対して佐々木藤雄は、「過剰なほどの特異な形状と構造を特徴とする柄鏡形敷石住居址の建設が、通常の竪穴住居址と比べて遙かに多くの「労働力」と高い思弁に裏付けられた「文化力」を必要とする作業」であったとし、これらを支える物質的基盤を等閑視した従来の観点の問題性を指摘している。また、同時に自然的・社会的環境の悪化に伴う資源と人口の急激な不均衡化が、社会の階層化をもたらす契機になったとする北米カルフォルニアの民族誌のモデルを引用する中で、自説でもある階層的矛盾が深化する「変質期」の中期終末から後期後半段階を、階層社会論的な視点から捉え直す必要性を説いている(佐々木 2003)。確かに従来の考え方では、社会的衰退化の中で多くの労働力投下が必要な大規模列石遺構の構築を可能とする背景を整合的に説明することは難しく、傾聴すべき見解である。

その一方で、佐々木が「柄鏡形敷石住居址の出現と密接な関係にある環状列石が、すべてのメンバーが等しく葬られた集団墓であるという定説とは異なり、階層的な性格を色濃く帯びた特定集団墓」であり、「環状列石形成の主要な目的の一つが、従来、縄文集落の中で一体のものとして存在していた住居群と中央広場、日常空間と非常空間、生者の世界と死者の世界の截然とした区別にあり、またそのことによる中央広場の祭祀的・儀礼的性格の一層の強化・純化にあった」(佐々木 2003)としている点については、前項での検討で列石下部に埋葬施設

が何ら存在しないことが明確である以上、首肯することができない。しかし、こうした点を留保したとしても、後期前半に顕在化する特定住居と弧状列石・集団墓との結合関係を視野に入れれば、階層的社会やその矛盾が柄鏡形敷石住居と大規模列石遺構の出現・構築の背景と見る佐々木の想定は、真摯に検討する必要があろう。

ところで、韮崎市後田遺跡のC区2号配石に付随する列状配石下には、曾利IV～V式の埋設土器が12体存在するが、これを埋葬に関わる施設とする見解(新津 1990、佐野 1999)や、こうした配石遺構をベースにして中期末葉の配石遺構が「埋葬、葬送儀礼に関連して出現した」(佐野 1999)とする見解も提示されている。しかし、この埋設土器内から人骨等が検出されたわけではなく、仮にそれが再葬墓的な土器棺墓であったとしても、他には認められない特殊なものであり、これをもって環状列石が埋葬・葬送儀礼との関わりで出現したと見ることはできないだろう。その機能・性格付けについては慎重な検討が必要であるが、中期後半以降に顕在化する列石遺構に埋葬施設が組み込まれていない点を重視すれば、大野遺跡で見られるような配石墓やこの後田遺跡のような配石遺構に、環状・弧状列石との直接的な系譜関係を認めることはできない。

b. 中期末葉の列石遺構の機能・性格

筆者は前稿において、群馬県域の中期末葉の大規模列石遺構が、少数かつ特定の集落内に構築されることや、当該集落内の居住者だけでは到底不可能な労働力投下を必要とすることなどから、それら集落が環状集落消滅後の地域集団を新たな祭祀・儀礼で統括する拠点であり、それを随伴する集落と他の集落との間に階層的関係の存在を想定した(石坂 2002)。今回、関東地方全域や中部・東海地方へと分析対象域を拡大したが、やはり構造的な複合状況やその立地動向などから見て、大規模環状列石を頂点としてその下位に大小規模の弧状列石が位置するような祭祀構造の存在を想定することができる。しかし、そこに構築された個々の列石遺構の機能・性格についての分析は、課題として持ち越しており、可能な範囲でその理解を試みてみたい。

先ず、径20mを超える大規模環状列石に関しては、阿部昭典(阿部 1998)と佐野隆(佐野 1999)の見解を検討する必要がある。阿部は、中期末葉の環状列石をI～III類に分類し、その機能・性格について「環状に巡る列石は広場の外形を囲むように存在することから、列石の機能は中央広場の区画などの視覚的効果を有していたことが想定される」として、「環状列石=中央広場」という認識を提示している。また、その一方で出現の契機を「斜面地への中央広場の造成に伴って、土止めなどの広場造成技法の構築材として用いられた礫と考えられ、ここから環状列石が発生した」とも捉えている。この阿部の理

解については、いくつかの問題を含んでいるが、その一つは列状構造を持たない配石遺構（III類）を環状列石に分類したり、環状列石と弧状列石とを同一分類内で扱っている点と、もう一つはその出現契機を斜面地の掘削・盛土造成における法面保護の石垣的なものに求めている点である。特に後者については、その石積み方法自体が小口積みではなく、強度に劣る横口積み（平積み）であるという土木技術的な観点と共に、前述したような外観的な装飾効果を意識したものであるという点からも首肯できない。

群馬県野村遺跡のように、段状の造成をしてまでも当地点に固執するの方は、ランドスケープ的には山岳や天体運行との関係により選地される必然性が説明し得るであろうが、集落構造の面から見れば雛壇状の住居構築面を必要とした結果と考えることができる。祭儀的エリアと想定される斜面下位の環状列石区画内に立った場合、上方の柄鏡形敷石住居群を見上げる状態となるが、こうした構造こそがこの雛壇状造成に込められた背景と言えよう。環状列石や弧状列石の石積みが斜面上位側に複数段敷設されるのは、法面保護の機能も皆無ではないだろうが、見上げた時の正面観や装飾的効果による重圧感などが求められたためと理解される。つまり、環状列石を頂点とする祭祀構造は、このような柄鏡形敷石住居群を頂点に置くような集落構造を具備していると見なすことができ、さらに一領域内で見れば、他集落との間にこうした環状列石を伴う集落を頂点とする階層的関係の存在を想定することも可能であろう。こうした構造は、弧状列石と特定住居1棟との融合関係を中心とした後期前半の集落構造とは基本的に異なるものであるが、野村遺跡J-14号住居や久森遺跡1号住居などは環状列石外縁部の弧状列石と連接する傾向を見せており、後期前半と通底する様相も存在する。掘削・盛土による斜面地造成や横口積みによる構築の程度は、他の環状列石を伴う集落例ごとに異なっているが、正面観を意識した配列や集落構造などはほぼ共通して認められる。またA類の大規模弧状列石もこれらのあり方と類似している点は、相互に近似した機能・性格を有することを示唆している。

一方、群馬県横壁中村・空沢や長野県大野などの遺跡で見られるB類の弧状列石は、先の大規模環状列石やA類の弧状列石が比較的限定された狭い範囲を囲繞するのに対して、斜面上方の集落全体という広範囲を区画するような結界的要素が窺える。視点を変えれば、集落の内外とを空間的に分離・弁別する様相を看取すことができ、また外観的にも当該集落の特質性を際立たせる効果を有している。晩期の群馬県行沢大竹遺跡（飯田・他1998）や中栗須滝川II遺跡（藤岡市教委1998）でも、集落の台地部と冲積地との境界に列石遺構を巡らせる事例が存在し、これらなども横壁中村遺跡や空沢遺跡のよう

な例とその機能・性格面で通底していると推察される。

列石遺構における結界的な機能・性格の存在は、従来より指摘されてきたことであるが、特に大規模環状列石やA類の弧状列石に囲繞された空間内部に遺構や遺物がほとんど見出せない状況は、当該地点が清掃行為により聖的空間として保持されていた可能性が高く、前段階の環状集落における中央空間部とはその意味を違えていることを示している。ただし、列石内に立石や組石状配石を組み込んでいることなども考慮すれば、単なる結界ではなくその配列そのものにも呪術的性格が付与されていると言えよう。

c. 列石遺構・集団墓を伴う「核家屋」の出現

先述のように後期の列石遺構には、柄鏡形敷石住居・墓域と複合するIaタイプ、柄鏡形敷石住居と連接するが墓域と複合しないIbタイプ、住居とは連接しないが墓域と複合するIIaタイプ、住居・墓域と直接的関係を持たない単独的なIIbタイプなどの4タイプが認められる。IIbタイプの中には、特定住居の背面を囲繞する山梨県塩瀬下原遺跡例（図12-15）の他に、集落の斜面末端に配置される長野県岩下遺跡例（図9-2）もあり、さらに分類し得る。

堀之内1式期以降に顕著に認められる、特定の柄鏡形敷石住居と列石遺構との連接・融合関係は、中期末葉段階の群馬県の久森遺跡や野村遺跡において既にその兆候が認められる。また、山梨県牛石遺跡や静岡県千居遺跡で列石に組み込まれた配石遺構を敷石住居と認定すれば、関東・中部・東海地方の広範囲にわたって生起した先行的な現象と言える。こうした中期末葉でのあり方が、堀之内1式期のそれへと系統的に連続したものであるのか否かが問題であろう。結論的に言えば、中期末葉段階の列石遺構と柄鏡形敷石住居との融合は、1棟の特定住居と言うよりも、柄鏡形敷石住居群との関係に主体が置かれていると考えられることや、称名寺式期での事例が欠落している状況からみて、両者間には直接的な系譜関係が存在しないと言える。おそらく、堀之内1式期の段階で葬祭儀礼の統括者の登場を促すような新たな社会的契機を背景として、特定の柄鏡形敷石住居と弧状列石との融合・一体化が開始されたと考えられるが、この出現のプロセスについては後段において再述したい。

Ia・bタイプの弧状列石を随伴する柄鏡形敷石住居には、①複数回の建て替えや多重複、②集落内の高位置に占地する、③斜面掘削などの土木工事や大規模な列石配置に見る多大な労力投下、などが認められる。①②は、当該柄鏡形敷石住居が集落全体を見下ろせるような同一地点において、かなり長期間にわたって存続したことを見ている。また、③は当該柄鏡形敷石住居の居住者だけでは不可能であり、集落内・外の同系集団の動員により構築されたことを示している。このようにIa・bの

両タイプには共通点がある反面、I b タイプには集団墓的な埋葬施設を伴わないことから見れば、両タイプの柄鏡形敷石住居の居住者が同質の性格を持っていないことは明らかであろう。おそらく、I a タイプの居住者が保持したと推察される葬祭儀礼の統括などの機能・役割は、I b タイプの居住者には希薄であるかあるいはより限定的なものであったのではなかろうか。また同時に、この両タイプが同一集落内で共存する明確な事例が無いことを考慮すれば、そうした差異は個別住居にとどまらず集落を単位として存在したことを窺わせる。

これに関連して注目されるのは、約 3 km の範囲に近接する長野県の岩下遺跡と三田原遺跡の関係であろう。岩下遺跡例は堀之内 1 式～加曾利 B 1 式期にかけての集団墓を伴う I a タイプであるのに対して、三田原遺跡例は埋葬施設を伴わない堀之内 1 式期の I b タイプである。両遺跡が堀之内 1 式期段階で併存していたとすれば、先の想定を傍証するものであるが、同時に相互に異なった機能・性格を持つ特定住居を中心とした 2 つの集落が近接して存在することの意味が問題となろう。この I a タイプと I b タイプの差異は、富樫泰時が東北地方の環状列石について分類した「大湯万座型」と「小牧野型」(富樫 1997) に対応すると考えられ、相互に葬送に関わる観念・儀礼の差を反映している可能性が高い。両遺跡の様相が、繰矢川を挟んで領域を接する異集団間での差異なのか、あるいは同一集団内での差異なのか判然としないが、いずれにしても複雑な社会構造や階層的関係がその背景に存在すると想定される。

ところで、このような I a・b タイプの弧状列石と連接する特定の柄鏡形敷石住居については、既に石井寛が集落の「長」が住まう「核家屋」として取り上げ、その住人を「集落全体の祭祀を司る立場にいた人物」と想定している(石井 1994)。また、この住居の性格について佐々木藤雄は、「集落の「長」という次元を超えた存在、共同の祭儀と自らの威信を重ね合わせることも可能な「地域内小集団」や「地域共同体」の指導者(層)」(佐々木 2003) といった視点からの分析の必要性を説いている。関東・中部地方における I a・b タイプの両者を合わせても 21 例にとどまる現状を考えれば、「核家屋」の居住者が一集落内だけでなく周辺域の複数集落をも統括するような機能・性格を保持していたと見る佐々木の指摘は的を射たものと言えよう。換言すれば、こうした状況は「核家屋」の居住者を頂点とした「地域共同体」社会の階層的構造の存在を示唆するものであろう。

一方、神奈川県曾谷吹上遺跡と長野県北村遺跡では、弧状列石と融合関係を持つ 2 棟の「核家屋」が集落の中心地に同時併存する可能性もあり、後者例については集団内部の分節構造を反映しているという見解もある(小杉 1995)。曾谷吹上遺跡では遺構の詳細が不明であり、

また北村遺跡では同一地点での反復・重複的な遺構構築により断定できる状況ではないが、1 つの集落内に複数の「核家屋」が存在する可能性は皆無ではなく、小杉のような視点からの分析・検討の余地を残している¹⁷⁾。

弧状列石を随伴する「核家屋」の前面部には、中期末葉の大規模環状・弧状列石のケースと同様の空間部が広がっているが、おそらくこうしたエリアは地域内集団の共同的な祭祀や葬送に関わる儀礼を執行する場としての機能・性格を有していた可能性が高いだろう。しかし、それが中期末葉段階と異なるのは、1 棟の「核家屋」の居住者を中心としてそうした儀礼の統括・執行がなされていたと推定されることである。

d. 「核家屋」の系譜と周堤礫を伴う柄鏡形敷石住居

列石遺構とは直接的な関係を持たないが、先の「核家屋」の系譜を考える上で、主体部外縁をいわゆる周堤礫で囲繞する柄鏡形敷石住居の存在が重要であり、これについて若干検討をしておきたい。

図13は、関東・中部・東海地方の周堤礫をもつ柄鏡形敷石住居を集成したものである。管見に触れた代表的なものを扱っており遺漏もあるが、分布的には神奈川県西部域や八ヶ岳南麓から西麓にかけた長野・山梨県域、それに犀川や千曲川上流の長野県東部域に多見される傾向にある。また、群馬県西部域でも近年いくつかの検出事例があり、基本的に中期末葉段階の柄鏡形敷石住居の分布域と重複することが窺える。残存状態の良好な図13-1・2・4～7 の各住居の周堤礫を見ると、いずれも主体部の掘り込みや敷石範囲から 1 m 前後離れて配置されるが、張出基部からその両側へ弧状に延びる配石とも連接して、両者が一体のものとして構築されていたことが看取される。また、同一 2・5・8・9 などの事例では、3～4 段に積み上げられた周堤礫が主体部方向へ斜め倒し状に崩落した状態が観察できる。こうした周堤礫については、住居に付随する何らかの施設とする見解と、廃屋儀礼に伴う配石遺構という見解に二分されている。後者を代表する山本暉久は、屋内の柱穴と重複する位置に配置された「周礫」や「環礫方形配石」を含めて、「柄鏡形敷石住居を廃絶する過程において、なんらかの儀礼行為として、そうした配石・配礫行為が行われた」と再論している(山本 2002)。これに対して石井寛は、住居構造の見地から張出基部の列石や周堤礫に検討を加え、これらを「住居外部からの視線が意識された施設」(石井 1996) と想定し、併せて「核家屋」に比定している。また石井と同様に、末木健は塩瀬下原遺跡 1 号敷石住居(図13-9) の奥壁部を中心に検出された周堤礫(上部配石)について、「山側に築いてあった住居外壁の石積みが住居内部に倒壊」したものと解釈し、壁立ち住居の外壁石積みとして想定復元すると共に「核家屋」に比定している(末木 2000)¹⁸⁾。壁立ち住居の当否は置くとし

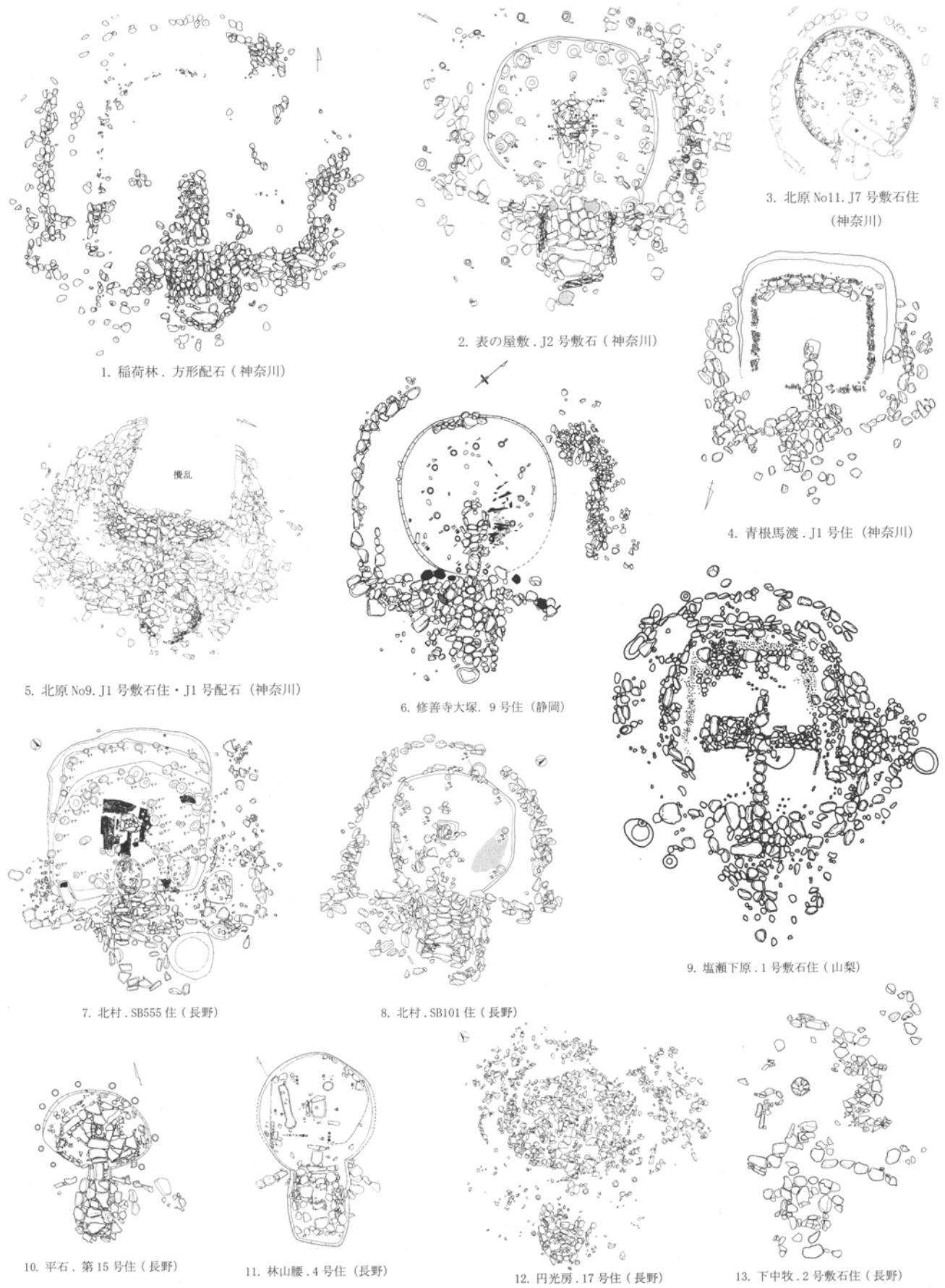


図13 関東・中部・東海地方の周堤礫を持つ柄鏡形敷石住居 (1/200)

て、屋根裾部に石積み状や葺き石状に配置されていたという理解は、廃屋儀礼によらなくともそうした上部配石が形成され得ることを示した点で注視されよう。換言すれば、柄鏡形敷石住居に付随する配石遺構の中には、屋外で「施設」的に構築されるものが存在すると考える必要があろう。しかし、そうした屋外施設的な配石が存在したと仮定した場合でも、屋根や外壁の保護を主目的とするような実用的施設に限定することはできない。なぜなら、このような屋外配石を伴う事例は極めて僅少であり、塩瀬下原遺跡や北原遺跡でも各1例の検出を見るにとどまっているからである。つまり、特定の集落内かつ特定の柄鏡形敷石住居にのみ認められるものと言えよう。こうした状況は、先の「核家屋」のあり方とも共通する点が多く、同時期の一般的な住居とは機能・性格を違えることが想定される。この屋外施設的な配石にも呪術的な意味合いが込められていたであろうが、外観的には石積みの装飾的効果による重壮さも附加され、特別な家屋としての識別を容易にしていたと考えられる。I a・bタイプの弧状列石を随伴する「核家屋」とは異なるものの、各事例の集落内では周堤礫を有する同時期の柄鏡形敷石住居が複数併存したことや、外観的に他住居と明瞭に区別された葺き石状の石積みなどから見て、それに近似した機能・性格を保持していたと理解される。

図13のように、柄鏡形敷石住居に周堤礫が付随する初期は、北原No.9遺跡J7号敷石住居や北裏No.11遺跡J1号敷石住居の事例から堀之内1式期に比定されるが、他の事例は堀之内2式～加曾利B1式期にかけて変遷しており、弧状列石や墓域を随伴する柄鏡形敷石住居の消長と軌を一にしていることが窺える。また、先のI a・bタイプの柄鏡形敷石住居の中にも周堤礫を有するものがあり、神奈川県の下北原遺跡第3環礫方形配石遺構(図7-9)、曾谷吹上遺跡10号住居(図7-12)、三ノ宮・下谷戸遺跡扇形敷石(図6-5)、長野県北村遺跡SB555号住居(図13-7)、山梨県川又遺跡(図12-16)などを挙げることができる。いずれも加曾利B1式期に比定される点は、当該期に「核家屋」への加飾がより強化されたことを示している。

ここで注目しておきたいのは、周堤礫と連接する張出基部の左右に展開する弧状列石的な配列である。その規模こそ異なるものの、Iタイプの弧状列石と類似した様相を呈しており、両者の間で共通した観念の存在を窺うことができる。一步考えを進めれば、I a・bタイプの弧状列石はこの張出基部の列状配置が、何らかの契機により新たな意味を附加されて拡大・延長されたものと理解することもできよう。前述したように、中期末葉の列石遺構と後期前半のそれとは、直接的な系譜関係を持たない。上記の想定が正しいとすれば、柄鏡形敷石住居と連接する後期前半の弧状列石の形成は、その住居構造に

付随した装飾的要素の中から生じたと言えよう。もちろん、そうした装飾的要素は祭祀・呪術的な性格を多分に帯びたものであり、「核家屋」のような特定住居の出現を促す階層的な社会構造がその背景に存在しているのであろう。また、同時にこうしたことは、中期末葉の環状列石が質的転換を遂げて後期の「核家屋」に随伴する弧状列石に置換されたのではなく、環状列石が保有していた基本原理や機能・性格は、直接的には後期の弧状列石に継承されなかったことを意味するものだろう。

c. 「核家屋」の消滅と弧状列石の変容

後期前半の列石遺構に見る特徴的な様相は、やはり限定された集落遺跡で特定の柄鏡形敷石住居に付設されるIタイプの弧状列石の存在であろう。こうした特定の柄鏡形敷石住居=「核家屋」との融合・一体化は堀之内1式期に始まり、堀之内2式期には弧状列石の下部に集団墓を随伴するI aタイプが出現して、集団墓を伴わないI bタイプと共に2つの系統を構成するが、両タイプともに加曾利B1式期内で終焉を迎える。こうした動向は、東海地方では事例が乏しいために判然としないものの、関東・中部地方ではほぼ軌を一にして推移していることが確認できる。

このIタイプの弧状列石の消滅と相前後して、列石下部に集団墓を随伴しつつも「核家屋」とは融合的な関係を持たないII aタイプの弧状列石が顕在化し、後期後半以降の列石遺構を象徴するものとなる。つまり、こうした状況は、「核家屋」の居住者によって直接的に統括されていた葬祭儀礼が、その手を放して別の様態へと変化したことを示唆するものであろう。後期後半以降には、特定住居との関係だけでなく、居住域から分離・独立するものも存在し、葬墓制や社会構造の変質・多様化を窺うことができる。こうした状況の背景について詳述することはできないが、群馬県行田梅木平遺跡(1号配石墓群)・長野原本松遺跡・長野県北村遺跡・山梨県青木遺跡などに見られる加曾利B式期の配石墓・石棺墓群の2列構成や頭位方向の二極性の顕在化に象徴されるような、階層的あるいは分節的な社会構造の深化などが、何らかの関連性をもつと推察される。

6. おわりに

関東・中部・東海地方においては、大規模な環状・弧状の形態を呈し、かつ列状構造を有する列石遺構は縄文時代中期末葉段階に出現し、そして後期前半まで継続することなくその段階内という短時間で終焉することを確認することができる。また、それら列石遺構の下部や区画内部には、埋葬施設が構築されることなく、直接的に墓とは関係しない遺構であったことも確実であろう。そして、後期前半の堀之内1式期においては、「核家屋」の顕在化とその主体部外縁を囲繞する周堤礫に象徴され

る加飾傾向の中から、張出基部に連接する弧状列石が派生し、さらに堀之内2式期にはその下部に配石墓や石棺墓などの集団墓を組み込むという、特定住居+列石遺構+墓の関係が明瞭化するようになる。しかし、加曾利B1式期には特定住居との融合関係も崩壊の兆しを見せ始め、後期後半以降には列石遺構+墓に分離されると共にその構築が居住域から分立する傾向が認められた。

このような中期末葉から後期前半にかけた列石遺構の動向について、「集落内環状列石」から「集落外環状列石」への変遷を想定し、それを祖先祭祀の特殊化・高次化の過程と捉える見解もある（佐々木 1999）。こうした理解については、あらためて指摘するまでもなく、関東・中部地方の中期末葉の「集落内環状列石」に埋葬施設が伴うことはなく、後期前半において「集落外環状列石」が形成されることもなかった。つまり、関東・中部地方では、東北地方北部域の小牧野・伊勢堂岱・大湯の各遺跡に構築された後期前半の環状列石とは、異なった原理・観念の基に中期末葉および後期前半の列石遺構が存在したと言える。当該域における中期末葉から後期前半における列石遺構の様態は、特定集落から特定住居＝「核家屋」への帰属に収斂してゆく動向が認められ、葬祭儀礼を媒介とした社会構造の階層性と複合性の深化する過程を窺うことができよう。

本稿では、中期末葉～後期前半の明確な列状構造を持つ環状列石や弧状列石などの配石遺構を分析の中心課題としたために、不定形な配石遺構については扱えなかった。数量的には後者の方が前者を凌駕しており、当該期の配石遺構を理解するためには両者を含めての分析が必要なことは言うまでもない。また、筆者が群馬県域で試みたような周辺域に展開する集落動向との関係把握も、列石遺構を伴う集落の機能・性格を考える上で無視することのできない要点であろう。今回の分析は、関東から中部・東海地方までの列石遺構を一瞥したに過ぎず、各地域における個別的・普遍的様相や相互間の関連性を追求するためには、先の諸点を含めた資料分析が必要不可欠であるが、これらの問題については今後の研究課題とし、ひとまず擱筆しておきたい。

（2004年3月5日 稿了）

謝辞

本稿を草するにあたり、閑間俊明・氣賀澤 進・小池岳史・佐野 隆・福島 永・百瀬忠幸・山路恭之助の各氏には、資料の実見に際して種々のご配慮をいただき、また阿部昭典・石井 寛・池谷信之・牛丸岳彦・櫛原功一・佐藤雅一・島田哲男・大工原 豊・寺崎祐助・奈良泰史・花岡 弘・平林 彰・藤巻幸男・守矢昌文・山崎克巳・綿田弘実の各氏には、文献や資料の検索で多大なご教示・協力をいただいた。文末ながら、記して深甚な

る感謝の意を表する次第である。

註

- 1) 塚越向山の「環状列石」は、西半部の石材が径40cmの大河床礫や亜角礫を主体として、広口縦列や乱石積みにより明確な列状構造を持つて構築されるのに対して、東半部は拳大の小礫で散在的なり方を示すことや列状構造を持たないことなど、両側のあり方は大きく異なっている。報告書の掲載写真で見る限り、この東半部については段丘礫層が露出しているだけの可能性も窺え、当例は環状列石ではなく延長約30m弱の大規模な弧状列石と認定されよう。これ以外に、1～5・7号配石などが存在するが、2号配石は礫の平坦面を削った石敷きや埋設土器などのあり方から見て加曾利E4式期の敷石住居の残骸の可能性が高く、7号配石は中央部に円形板状礫を置いた組石状配石であろう。また、不定形状の1号配石の時期は、下部からの勝坂II式土器により同期とするが、確定できる状況ではない。
- 2) 幅田遺跡でも「環状列石」とされる配石遺構が検出されているが、200m弱の調査によりその一部を調査しただけであり、その形態だけでなく列石遺構か否かも断定できない。なぜなら、第I～V址の5ブロックに分割された「環状列石」の第IV址では、方形の石組炉が存在しており、「I・II号特殊遺構」と同様に敷石住居を誤認している可能性が高いからである。従って、本稿の分析事例からは除外してある。
- 3) 図4-3に掲載した牛石遺跡の環状列石の平面図は、都留市史（奈良 1986）に掲載された原図に基づいているが、それには縮尺が明記されていない。ここでは新津健の作成した「シンポジウム 繩文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—」の資料集（新津 1990）に準拠して縮尺を記入したことをお断りしておきたい。
- 4) 奈良泰史氏のご教示による。
- 5) 「環礫方形配石遺構」については、主に柄鏡形敷石住居の柱穴配列部に重複して構築されるいわば住居と一体の施設とする見解（秋田 1991、石井 1996）と、廐屋儀礼に伴う配石行為という見解（山本 2002）に分かれる。未だ決着を見ない問題であるが、筆者は以前に前者の観点からその系譜が中期末葉の柄鏡形敷石住居に求められることを論じたが（石坂 1985）、現在も同様の見地に立っている。
- 6) 東側の弧状列石は、6号住居の東側へも約6mほど延びていたことが、飛び石状に残された用石のあり方から窺うことができる。
- 7) これについて石井寛は、「6号及び10号敷石住居址の張出部基部から左右に広がる施設」（石井 1994）としてその前段階の8号や5号住居との関係を考えていないようであり、筆者とは見解が異なる。
- 8) 弧状列石を随伴する敷石住居には、柄鏡形を呈するものと方形状の2形態が存在する。方形状の敷石住居については、柄鏡形敷石住居に系譜を持つ「方形周石住居」とも呼称され、後期後半以降に顕在化することが指摘されている（新津 1992）。時期的には、本稿の守備範囲を超える住居と言えるが、弧状列石との関係において後期後半の様相を見極める必要があることから、その類例を含めて扱っておきたい。
- 9) 報告者の宇賀神は、これを「環状集落」と認識しているが、居住帶の構成は弧状であって環状形態を持たない。これは、中期後半の環状集落と同様の構成原理に基づくのではなく、13号住居に付随する弧状列石が囲繞した空間構造に規制されていることを示している。
- 10) これについては、1968年の報告では「この半輪形の配石址群は環状のものが崩れたもの」とされているが、少なくとも環状形態を持たない。また、当遺跡の遺構名については、1968年報告（三上・上野 1968）と1983年報告（上野佳也・他 1983）とではかなり大きく変更されていて、本稿では後者の報告内容に従った。
- 11) 弧状列石の番号については、調査報告書内の挿図と本文とでは1・2号の扱いが逆になっている。ここでは、挿図中の番号に準拠した。
- 12) この住居は「集石遺構」とされているが、調査担当者の山路恭之助氏への聞き取り調査により、加曾利B1式期の柄鏡形敷石住居であることを確認した。
- 13) 12号住居の時期については、櫛原功一氏のご教示を得た。
- 14) 掲載されたC・D区の全体図から判断すると、この弧状列石は南側のSH33配石遺構の方向へと延長している状況も窺えるが、この場合には総延長が約24mとなる。
- 15) 山梨県明野町屋敷添遺跡でも、中期末葉～後期前半の列石遺構を含む配石遺構が検出されているが、担当者の佐野隆氏のご教示によればやはり各時期毎に地点を変えて構築されているようである。
- 16) 列石遺構が、中期末葉～後期前半にかけて継続的に構築される事例

に、静岡県の上白岩遺跡や破魔射場遺跡などがある。しかし、上白岩遺跡は保存措置による範囲確認等の部分的調査にとどまっており、確定できる状況ではない。また破魔射場遺跡は、同一地点に中期末葉と後期前半の配石遺構が重層的に存在するとされているが、これについては前章で分析したように根柢が明白ではなく、むしろ共に後期前半に帰属する可能性が高い。

- 17) これに関連して、北村遺跡のE区配石墓群から西側に100m離れた斜面下位のC・D区に、堀之内2式期の周堤礫を持つSB101住居(図13-8)が存在し、ミニチュア土器や土偶などの伴出を含めて他の一般的な住居とは異なっている。当該住居と、弧状列石や配石墓群を随伴する同期の「核家屋」であるE区SB566号住居と併存した場合には、SB566号住居の居住者を頂点に一般的な住居々住者との間に位置するサブリーダー的な存在が窺え、複雑な階層的構造の存在も考慮される。
- 18) 末木健は、この1号敷石住居の周堤礫に「小牧野式」構築法の存在を指摘しているが、似て非なるものである。基本的に、中期末葉の群馬県野村遺跡で認められる広口縦列配置の列石上位面に複数段を横口積みにする手法と同一であり、中期末葉から後期前半期の関東・中部地方を含めた広域に採用されていたことを示す事例である。

引用資料

【群馬】

- 赤山容造・他 1980 『三原田遺跡(住居篇)』第一巻 群馬県企業局
 石井克巳 2000 『浅田遺跡』子持村教育委員会
 大江正行・他 1990 『仁田遺跡・暮井遺跡』群馬県埋文事業団
 大賀 健・他 1997 『下鎌田遺跡』下仁田町遺跡調査会
 大塚昌彦 1993 『第一章 原始・古代』『渋川市誌 通史編・上 原始～近世』渋川市市誌編さん委員会
 金子正人・他 1999 『坂本北裏遺跡』松井田町埋蔵文化財調査会
 軽部達也・他 2001 『東平井寺西遺跡』藤岡市教育委員会
 菊池 実・他 1990 『田篠中原遺跡』群馬県埋文事業団
 関根慎二・他 1997 『白川傘松遺跡』群馬県埋文事業団
 千田茂雄 2003 『1 野村遺跡・野村II遺跡』『東上秋間遺跡群発掘調査報告書』群馬県安中市教育委員会
 田村公夫・他 2000 『長久保大畑遺跡・新田入口遺跡』群馬埋文事業団
 富田孝彦 2000 『坪井遺跡II』群馬県吾妻郡長野原町教育委員会
 長谷川福次 1993 『前中後II遺跡』『村内遺跡I』北橘村教育委員会
 藤巻幸男 2000 『横壁中村遺跡』『年報』19 群馬県埋文事業団
 藤巻幸男 2002 『横壁中村遺跡』『年報』21 群馬県埋文事業団
 藤岡市教育委員会 1998 『C13 中栗須滝川II遺跡』『年報』13
 間宮政光 1997 『行田梅木平遺跡』松井田町遺跡調査会
 丸山公夫・他 1985 『久森環状列石遺跡』『上沢渡遺跡群』群馬県吾妻郡中之条町教育委員会
 諸田康成・他 2002 『長野原本松遺跡(1)』群馬県埋文事業団

【栃木】

- 辰巳四郎 1976 『佐貫環状列石』『栃木県史 資料編・考古一』栃木県
 渡辺龍瑞 1976 『真子遺跡』『栃木県史 資料編・考古一』栃木県
 【埼玉】

- 小林 茂・橋本康司 1995 『塚越向山遺跡』『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』合角ダム水没地域総合調査会
 渡辺清志 2000 『浜平岩陰・入波沢西・入波沢東』埼玉県埋文事業団
 【東京】

- 浅川利一・戸田哲也・他 1969 『田端遺跡調査概報—第1次—』町田市教育委員会

【神奈川】

- 天野賢一・他 2002 『川尻中村遺跡』かながわ考古学財団
 池田 治 1996 『道志導水路遺跡群 青根馬渡遺跡群No.4 遺跡』『年報』3 かながわ考古学財団
 市川正史・恩田 勇 1994 『宮ヶ瀬遺跡群IV 北原(No.9) 遺跡(2)・北原(No.11) 遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター
 江藤 昭 1981 『稻荷林遺跡』相模原市下溝稻荷林遺跡調査団
 恩田 勇・他 1997 『宮ヶ瀬遺跡群XIII 表の屋敷(No.8) 遺跡』かながわ考古学財団
 小出義治 1971 『神奈川県三の宮配石遺構』『北奥古代文化』第3号
 宍戸信悟・松田光太郎・他 2000 『三ノ宮・下谷戸遺跡(No.14)』かながわ考古学財団
 鈴木次郎・近野正幸 1995 『宮ヶ瀬遺跡群V 馬場(No.6) 遺跡』かな

がわ考古学財団

- 鈴木保彦・大上周三 1997 『下北原遺跡』神奈川県教育委員会
 鈴木保彦・他 1977 『当麻遺跡・上依知遺跡』神奈川県教育委員会
 高山 純・他 1975 『曾谷吹上一配石遺構発掘調査報告書—図録篇』

【長野】

- 友野良一・他 1979 『堂前』飯島町教育委員会
 畔上秀雄・田川幸生・他 1981 『伊勢宮』山ノ内町教育委員会
 今村善興・他 1995 『根吹』下伊那郡阿南町教育委員会
 上野佳也・他 1983 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』軽井沢町教育委員会
 宇賀神誠司・川崎 保・他 2000 『三子塚遺跡群・三田原遺跡群・岩下遺跡・石神遺跡群・郷土遺跡・東丸山遺跡・西丸山遺跡・深沢遺跡群』長野県埋蔵文化財センター

- 大場磐雄・他 1976 『上原』長野県文化財保護協会

- 小川岳史・柳川英司 1994 『立石遺跡』茅野市教育委員会
 木下平八郎・他 1995 『の場・門前遺跡』駒ヶ根市教育委員会
 小池岳史 2003 『塩之目尻遺跡の発掘調査』『信濃考古』No.171 長野県考古学会

- 小林深志・武藤雄六 1994 『勝山遺跡』茅野市教育委員会
 酒井幸則・桜井弘人 1984 『前田遺跡』松川町教育委員会
 佐藤聰信・山下誠一 1987 『殿原遺跡』飯田市教育委員会
 林 茂樹 1990 『小林遺跡』『反目・遊光・殿村・小林遺跡』駒ヶ根市教育委員会

- 原田政信・森鷗 稔 1990 『円光房遺跡』戸倉町教育委員会
 平林 彰・他 1993 『北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター
 福島 永 2003 『羽場崎遺跡発掘調査概要』『信濃考古』No.174 長野県考古学会

- 福島邦男 1989 『平石遺跡』望月町教育委員会
 松永満夫 1990 『下中牧遺跡』信州新町教育委員会
 三上次男・上野佳也 1968 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』軽井沢町教育委員会

- 宮坂英式 1957 『尖石』茅野町教育委員会
 武藤雄六・宮坂光昭・他 1978 『曾利』富士見町教育委員会
 百瀬忠幸・佐々木藤雄 2001 『第15章 大野遺跡』『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書—H.8～H.12年度—』大桑村教育委員会

- 【山梨】
 雨宮正樹・山下孝司・櫛原功一 1988 『山梨県高根町青木遺跡調査概報』『山梨県考古学協会誌』2
 笠原みゆき・他 2001 『塩瀬下原遺跡(第4次調査)』山梨県教育委員会

- 櫛原功一 1987 『姥神遺跡』大泉村教育委員会
 佐野 隆 1993 『屋敷添』明野村教育委員会
 笠原みゆき・他 2000 『大月遺跡(第10次調査)』山梨県教育委員会
 十菱駿武・他 1998 『大柴遺跡』須玉町史 考古・古代・中世』北巨摩郡須玉町

- 長沢宏昌・笠原みゆき 1996 『中谷遺跡』山梨県教育委員会
 奈良泰史 1981 『中谷・宮脇遺跡』都留市教育委員会
 奈良泰史 1986 『牛石遺跡』『都留市史 資料編 地史・考古』都留市新津 健・他 1989 『金生遺跡II』(縄文時代編)山梨県教育委員会

- 村松佳幸・他 1999 『宮久保遺跡』長坂町教育委員会
 山下孝司・榎本 勝 1985 『中田小学校遺跡』韮崎市教育委員会
 山下孝司 1989 『後田遺跡』韮崎市教育委員会
 山下孝司 1990 『北後田遺跡』韮崎市教育委員会
 山路恭之助・他 1998 『川又遺跡』須玉町史 考古・古代・中世』北巨摩郡須玉町

- 【静岡】
 井鍋誓之・他 2001 『富士川SA 関連遺跡—破魔射場遺跡・谷津原古墳群・北久保遺跡—』静岡県埋蔵文化財調査研究所

- 漆畠 稔・他 1990 『公藏免遺跡発掘調査報告書』静岡県大仁町教育委員会
 小野真一・他 1975 『千居』加藤学園考古学研究所
 小野真一・他 1979 『年川前田一伊豆における配石遺構を伴う縄文時代遺跡—修善寺町教育委員会

- 小野真一・他 1982 『修善寺大塚』修善寺町教育委員会
 小野真一・他 1992 『上白岩遺跡—第9次調査報告書一』中伊豆町教育委員会
 93

斎藤 忠・平野五郎・他 1979 『上白岩遺跡発掘調査報告書』中伊豆町教育委員会

参考文献

【あ】

秋田かな子 1991 「柄鏡形敷石住居研究の視点」『東海大学校地内遺跡調査報告書』2

秋元信夫 1999 「遺構研究 環状列石」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会

阿部昭典 1998 「縄文時代の環状列石—新潟県中魚沼郡津南町道尻手遺跡・堂平遺跡を中心として—」『新潟考古学談話会会報』第18号 新潟考古学談話会

阿部昭典 2000 「縄文時代中期末葉～後期前葉の変動—複式炉を有する住居の消失と柄鏡形敷石住居の波及—」『物質文化』第69号

阿部義平 1968 「配石墓の成立」『考古学雑誌』第54巻第1号

阿部義平 1983 「配石」『縄文文化の研究』9 雄山閣

安斎正人 2002 「序論 縄文社会論へのアプローチ」『縄文社会論(上)』同成社

石井 寛 1994 「縄文時代後期集落の構成に関する一試論—関東地方西部域を中心に—」『縄文時代』5 縄文時代文化研究会

石井 寛 1995 「縄文時代掘立柱建物址に関する議論」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集帝京大学山梨 文化財研究所

石井 寛 1996 「縄文中期最終末期以降の集落と住居址—横浜市港北ニュータウン地城を例に—」『パネルディスカッション『敷石住居の謎に迫る』資料集』神奈川県立埋文センター・かながわ考古学財団

石井 寛 1998 「柄鏡形敷石住居址・敷石住居の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』9 縄文時代文化研究会

石井 寛 2001 「関東地方における集落変遷の画期と研究の現状」『第1回研究集会 発表要旨 縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会

石井 寛 2003 「東北地方における礫石附帯施設を有する住居址とその評価—中期最終末期以降を対象として—」縄文時代14 縄文時代文化研究会

石坂 茂 1985 『荒砥二之堰遺跡』群馬県埋文事業団

石坂 茂・大工原 豊 2001 「群馬県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究集会 基礎資料集列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会

石坂 茂 2002 「縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現—各時期における拠点的集落形成を視点とした地域的分析—」『研究紀要』20 群馬県埋文事業団

【か】

柳原功一 1995 「柄鏡形住居の柱穴配置」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集

柳原功一 2001 「山梨県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究集会 基礎資料集 列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会

笠原みゆき 2002 「塩瀬下原遺跡出土の敷石住居跡について」『研究紀要』18 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

小杉 康 1991 「縄文時代に階級社会は存在したのか」『考古学研究』第37巻第4号 考古学研究会

小杉 康 1995 「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立—『葬墓祭制』の構造と機能—」『駿台史学』第93号 駿台史学会

【さ】

佐々木藤雄 2001 「1. 大野遺跡B地区出土の環状列石について」『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書—H. 8～H. 12年度—』大桑村教育委員会

佐々木藤雄 2002 「環状列石と縄文式階層社会—中・後期の中部・関東・東北—」『縄文社会論(下)』同成社

佐々木藤雄 2003 「柄鏡形敷石住居址と環状列石」『異貌』第21号 共同体研究会

佐野 隆 1999 「曾利式土器文化圏における墓域の特徴と変遷についての予察」『山梨考古学論集』IV 山梨県考古学協会

佐野 隆・小宮山 隆 1994 「縄文時代配石研究の一視点」『山梨考古学論集』III 山梨県考古学協会

佐野 隆 2001a 「金生遺跡と階層性」『山梨県考古學協會誌』第12号 山梨県考古学協会

佐野 隆 2001b 「縄文時代の信仰と祭祀」『山梨県考古學協會誌』第12号 山梨県考古学協会

佐野 隆 2003 「縄文時代中期の住居内配石について—敷石住居発生以前の住居内祭祀施設の様相—」『山梨県考古學協會誌』第14号 山梨県考古学協会

末木 健 2000 「縄文時代石積みについて(予察)一山梨県塩瀬下原遺跡の敷石住居復元—」『山梨県考古学協會誌』第11号山梨県考古学協会

鈴木保彦 1976 「環礫方形配石遺構の研究」『考古学雑誌』62-1

鈴木保彦 1990 「関東・東海における配石遺構の変遷」『山梨県考古学協会秋期大会資料集 シンポジウム縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—』山梨県考古学協会

【た】

大工原 豊・林 克彦 1995 「配石墓と環状列石—群馬県天神原遺跡の事例を中心として—」『信濃』第47巻第4号

大工原 豊 2004 「配石記念物の生み出す景観と二至二分」『考古学ジャーナル』No.513

田川幸生 1995 「山内町伊勢宮遺跡の柄鏡形敷石住居址」『研究紀要』第1号 長野県立歴史館

田代 孝 1989 「縄文時代の丸石について」『山梨考古学論集』II 山梨県考古学協会

塙原正典 1987 「考古学ライブリー—49配石遺構」ニューサイエンス社

塙原正典 1989 「縄文時代の配石遺構と社会組織の復元」『考古学の世界』慶應義塾大学民族学考古学研究室編 新人物往来社

【な】

中村 大 1999 「墓制から読む縄文社会の階層化」『最新縄文の世界』朝日新聞社

新津 健 1990 「山梨における屋外配石の変遷」『シンポジウム 縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—』山梨県考古学協会秋期大会資料集 山梨県考古学協会

新津 健 1992 「縄文晚期集落の構成と動態—八ヶ岳南麓・金生遺跡を中心に—」『縄文時代』3 縄文時代文化研究会

【は】

平林 彰 1990 「長野県の配石遺構」『山梨県考古学協会秋期大会資料集 シンポジウム縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—』山梨県考古学協会

【ま】

水沢教子 2002 「千曲川水系における柄鏡形敷石住居の成立」『長野県の考古学』II 長野県埋蔵文化財センター

本橋恵美子 1995 「縄文時代の柄鏡形敷石住居の発生について」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集

本橋恵美子 2003 「縄文時代中期後葉の住居構造の分析—浅間山麓周辺における柄鏡形住居の発生について—」『長野県考古学会誌』103・104号

【や】

山崎 太 1976 「縄文時代配石遺構研究概史(1)・(2)」『New Wave Archaeology』Vol 2・3 同人新しい考古学の波

山本暉久 1981 「縄文時代中期後半期における屋外祭祀の展開—関東・中部地方の配石遺構の分析を通じて—」『信濃』第33巻第4号

山本暉久 1985 「いわゆる「環礫方形配石遺構」の性格をめぐって」『神奈川考古』第20号

山本暉久 1987 「敷石住居終焉のもつ意味(1)～(4)」『古代文化』第39巻第1～4号 古代學協會

山本暉久 1996 「敷石住居址研究の現状と課題」『パネルディスカッション『敷石住居の謎に迫る』資料集』神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団

山本暉久 1999 「遺構研究 配石遺構」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会

山本暉久 2002 「第3節 柄鏡形(敷石)住居と廃屋儀礼」『敷石住居の研究』六一書房

【わ】

渡辺 仁 1990 『縄文式階層化社会』六興出版